

熊本県文化財調査報告 第62集

梅ノ木遺跡

熊本県菊池郡菊陽地区県営圃場整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告

1983

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第62集

梅ノ木遺跡

熊本県菊池郡菊陽地区県営圃場整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告

1983

熊本県教育委員会

序 文

近年、県営圃場整備事業に伴って埋蔵文化財が発見される機会が増加しております。今回、菊陽地区県営圃場整備事業計画実施にあたり、周知の遺跡である梅の木遺跡が含まれることが判明しました。

私たちの祖先が残した貴重な文化財は、子孫へと継承するのが私たちの責務かと思いますが、開発に際して現状保存には限度があります。そこで、事業実施前に埋蔵文化財の確認調査を実施し、可能な限り現状保存に努め、その保存が不可能なものについては記録保存の措置を取っております。

梅の木遺跡については、試掘調査を実施後、関係機関と協議の結果、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査の実施にあたりましては、県農政部、県菊池事務所、菊陽町をはじめ、多くの方々から御協力を賜りました。ここに心から御礼を申し上げます。

この調査報告書が広く県民の皆様に利用され、文化財に対する关心と認識を深めていただければ幸いです。

昭和58年 3月31日

熊本県教育長 外 村 次 郎

例　　言

1. 本書は県営菊陽地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査に先立つ県文化課による試掘調査についても併せて報した。
3. 発掘調査は平岡勝昭と鶴島俊彦が担当し、昭和57年5月4日～9月7日まで実施した。
4. 造構の実測撮影は、平岡・鶴島があたったが、一部については松本健郎・古森政次・清田純一・田尻悦子・西住欣一郎（以上県文化課）のほか、前田哲男・福田博之（熊本短期大学文化財研究会）の協力を得た。
5. 本書の執筆は第1章・第2章・第3章・第5章を平岡が、第4章を鶴島が担当したが、鉄製品と縄文時代の石斧類については古森の協力を得た。
6. 遺物の実測、製図は平岡・鶴島のほか、古森・木崎康弘・森山栄一・河北毅・米原圭子（県文化課）・松田まゆみ・末本八珠美・藤崎伸子（熊本大学考古学研究室）があたった。
7. 本書の実測図に用いている方位は、原則として磁北によるものである。
8. 造構については便宜的にSB（竪穴住居跡）・SX（特殊造構）という記号を用いた。
9. 発掘調査に際しては、白木原和美（熊本大学教授）、甲元真之（熊本大学助教授）の両氏から現地での御指導をいただき、調査終了後に甲元助教授から遺物に関しての御教授をいただいた。人骨（歯）については、北条暉幸（産業医科大学教授）に鑑定を依頼した。記して謝意を表する。
10. 本書の編集は、県文化課で平岡・鶴島が行なった。

目 次

15

第1章 序 説

第1節 調査に至るまで

第2節 調査団の編成

65

第2章 調査の概要

第1節 調査地区

第2節 発掘調査の経過

144

第3章 位置と歴史的環境

第4章 遺構と遺物

第1節 調査地の土層

第2節 遺構各説

第3節 出土遺物

第5章 総 括

第1章 序 説

第1節 調査に至るまで

県営圃場整備事業菊陽地区については、周知の埋蔵文化財包蔵地として梅ノ木遺跡が登録されていた。しかし、菊陽町教育委員会では当地区内全域について、日本考古学協会会員杉村彰一氏に依頼し分布調査を実施した。その結果次のような報告を熊本県教育委員会に提出し、調査の協議をした。

埋蔵文化財分布調査について（報告）このことについて下記のとおり報告します。

記

1. 目的 農業構造改善事業にともなう埋蔵文化財分布調査
2. 調査期日 昭和56年1月17日、2月15日
3. 調査員 杉村彰一（日本考古学協会会員）
4. 立会者 服部誠也（菊陽町教育委員会）
中村藤平（菊陽町文化財保護委員）
河北憲一（　　・　　・　　）
5. 遺跡名

(1) 梅ノ木遺跡

上記の遺跡は周知の埋蔵文化財である。弥生時代後期の甕棺、石棺材の出土が知られており重要遺跡と考えられる。また経8m高さ1mの盛土（性格不明）それに梅ノ木紫跡も確認されるので事前に試掘の必要がある。

(2) 津久礼六地蔵遺跡

上記の遺跡は周知の埋蔵文化財である。弥生時代後期の土器散布地。事前に試掘の必要がある。

(3) 上津久礼眼鏡橋

延宝年間築造の眼鏡橋できわめて重要と考えられる、現地保存を強く望みたい。（二連式）

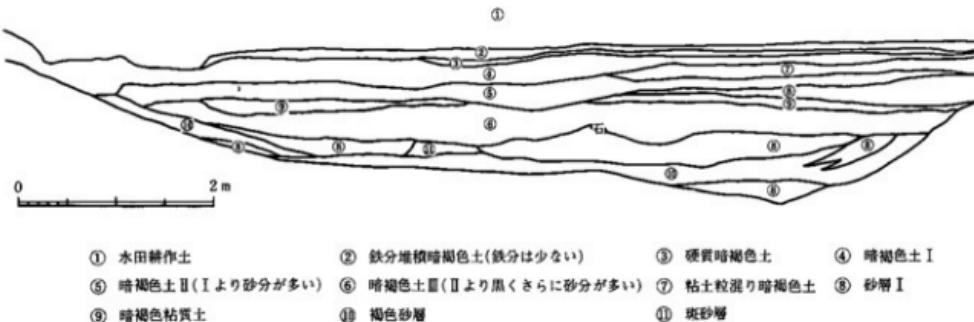
(4) 津留遺跡

上記の遺跡は周知の埋蔵文化財である。古墳時代の土師器、須恵器の出土があり住居跡の可能性がある。事前に試掘の必要がある。

(5) 久保田中岡遺跡

上記の遺跡は周知の埋蔵文化財である。古墳時代の土師器の出土があり住居跡の可能性があるので事前に試掘の必要がある。

昭和56年度事業開始にあたり、県教育委員会では、試掘調査を実施した。（図1 参照）調



第1図 第3排水路南端試堀トレーン断面図 実測、作図、廣瀬正照 トレス（米原）

査は工区内の周知の遺跡部分について実施することとし、排水路予定地に試掘溝を入れることにした。排水路は東より1号、2号、3号と呼び梅ノ木遺跡については排水路から遺物と住居跡らしい構造が発見された。また、水路付近には支石墓らしいものが祭祠されており、別に高さ2m位の壇状の遺構も存することが判明した。その結果工事図面を詳細に検討してみると遺構面が削平されることがわかり、年度内に調査対応ができるかどうか危惧された。そこで更に調査範囲をしづらるために水路部分の全剥ぎと削平される部分について試掘溝を入れた。その結果県農政課と協議の結果、次年度に調査することとし工事部分の振替え等を行なうこととした。この間、地権者より早期調査の陳情等もあったが地区説明会などを実施し了解を得た。しかし、最終的には町が一作分の休耕補償費を支払う結果となった。昭和57年4月から発掘調査準備にはいる。

第2節 調査団の編成

調査団の編成

発掘調査は熊本県教育庁文化課が実施し、調査組織は下記のとおりである。

調査責任者 岩崎辰喜 文化課課長

調査 総括 隈 昭志 主幹兼文化財調査係長

調査員 平岡勝昭 参事

　　鶴島俊彦 嘴託

調査事務局 林田茂一 課長補佐

　　大塚正信 主幹兼経理係長

　　松崎厚生 参事

　　谷 喜美子主事

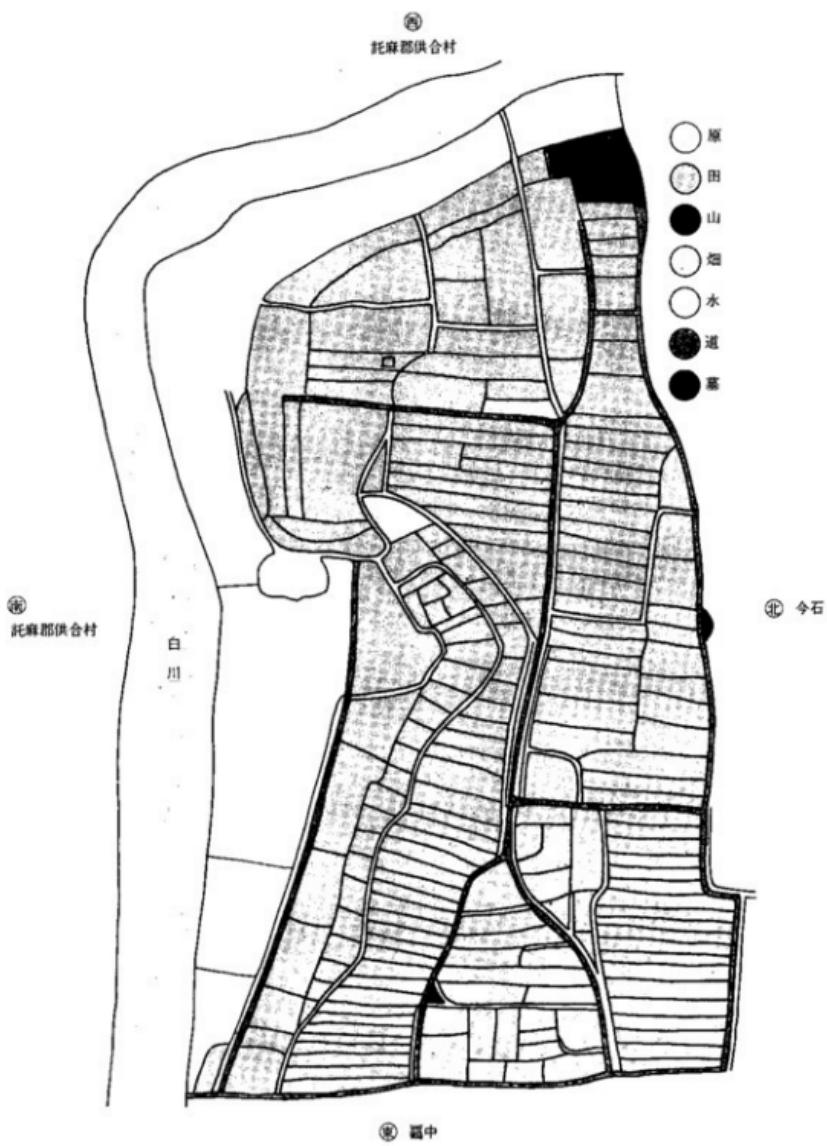
　　横尾泰宏 参事

人骨 調査 北条暉幸 産業医科大学教授

調査期間中は下記の機関及び各氏より調査協力をいただいた。記して謝意を表する。

菊池県事務所 耕地課 猪野一民

菊陽町耕地課 菊陽町教育委員会 吉川四季男（教育長）、中村博幸（社会教育課長）、
服部誠也（主事補）



第2図 字梅ノ木一筆図

第2章 調査の概要

第1節 調査地区

梅ノ木遺跡は白川の氾濫原にあって海拔標高約54mである。調査期間中上流約500mの白川堤防が切れ遺跡地は完全に冠水した。明治42年の地籍図（第2図参照）を見ると2枚の畠と山林と墓地が見られる。山林と墓地は現在香梅園（菊陽外四町衛生施設組合し尿処理場）となっている。自然地形によって水田が作られている様子がよく理解される。取水は大津町下井手と同町下町から取水する津久礼井手が市山で合流しその最末端となっていて、余剰水は白川に落ちる。この付近は白川の流路が蛇行しており、大雨によって10年に1度ぐらいの割合で白川の水が堤防を越えて溢水している。このことは梅ノ木河川敷の所有権争いなどにも発展している。明治33年の洪水で滅失、今は無い地番が、逆に対岸に土砂が堆積した新たな河川敷に付された伴である。年配の人の話によると桑畠として利用されたこともあるとのことであるが、畠を水田にした時期についてはさだかではない。また、梅ノ木砦の伝承を残すところが現在運動公園として残されている。付近は調査以前は洪水の排土場となっており水田より2mほど高くなっていた。地籍図によると水路によっており広く池みたいになっているが原野と記されている。素焼の土器や土師皿が出土することから、今石城や石坂城に関連ある砦として伝承をうんだものであろうか。

調査区は主軸を南北にとり10mの方眼を組み西より東にAからSまで、北から南に1から14までの番号を付し、各交点の名称をとりK 3区とかQ 8区など呼称した。

第2節 発掘調査の経過

試掘調査（昭和56年度）

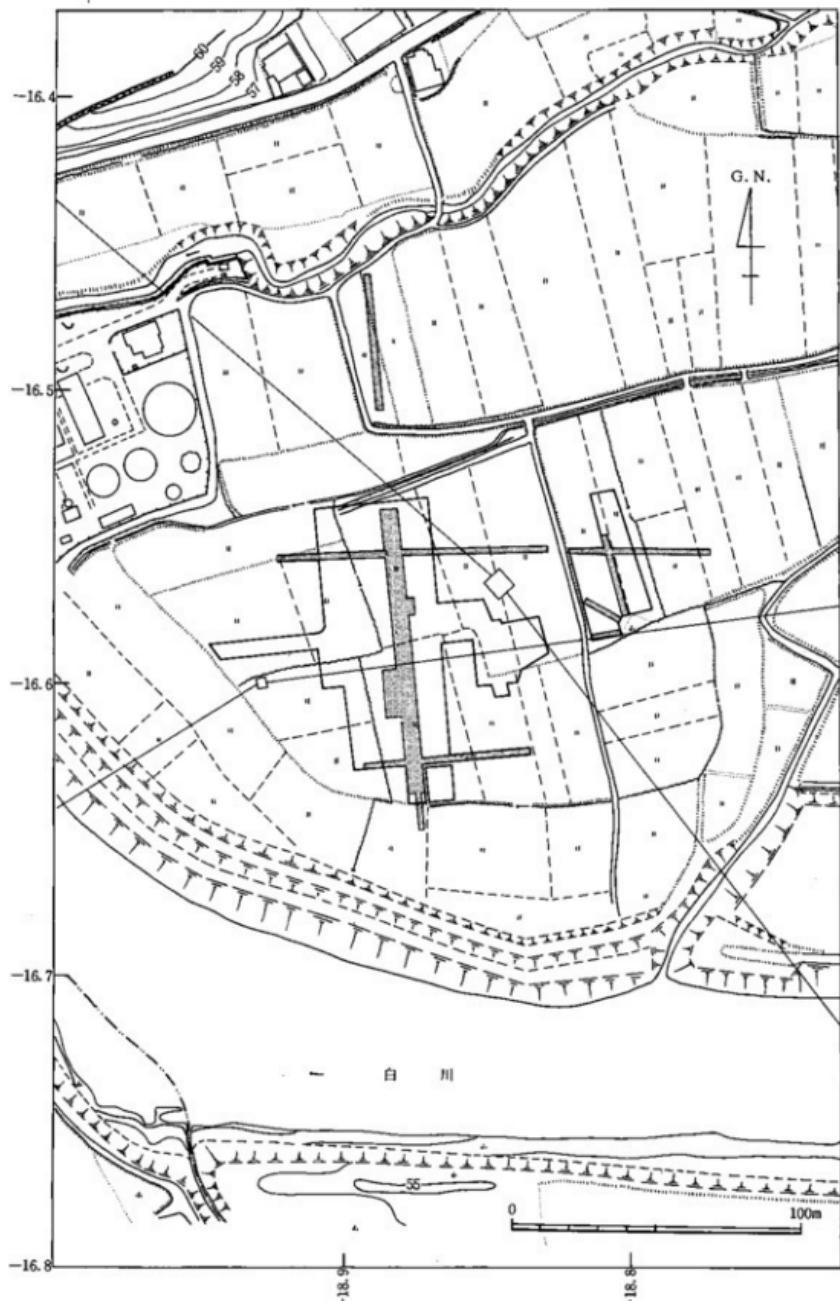
昭和56年度試掘は排水路部分と第○図のように削平される部分について実施した。トレーナー平面図については圃場整備工事平面図におとしたのみで別に作図はしなかった。ただ、3号水路の南端で旧白川の河川敷にあたる部分は疊がでるまで掘り下げた。深さ約2mで砂と疊が出土し遺物包含層もなく作図後危険防止のため埋めもどした。

3号水路より住居跡と焼土を確認し、鉄斧や土器片などの採集をおこない弥生時代の住居跡推定された。

本発掘調査（昭和57年度）

昭和57年5月4日

重機を使用して地盤より上の耕作土剥取りを行う。



第3図 荘園地区緊営園場整備事業平面図 (1/2000)

5月10日

連休あけで本日より作業員が来る。ジョレンで遺構の確認を行なう。この頃快晴が続き初夏のような暑さで作業員はバテ気味であった。

○ジョレンにて表面の整掃

○ユンボで西側を剥ぐ

5月13日木曜 曇

○住居址確認

○東側5m幅で南北に広げる。

5月19日水曜 晴／曇

○最南区の発掘

○中央区の砂の入った溝の整掃

5月21日金曜 快晴

○グリッド設定

○排水溝の砂を排土

○D-5区1号住居址発掘

5月24日 快晴

○水田溝の掘り下げ

○遺構確認

5月25日 快晴

○塚の測量

○遺構確認作業

5月26日 快晴

Q8区の塚の発掘にはいる。平坦部は乾燥により移植ゴテが通らない。

○Q8区塚のセンター実測の後¹を発掘

○菊陽町文化財保護委員視察 7名

5月27日 快晴

○Q8区塚の発掘

塚の中に石圓いがしてあり、中から須久式大甕、壺、高坏などが出土する。近世の遺物がなく甕棺に墳丘がともなうものか。

6月8日

待望のプレハブ完成、やっと休憩できるようになる。昼休みは皆横になる。

6月10日 快晴

○Q8塚内部の甕棺実測

6月16日

○22号住、1F号住、18号住の発掘

○ タ タ タ の実測

6月17日 雨

○午後より水洗い

6月18日 曇

16号、18号、17号住居跡の発掘

6月21日

○ 3号住居址の攪乱（溝）の取除く

○16号住の清掃

○14号住の発掘

6月22日 曇

3号・4号住居跡の発掘

6月28日

○G・H-9付近の発掘

6月29日

G9区、H9区付近の発掘

7月1日 快晴

○9号住居址のブリッジ撤去

○支石墓平面実測

○近代溝の発掘→遺物収集

7月2日

○支石墓平面断面実測図

7月5日 曇

○16号住居址平面・断面実測

7月6日 曇のち雨

○16・18号住居址の清掃

7月7日 晴

○16・18号住居址ピット検出・発掘

○ タ 断面実測

○19号住居検跡

7月8日 曇

○3・4号住居址発掘

○16号住居址の断面実測・撮影

○18号住居址の撮影

○28・29号 タ

7月9日 晴

○5・9住居発掘

○28・29住撮影、実測、床面下の発掘

7月12日 雨

○18住の実測

○区別の遺物取上げ

7月19日 曇時々雨

○J～L-8表土剥ぎ

○支石墓擣石の移動

7月21日 晴

○平面測量

○J～L-8区の造構検出

○支石墓写真撮影

7月22日 晴

○支石墓平面実測（支石、土壤etc）了

○3・4号住清掃

柱穴の検出

○H～6区のピット平板測量

7月23日 曇のち雨

○支石墓実測

○平板測量

○3・4号住居址の清掃

7月24日

前日からの雨で白川決壊、プレハブも流されるとの情報吉川さんよりはいる。水路上に高く設置してあつたので床下浸水でたすかる。水深水田面より80cmばかりになる。住居跡や調査地区全域に泥土がのる。

7月26日

○水害で堆積し土砂を取除く

(3住、4住)

○支石墓の実測

7月27日 晴

- 支石墓土塁発掘
- 5号住、9号住居跡発掘
- 平板測量

7月28日 曇→晴

- 支石墓断面実測、撮影

- 1号住居跡発掘
- 平板測量

7月29日 晴

- 支石墓断面実測、撮影
- 平板測量
- 1号住居発掘、撮影
- 23・30・31・32号住居跡清掃

7月30日 晴

- 2号支石墓南北土層断面実測
- 28・29・14号住居跡清掃
- 23・30・31・32号住居跡清掃と撮影

8月2日 快晴

- 7号住居跡発掘
- 17・28・29号住居跡清掃、撮影、断面実測

8月3日

- 5号住居跡発掘
- 28・29号住居跡実測

8月9日

下津久礼公民館にて調査結果の中間報告会を行う。地権者その他40名ばかり参加。

第3章 位置と歴史的環境

梅ノ木遺跡の位置は現在の行政区画では、熊本県菊池郡菊陽町大字津久礼字下津久礼に所在する。国土地理院『肥後大津』2万5千分の1の地形図で経緯を求めるとき東経130度47分50秒、北緯32度51秒付近である。菊陽町は菊陽村が昭和40年1月1日に町制を施行したものである。

昭48年 昭30 明22 明17 明12	明8 明6	明5	文化11	享保	寛永11	
熊 里 、本 三 二 市 （言 一、 二）	託 供 上 南 麻 郡 部 村 村 列	13.11.30合 託志 志 区 区 組 組 組 組	七 小 区 石 原 組 組 組 組	五 小 区 吉 原 石 原 弓削	タ タ タ 山尻 タ	タ タ 石原村 山尻村 弓削村
菊 陽 町 （四 一、 二）	菊 陽 村 （言 一、 二）	白 水 村 村 列	辛 川 村 (六 七、 三)	八 小 区 谷 組 組	辛川 上辛川 戸次 馬場楠 曲手	唐川村 唐川村 戸次村 馬場楠村 曲手村
			久 保 田 村 (六 一、 九)	一 小 区 津 久 礼 組	中代村 中代出分 大堀木 津留 川窪	中代村 中代村 タ タ タ
			津 久 礼 村 列	二 小 区 津 久 礼 組	上津久礼 下津久礼	上津久礼村 下津久礼村
			原 水 村 原 水 村 列	区 原 水 村 (六 一、 九)	入道水 新町村 柳水 馬場 灰塚組 南方 中尾	入道水村 柳水村 北方村 タ タ タ

第1表 町村合併のようす

菊陽村は旧白水村、津田村、原水村が昭和30年4月1日に合併し、「本村が菊池郡の南方に位し、陽光「さん」として輝き、前途の希望亦洋洋たる意味を持ち、男性的積極性を表し、永遠の発展を祈念する。」というところから『菊陽村』と名付けられた。現在も熊本市のベッドタウンとしてスプロール化されつつあるが、津久礼組の内吉原、石原、弓削地区は明治12年合志郡から託麻郡へ、その後供合村託麻村を経て熊本市に編入されている。町内の個の村落について『町村合併史』から抜粋すると前表のようになる。

明治16年頃熊本県下の町村のようすを記載したものに『肥後国郡村誌抄』がある。これには下記村落の記載が見られる。

肥後国合志郡津久礼（ツクレ）村

タ　　タ　原水（ハラミズ）村

明治16年11月調 戸長 赤峰千尋

肥後国上益城郡戸次（ツツギ）村

タ　　タ　辛川（カラカハ）村

タ　　タ　馬場楠（ババグス）村

タ　　タ　曲手（マガテ）村

以下、熊本女子大学発行の『肥後国郡村誌抄』中巻より引用する。

肥後国合志郡津久礼（ツクレ）村

本村元上津久礼村下津久礼村（本村ノ内字花立ト称ス小村アリ、此村元統卒ヲ置ク、同郡須屋村ニ同シ）ノ二村タリ。明治九年丙子二村合テ一村トナス。

税地 田、旧反別53町9反九畝3歩、新検反別62町6反25歩、畠、旧反別281町2反5畝3歩、新検反別470町5畝13歩。宅地、旧反別13町8反5畝18歩、新検反別23町6畝25歩。林、旧反別25町3反6畝18歩、新検94町4反6畝7歩。総計、旧反別374町4反6畝12歩、新検反別650町1反9畝10歩。

貢租 地租、旧租米912石4斗4升、同金77円2銭7厘。改租金、金2937円47銭5厘 百分ノ三、同2448円13銭7厘・同二分五厘。山野税、金40円93銭7厘 百分ノ三、金34円17銭4厘 同二分五厘 雜税、金13円50銭。賦金、金6円。

戸数 本籍278戸、士族43戸、平民230戸。社2戸、村社2座 総計280戸。

人數 男、農754口、士族113口、平民641口。女800口、士族123口、平民677口。総計1554口。

牛馬 牝牛2頭、牝牛3頭、総計5頭。牡馬1頭、牝馬236頭。総計237頭。

舟車 日本形船3艘、漁船。荷車1輛 小車。水車5輪。

川 津久礼溝、村ノ東久保田村ヨリ来リ西流シ數派ニ分レ字若宮ニテ白川ニ入ル。長13町32

間巾 2間 3尺。瀬田下溝、同上、數派ニ分レ田ニ入る。長11町23間巾 1間或ハ 3尺。此両溝ヲ以テ本村田62町歩余ノ用水ニ供ス。堀川溝 村ノ西幾久富村ヨリ来リ坤ニ流レ須屋村ニ入ル。長14町35間巾 3間ヨリ 8間ニ至ル。原水村以上用水溝ノ落シナリ。

森林 新山林、官有ニ属ス、東西凡 2町40間南北凡 3町10間、反別凡13町 1反歩、村ノ乾凡 20間ニアリ、杉・桧・松圓 4尺長 2間半以下生ズ。堀川林、同上、東西凡 1丁20間、南北凡 4丁30間、反別凡 5町9反7畝歩、村ノ西凡里14丁ニアリ、櫟・小木及ビ柴生ズ。林、同上、所々散在、都合反別23町歩、杉・桧・松櫟・櫻・雜木圓 2尺長 2間以下、並ビニ竹圓 1尺以下及ビ柴生ズ。新山林、民有ニ属ス、東西凡 2丁、南北凡 2丁10間、反別 4町 2反歩、村ノ乾凡 20丁ニアリ、杉・松圓 3尺長 2間以下生ズ。堀川林、同上、東西凡 1丁10間、南北凡 2丁、反別 3町 3反 6畝16歩、村ノ西凡 1里 7丁ニアリ、雜小木・柴生ズ。林、同上、所々散在、都合反別86町8反 9畝21歩、櫻・杉・松圓 5尺長 3間以下、並ビニ竹圓 9寸以下生ズ。

原野 下冲野野、宮有ニ属ス、村ノ乾凡 18丁ニアリ、北ハ原水村林ニ接シ、三方ハ本村耕地ニ隣ス、樹木ナク只茅葦アリ。

学校 人民共立小学校 1カ所、村ノ東字中屋敷ニアリ、生徒男77人、女32人。

物産 明治15年調。動物、鶏 1石 1斗。植物、米1378石、大豆530石、小豆19石、裸麥826石、大麥1400石、小麦350石、アワ1350石、ソバ 500石、菜種290石、甘藷3009万2000斤、芋 2万2000斤、煙草 7万6000斤、質各可、管内或ハ他県輸送。飲食、鶏卵1200、質可、管内輸送。

民業 同上、男、農240戸、質屋 2戸、水車職 5戸、大工職 1戸。

肥後国合志郡原水（ハラミズ）村

（明治16年11月調）戸長 赤崎千尋

本村古時不詳、元原水村・入道水村・鉄鉋小路村（本村元銃卒ヲ置ク、同郡須屋村ニ同ジ）ノ三村ハ中古下郷ニ属シ、元新町・馬場村・中尾村・南方村ノ一町三村ハ郷村帳ニ不載。寛永十年癸酉大津手永ニ属ス。明治4年辛未手永ヲ郷ニ改ム。本村元前条柳水村外1町5村タリ。明治9年丙子合テ本村ノ称ニ改ム。

税地 田、旧反別32町 6反 1畝12歩、新検反別45町 6反 5畝26歩。畠、旧反別400町 2反 2畝25歩、新検反別718町 1反 8畝21歩。宅地、旧反別40町 5反 6畝 9歩、新検反別49町 7反 2畝20歩、林、旧反別100町 9反 6畝27歩、新検反別179町 9反 8畝15歩。原野、旧反別 4反 9畝18歩、新検反別 1町 6反 5畝27歩。総計、旧反別574町 8反 7畝 1歩、新検反別995町 2反 1畝19歩。

賃租 地租、旧租米838石 7斗 1升 9合、同金73円13銭 5厘。改租金、金3829円93銭 2厘 百分ノ三、同3192円 1錢 6厘、同 2分 5厘、山野税、金68円12銭 4厘 百分ノ三、同56円93銭 3厘 同二分五厘。雜税、金51円50銭。賦金、金1円。税外納金、金31銭 5厘。

戸数 本籍536戸、土族147戸、平民389戸。寄留 2戸、平民。社 4戸、村社 4座。寺 1戸、真宗 1宇。総計543戸。

人數 男1225口、士族373口、平民852口。女1315口、士族339口、平民976口。總計2540口。
外寄留7人、男4人、女3人。

牛馬 牝牛2頭、牝牛7頭 總計9頭。牡馬2頭、牝馬466頭、總計468頭。

舟車 荷車 荷車4辆 小車。水車 3輪。

川 堀川溝、村ノ東室町ヨリ来リ西福原村界ニ入ル。長1里7町37間巾2間或ハ1間3尺。
本村田45町歩余ノ用水、且飲料ヲ兼ル。

森林 小平上林、官有ニ属ス東西4町10間南北2町51間余。反別凡14町3反2畝12歩、村ノ乾凡10町ニアリ、小木杉・桧・松生ズ。上長塚林、同上、東西3町55間余、南北1町10間、反別凡5町5反歩、村ノ北凡10町ニアリ、立木同上。西上原林、同上、東西3町7間余、南北1町20間、反別凡5町歩、村ノ北凡15町ニアリ、立木同上。中長塚林、同上、東西7町30間余、南北1町、反別凡9町歩、村ノ乾凡15町ニアリ、小木杉・松・櫟生ズ。下長塚林、同上、東西7町22間、南北1町余、反別凡8町8反5畝歩、村ノ乾20町ニアリ、小木杉・桧・松生ズ。下長塚林、同上、東西7町22間、南北1町余、反別凡8町8反5畝歩、村ノ乾凡20町ニアリ、小木杉・桧・松生ズ。高塚林、同上、東西3町、南北1町40間、反別凡6町歩、村ノ西凡1里ニアリ、小松生ズ。南沖野林、同上東西2町32間余、南北2町20間、反別凡7町9畝歩、村ノ西凡28町ニアリ、小木松・杉生ズ。林、同上、所々散在、都合反別凡20町7反2畝6歩、木木杉・桧松多シ、間櫟・栗生ズ。沖山林、民有ニ属ス、東西4町21間、南北4町余、反別20町九反4畝2歩、村ノ西凡30町ニアリ、小松生ズ、下大谷林、同上、東西2町、南北7町21間余、反別17町6反6畝5歩、村ノ良凡25町ニアリ、立木同上、古閑原林、同上、東西5町、南北2町34間余、反別15町4反1畝29歩、村ノ東凡33町ニアリ、立木同上。林、同上、所々散在、都合反別117町5反5歩、小木松多シ、間杉・櫟並ビニ竹8寸廻以下生ズ。

原野 野、民有ニ属ス、所々散在、都合反別1町6反5畝27歩、樹木ナク唯茅草アリ。

湖沼 井手上溜池、東西21間、南北39間、周回2町、村ノ良字井手上ニアリ、村ノ用水トナス。小平上溜池、東西28間、南北22間、周回1町40間、村ノ良字小平上ニアリ、同上。

学校 人民共立小学校二カ所、一ハ村ノ東字東前ニアリ生徒男55人、女16人。一ハ村ノ乾字中堀川ニアリ生徒男192人、女72人。

物産 明治15年調。動物、蘿57石、蚕卵紙25枚、質可、管内輸送。植物、米1312石、野稻米237石、大豆1565石、小豆39石、裸麦2223石、大麦304石、小麦1443石、アワ6405石、稗480石、ソバ1007石、エン豆72石、蚕豆18石、甘藷72石斤、菜種335斤、煙草9万斤、麻2400斤、ダイコン5万斤、梨子1500斤、柿9000斤、質可、管内或ハ他県輸送。器用、大竹廻り7寸1500本、芹40万斤、鍬50挺、鎌200挺、竹器類150。飲食、茶1070斤、清酒413石、燒酎13石、鶏卵 1万5千。製造物、生糸25斤、質各可、管内輸送。

民業 同上。男農510戸、大工職6戸、造酒職2戸、質屋7戸、旅籠屋2戸、染物職3戸、鍛

治職 2 戸、竹器職 1 戸、水車職 3 戸。

肥後國土益城郡戸次（トツギ）村

税地 田、旧反別 2 反歩、新検反別 3 反 8 歩 14 歩。畠、旧反別 88 丁 5 反 9 歩 15 歩、新検反別 249 丁 7 反 3 歩 22 歩。宅地、旧反別 3 町 7 反 8 歩 21 歩、新検反別 6 町 1 反 5 歩 12 歩。林、旧反別 2 町 3 反 8 歩 21 歩、新検反別 26 町 1 反 7 歩 6 歩。原野、旧反別 2 反 3 歩 9 歩、新検反別 3 町 1 歩 23 歩。総計、旧反別 95 町 2 反 6 歩、新検反別 285 町 4 反 6 歩 17 歩。

貢租 地租、旧租米 144 石 3 斗 3 升、同金 14 円 64 銭 6 厘。改租金、金 844 円 59 銭 9 厘。百分ノ三、金 703 円 94 銭 8 厘、同二分五厘。雜税、金 6 円、山野税、金 7 円 79 銭 7 厘、百分ノ三、金 6 円 48 銭 8 厘、同二分五厘。

戸数 本籍 86 戸、士族 13 戸、平民 73 戸。

人數 男 204 口、士族 35 口、平民 169 口、女 206 口、士族 35 口、平民 171 口、總計 410 口。

牛馬 牡馬 3 頭、牝馬 77 頭、總計 80 頭。

森林 林、官有ニ属ス、處々散在、都合反別 7 町 8 反 9 歩 24 歩、杉・桧・檉雜木圃 4 尺長 3 間以下並竹圃 7 寸以下生ス。同、民有ニ属ス。同上反別 26 町 1 反 7 歩 6 歩、杉・松雜木圃 3 尺長 1 間半以下並小竹生ス。

原野 野、同上反別 3 町 1 歩 23 歩、樹木ナク只茅葦アリ。

沼 泥敷廻溜池、東西 22 間南北 38 間周回 1 町 56 間村の中央字屋敷廻ニアリ村ノ用水トナス。

物産 明治 15 年調。植物、米 2 石 9 斗 5 斗、野稻米 70 石、大豆 140 石、小豆 2 石 4 斗 5 升、裸麦 87 石 5 斗、大麦 26 石 2 斗 5 升、小麦 52 石 5 斗、アワ 300 石、ソバ 120 石、菜種 20 石、稗 40 石、甘藷 75000 斤、ダイコン種 20 石、煙草 25000 斤、質可管内或ハ他県輸送。

民業 同上。男農 62 戸、大工職 1 戸、左官職 1 戸。

肥後國上益城郡曲手（マガテ）村

税地 田、旧反別 6 町 5 反 3 歩、新検反別 8 町 8 反 2 歩 21 歩。畠、旧反別 67 町 2 反 6 歩 6 歩、新検反別 150 町 2 反 8 歩 25 歩。宅地、旧反別 5 町 3 反 2 歩 6 歩、新検反別 6 町 2 反 6 歩 22 歩。林、旧反別 1 町 6 反 7 歩 25 歩、新検反別 46 町 2 反 6 歩 3 歩。原野、旧反別 8 歩、新検反別 7 歩 15 歩。総計、旧反別 80 町 7 反 6 歩 12 歩、新検反別 211 町 7 反 1 歩 26 歩。

貢租 地租、旧租米 187 石 8 升 7 合、同金 12 円 31 銭 9 厘。改租金、金 709 円 86 銭 4 厘、百分ノ三、金 591 円 52 銭 6 厘、同二分五厘。雜税、金 12 円。賦金、金 1 円也。山野税、金 13 円 34 銭 2 厘、百分ノ三、金 11 円 13 銭 2 厘、同二分五厘。

戸数 本籍 80 戸、士族 5 戸、平民 75 戸。

人數 男 190 口、士族 10 口、平民 180 口。女 192 口、士族 17 口、平民 175 口。總計 382 口。

牛馬 牡牛 1 頭、牝牛 2 頭、總計 3 頭。牝馬 75 頭。

川 曲手渡、村道ニ属ス、本村ヨリ 1 町 56 間、皆浅シ広 32 間、村ノ北白川ノ上流ニアリ渡船

1艘私船。馬場楠溝、村ノ東馬場楠村ヨリ来り、本村田8町8反歩余ノ用水ニ供シ西辛川村ニ入ル、長8町38間巾3間。風穴林、官有ニ属ス、東西凡2町30間南北凡2町30間反別凡12町8畝12歩、本村ノ坤凡25町ニアリ、杉・松・樟圓4尺長3間以下並検圓2尺長2間以下生ス。林、同上处々散在、都合反別凡7町8反5畝2歩、杉・松・樟圓4尺長3間半以下並檉雜木圓2尺長1間半以下生ス。同、民有ニ属ス、同上反別凡46町2反6畝3歩、杉・松・雜木圓3尺長2間以下並竹生ス。

原野 野、同上反別7畝15歩、樹木ナク只茅葦アリ。

学校 人民共立小学校1箇所、村ノニアリ生徒男57人女25人

物産 明治15年調。植物、米90石、野稻米60石、大豆75石、小豆5石、裸麦70石、小麦50石、大麦20石、アワ250石、ソバ75石、稗80石、菜種15石、ダイコン種20石、甘藷7万斤、煙草2万3千斤、質管内或ハ他県輸送。

民業 同上。男農61戸、大工職3戸。

肥後國上益城郡馬場楠(パパグス)村

税地 田、旧反別3反4畝12歩、新検反別9反4畝9歩。畠、旧反別49町3反5畝27歩、新検反別121町8反5畝5歩。宅地、旧反別3町5反歩、新検反別3町8反9畝歩。林、旧反別2町6反5畝28歩、新検反別17町7反1畝3歩。原野、旧反別4畝5歩、新検反別2反7畝22歩。

貢租 地租、旧租米86石2合、同金4円71銭6厘。改租金、金436円62銭4厘、百分ノ三、金363円85銭4厘、同二分五厘。雜稅、金10円。山野稅、金5円13銭4厘、百分ノ三、金4円28銭8厘、同2分5厘。

戸數 本籍51戸、士族6戸、平民45戸。

人數 男121口、士族13口、平民108口。女122口、士族10口、平民112口、總計243口。

牛馬 牝馬53頭。

川 馬場楠磧、村ノ東白川ノ上流ニアリ、石巻磧長1町15間、加藤氏功業ナリ郡誌ニ詳記ス、本村以下數村ノ用水ヲ分ツ為設タル磧ナリ。馬場楠溝、同上字1町畠磧口ヨリ起り本村田9反歩余ノ用水ニ供シ曲手村ニ入ル、長11町6間巾3間。

森林 林、官有ニ属ス、處々散在、都合反別3町3反3畝12歩、杉・松・樟圓2尺長2間以下並竹圓6寸以下生ス。同、民有ニ属ス、同上反別17町7反1畝3歩、杉・松雜木圓3尺長1間以下並小竹生ス。

原野 野、同上反別2反7畝22歩、樹木ナク只茅葦アリ。

学校 人民共立小学校1ヶ所、村ノ坤字森上ニアリ、生徒男57人女25人。

物産 明治15年調。植物、米7石2斗9升、野稻米42石、大豆78石、小豆1石2斗5升、裸麦63石7斗、大麦13石6斗5升、小麦27石3斗、アワ180石、ソバ62石4斗、稗24石、菜種12石、ダイコン種12石、甘藷5万斤、煙草2万斤、質可管内或ハ他県輸送。

民業 同上。男農33戸。

肥後國上益城郡辛川（カラカハ）村

税地 田、旧反別16丁8反4畝24歩、新検反別23丁2畝2歩。畠、旧反別154丁4反1畝3歩、新検反別336丁5反9畝4歩。宅地、旧反別13丁5反歩、新検反別14丁1反9畝20歩。林、旧反別2丁5反7畝4歩、新検反別11丁1反9畝14歩。原野、旧反別5反4畝14歩、新検反別2丁3反9畝1歩。総計、旧反別187丁8反7畝15歩、新検反別389丁3反9畝11歩。

賃租 地租、旧租米380石8斗1升3合、同金49円79銭3厘。改租金、金1741円12銭5厘、百分ノ三、金1451円16銭6厘、同二分五厘。雜税、金38円。山野税、金3円93銭9厘、百分ノ三、金3円34銭。同二分五厘。

戸数 本籍161戸、平民148戸。

人數 男383口、士族26口、平民357口。女385口、士族29口、平民356口。総計768口。

牛馬 牝牛9頭。牝馬123頭。

舟車 日本形船一艘、川漁船。

川 馬場楠溝、村ノ東曲手村ヨリ来り本村田25丁余ノ用水ニ供シ鹿帰瀬村ニ入ル、長24丁43間巾3間。

森林 官有ニ属ス、処々散在、都合反別1丁5反6畝17歩、杉・松・櫻木2尺長2間以下並雜小木小竹生ス。同、民有ニ属ス、同上反別凡11丁1反9畝14歩、杉・松・雜木圓3尺長2間以下並小竹生ス。

原野 野、同上反別2丁3反9畝1歩、樹木ナク只葦アリ。

学校 人民共立小学校1箇所、村ノ東字古閑上ニアリ、生徒男35人女13人。

物産 明治15年調。植物、米250石、野稻米50石、大豆200石、小豆10石、裸麦200石、大麦40石、小麦100石、アワ600石、稗150石、ソバ150石、菜種20石、煙草5万斤、甘藷万5千升、ダイコン種40石、質可管内或ハ他県輸送。

民業 同上 男農140戸。

これによつて町内の作物を見るとアワ、ソバ、ヒエなどの収穫量が記載されており、水田の稲作以外の主要作物となつてゐる。梅ノ木遺跡付近の発掘調査直前の作物はレタス、ダイコン、ダイズ、ニンジンなどの換金作物をはじめとしビニルハウスによるメロン・レタスなどの促成栽培である。

次に遺跡地北側台地上には今石城、石坂城が見られる。熊本県文化財報告第30集『中世城』によると次のように記載されている。

今石城（消滅）（菊池郡菊陽町大字津久礼字今石）

『古城考』に「津久礼村畔、白川の頭にあり、合志家全盛の時其臣石原狩野介吉利居城して、

竹迫南手の防たりと云ふ」という記事が見え、「合志川芥」は城跡の周辺地形について「當城の前に白川の流れを控え断崖絶壁削るが如く屈競の要害なり」と記述している。

城跡の所在地については確たるものはないが、津久礼地区に広がる丘陵地南縁部の一隅に、「今石」という字名を残す所があり、地元では当該地を城跡と見なす向きがある。すなわち、「今石」という地名に加えて「合志川芥」の記述にあるように丘陵地下（約25m下）には白川が流れおり、東方向から西方向へ下る川の流れも、今石地区で大きく北側に湾曲してまさに「白川の頭」の形状を呈するからである。しかし、当該地については昭和49年から昭和50年にかけて全面的に宅地造成が行われたので、今ではまったく旧地形を止めず推論の余地がない。河北憲一氏の御示唆によれば、城跡推定地には空堀らしいものの存在があつたという。

石坂城

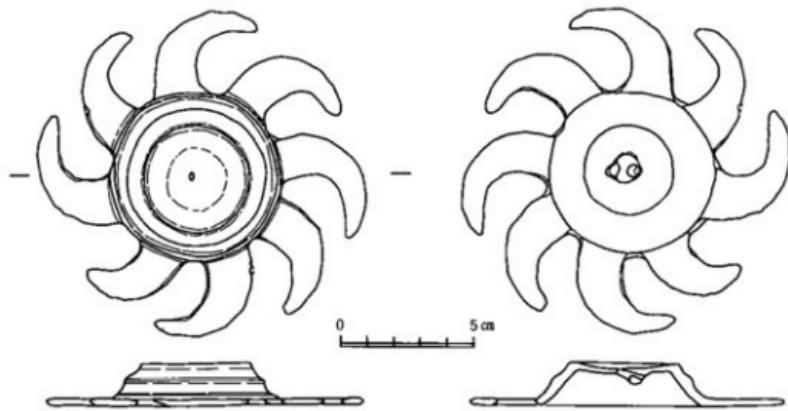
「合志川芥」によれば城主は石坂盛蔵という。加えて城跡の所在地については、「上津久礼村を越へ越田郡の境と云ふ」と記しており、83間に及ぶ堀の跡があるとも伝える。しかし、城跡所在地に該当すると思われる石坂（字名）地区は、一面の平坦地で、城跡に関する伝承は何もない。「石坂」地区は「今石」地区的隣り合わせでもあるので、「合志川芥」にいう「石坂城」は「今石城」を重複して述べたものと思われる。

なお、「肥後国誌」には、「弓削城跡 石坂城ト云城主年代不分明城ノ前堀トテ二重ノ堀跡干今残レリ」という記事が見える。

久保田城

「合志川芥」には「久保田大和守為宗は久保田を分領し城を築て居る」と記されている。

現在、城跡の所在地は不明であるが、字「柳ノ尾」の地内には「山の城」という小名を残す墓地が存在する。しかし当該地は現状変更がなされている事もあって、城跡に関連あろうと思われている遺構は何も観察できない。



第4図 巴型銅器（城南町出土）島津義昭氏蔵

白川流域の古代遺跡の分布を『全国遺跡地図—熊本県』によつてみると別図（折込み地図）と遺跡分布図付表や熊本県出土弥生時代銅器出土地名表のようになる。

第2表 白川流域の遺跡分布付表

[7]

135	塚口横穴群	横穴	菊池郡西合志町合生塚口	
136	生坪塚山古墳	古墳（方円）	菊池郡西合志町合生漆崎	
137	生坪古墳	古墳（円）	菊池郡西合志町合生生坪	
138	石立石棺 （生坪石立古墳）	家形石棺	菊池郡西合志町合生石立	
139	八反田遺跡	甕棺	菊池郡西合志町合生八反田	
219	御領原遺跡	散布地	菊池郡大津町矢謹川御領原	
220	七野尾遺跡	散布地	菊池郡大津町矢謹川七野尾	
221	馬糞塚遺跡	散布地	菊池郡大津町矢謹川七野尾	
222	馬糞塚古墳群	古墳群（円）	菊池郡大津町矢謹川御願所	
223	向原遺跡	散布地	菊池郡大津町真木向原	
225	立割横穴群	横穴	菊池郡西合志町合生立割	
228	小合志古墳	古墳（円）	菊池郡西合志町合生小合志小合志原	
229	小合志原遺跡	散布地	菊池郡西合志町合生辻久保小合志原	
230	辻久保遺跡	散布地	菊池郡西合志町合生辻久保	
246	中野遺跡	散布地	菊池郡西合志町野々島中野	
247	笹山遺跡	散布地	菊池郡西合志町野々島御代志	
249	中林西原遺跡	散布地	菊池郡合志町栄西原	
250	中林遺跡	散布地	菊池郡合志町栄中林	
251	中林 1 号墳	古墳（円）	菊池郡合志町栄中林	
252	中林 2 号墳	古墳（円）	菊池郡合志町栄中林	
253	木瀬遺跡	散布地	菊池郡合志町上床木瀬	
254	虚空蔵横穴	横穴	菊池郡合志町上床木瀬	
256	小園遺跡	散布地	菊池郡合志町豊岡小園	
257	豊岡宮ノ前遺跡	散布地	菊池郡合志町上床宮前	
258	陣の内遺跡	散布地	菊池郡合志町幾久富陣の内	
260	御手洗遺跡	散布地	菊池郡合志町幾久富御手洗	
263	野村遺跡	甕棺	菊池郡合志町福原野付	
264	御領遺跡	散布地	菊池郡合志町福原御領	
265	八久保遺跡	散布地	菊池郡合志町竹迫八久保	

266	桑鷽遺跡	散布地	菊池郡合志町福原出分
267	轟遺跡	斐棺	菊池郡合志町福原轟・出分
273	原水大人足遺跡	散布地	菊池郡菊陽町原水人足
274	柳水遺跡	散布地	菊池郡菊陽町原水柳水
275	南出口遺跡 (大津農高実習地遺跡)		菊池郡大津町室南出口
277	西弥謙免遺跡	散布地	菊池郡大津町室西弥謙
282	ナギナタ遺跡	散布地	菊池郡大津町平川ナギナタ
283	平川仮宿遺跡	散布地	菊池郡大津町平川水落
285	水の山遺跡	支石墓散布地	菊池郡大津町矢護川水の山
286	日向遺跡	散布地	菊池郡大津町矢護川日向
287	中後追遺跡	集落跡	菊池郡大津町古城中後追
290	真木古墳	古墳	菊池郡大津町真木
291	合志一族の墓	墳墓	菊池郡大津町真木
293	中町横穴群	横穴	菊池郡大津町大津町屋敷
294	八窪遺跡	散布地	菊池郡大津町大津町八窪
297	五里木跡	散布地	菊池郡大津町大津町西嶺
298	後追横穴群	横穴	菊池郡大津町大津町後追
302	高尾野遺跡	散布地	菊池郡大津町高尾野高尾野
303	瀬田雨留尾遺跡	散布地	菊池郡大津町瀬田雨留尾
304	瀬田遺跡	散布地	菊池郡大津町瀬田長袖・山の神
305	瀬田裏古墳群	古墳群	菊池郡大津町瀬田瀬田裏
307	上無田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町無田渡瀬
308	車帰遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町車帰村下
309	新山遺跡	散布地	菊池郡菊陽町津久礼新山
310	上沖野遺跡	散布地	菊池郡菊陽町原水上沖野
311	駄飼代遺跡	散布地	菊池郡菊陽町津久礼新山
312	榆木遺跡	散布地	熊本市清水町榆木堂の前
313	庵の前遺跡	斐棺	熊本市清水町榆木庵の前
314	迫の上遺跡	斐棺・散布地	熊本市竜田町上立田迫の上
315	緑ヶ丘山の神迹跡	散布地	熊本市竜田町上立田緑ヶ丘
316	堂ノ前遺跡	散布地	熊本市清水町榆木堂ノ前
317	一丁鶴（一丁畠）遺跡	散布地	熊本市清水町榆木一丁鶴
318	竹の後遺跡	斐棺	熊本市竜田町上立田竹の後

319	竹の後遺跡	變棺・散布地	熊本市竜田町上立田竹の後
320	二里木跡	一里塚	熊本市竜田前上立田吉の平
321	武藏塚	墳墓	熊本市竜田前弓削塚の木
323	片彦瀬遺跡	散布地	熊本市竜田町弓削片彦瀬
324	北上 A 遺跡	散布地	熊本市石原町平
325	北上 B 遺跡	散布地	熊本市石原町平
326	上南部遺跡	散布地	熊本市上南部町苅野
328	弓削小坂横穴群	横穴	熊本市竜田町弓削小坂の上小坂屋敷
330	弓削遺跡	散布地	熊本市竜田町弓削法王龜
331	瀬々井遺跡	散布地	熊本市石原町瀬々井
335	神園山遺跡	散布地	熊本市長嶺町神園華園
337	石原・亀の甲遺跡	集落跡	熊本市石原町亀の甲
338	山尻遺跡	集落跡	熊本市弓削町山尻南原・中原
339	宮原遺跡	散布地	熊本市弓削町山尻宮原
340	今石遺跡	散布地	菊池郡菊陽町津久礼今石
341	今石横穴群	横穴	菊池郡菊陽町津久礼今石
344	梅ノ木遺跡	散布地	菊池郡菊陽町津久礼梅ノ木
348	久保遺跡	散布地	菊池郡菊陽町辛川久保
350	井口下鶴遺跡	散布地	菊池郡菊陽町辛川下鶴
359	中屋敷遺跡	散布地	菊池郡菊陽町辛川中屋敷
360	東弁指遺跡	散布地	菊池郡菊陽町辛川東弁指
361	池の窪遺跡	散布地	菊池郡菊陽町辛川池の窪
363	辛川東原遺跡	集落跡	菊池郡菊陽町曲手西原辛川
364	曲手中原遺跡	散布地	菊池郡菊陽町曲手中原
365	上山立窪遺跡	散布地	菊池郡菊陽町辛川上山立窪
366	六道塚古墳	古墳	菊池郡菊陽町辛川塚原
368	塚原遺跡	散布地	菊池郡菊陽町辛川塚原
370	狸坂 A 遺跡	散布地	菊池郡菊陽町曲手部田
371	狸坂 B 遺跡	散布地	菊池郡菊陽町曲手部田
372	狸坂 C 遺跡	散布地	菊池郡菊陽町曲手部田
373	一丁畠石棺群 (馬場楠一丁畠古墳) 下陣内遺跡	箱式石棺	菊池郡菊陽町馬場楠一丁畠
376	上陣内遺跡	散布地	菊池郡大津町下町窪田
377	上陣内遺跡	散布地	菊池郡大津町陣内上園

379	田尾遺跡	散布地	菊池郡大津町陣内田尾
380	森遺跡	散布地	菊池郡大津町森櫻迫
384	宝満鶴遺跡	散布地	菊池郡大津町中島宝満鶴
385	岩坂遺跡	散布地	菊池郡大津町岩坂
386	岩坂横穴	横穴	菊池郡大津町岩坂追出
390	小園遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子持矢倉
391	皆元遺跡	宝器出土地	阿蘇郡西原村烏子皆元
392	皆元遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子皆元
393	馬場遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子馬場
395	下六反田の磨崖仏	磨崖仏	阿蘇郡西原村烏子馬場
397	鳥子陣ノ上遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子陣ノ上
398	上鳥子横穴群	横穴	阿蘇郡西原村烏子水の谷
399	葛目横穴	横穴	阿蘇郡西原村烏子葛目谷
400	葛目遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子上葛目
401	古閑向遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子古閑向
402	古閑遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子古閑
403	襟の平遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子襟の平
404	桃の木原遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子桃の木原
405	かくが峰遺跡	散布地	阿蘇郡西原村烏子鳥越
406	きつね塚石棺群	箱式石棺	阿蘇郡西原村小森風当霍
407	きつね塚古墳群	古墳群（円）	阿蘇郡西原村小森風当霍
408	風当遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森風當
409	先ノ原遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森大切畠霍
410	後迫遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森後迫
411	どや堤の上遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森大切畠
414	岩戸神社岩陰遺跡	岩陰	菊池郡大津町外牧烟鶴
415	日南為遺跡 （本屋敷遺跡）	散布地	阿蘇郡西原村烏子日南為
416	桑鶴古屋敷遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森桑鶴
417	桑鶴遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森桑鶴
419	桑鶴土橋遺跡	集落跡	阿蘇郡西原村小森桑鶴・土橋
420	搖が池西側台地遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森桑鶴
421	搖が池遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森桑鶴
422	うつさい遺跡	集落跡	阿蘇郡西原村小森土橋

423	丸林遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森桑鷲	
〔8〕				
1	高野遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦高野	
2	扇山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦扇山	
4	松尾遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦松尾	
5	横石遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦横石	
6	原の墳墓	墳墓	阿蘇郡阿蘇町湯浦原の上・原の前	
7	野中城跡	城跡	阿蘇郡阿蘇町湯浦城	
8	湯浦中島遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町湯浦中島	
9	波寄が原遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町湯浦城	
10	源太が塚石棺群	箱式石棺	阿蘇郡阿蘇町南宮原村上	
12	北川久保遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦川久保	
13	野村遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦野村	
14	二本松遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦二本松	
15	二本松石棺群	箱式石棺	阿蘇郡阿蘇町西湯浦二本松	
16	下居塚遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦居塚	
17	北谷遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國北谷	
18	中塚遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦中塚	
19	西中尾遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國西中尾	
21	西湯浦遺跡	星敷跡・集落跡	阿蘇郡阿蘇町西湯浦居屋敷	
22	中無田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西湯浦中無田	
23	陣内遺跡	集落跡	阿蘇郡阿蘇町西湯浦陣内	
25	西小國中島遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國中島	
26	西小國遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國西荒牧	
27	西小國前田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國前田	
28	中尾遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國中尾	
29	無田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國無田	
30	御塚古墳群	古墳群	阿蘇郡阿蘇町南宮原前田	
31	湯山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小里湯山	
32	北田子山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國北田子山	
33	下り山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國下り山	
34	花原川遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小國花原	
35	内牧城跡	城跡	阿蘇郡阿蘇町内牧中町	

36	塔の木古墳群	古墳群（円）	阿蘇郡阿蘇町小里原口
37	三の丸遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小里三の丸
38	番出石棺	箱式石棺	阿蘇郡阿蘇町内牧番出
39	新町遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小里新町
40	田子山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町西小園田子山
41	折戸遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町三久保北請
42	三久保池の平遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町三久保池の平
43	三久保横穴	横穴	阿蘇郡阿蘇町三久保田子山
44	松の本遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町三久保松の本
45	駄の原遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町内牧駄の原前
46	三久保山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町三久保三久保山
47	三久保遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町三久保三久保山
48	阿蘇北中学校遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町三久保前畠
49	千町無田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町三久保千町無田
50	浜川古墳群	古墳群	阿蘇郡阿蘇町三久保上浜川・前浜川
51	成川遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町内牧成川
52	大観峯遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町湯浦大観峯山上
53	外輪山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町山田
54	賈込遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小倉賈込
55	狐塚遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小倉狐塚
56	小倉牧の内遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小倉牧の内
57	天神の上遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小倉天神の上
58	西無田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小倉西無田
59	小池牧の内遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小池牧の内
60	水呑場遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小池水呑場
61	松が鼻遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小池松が鼻
62	池の平遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小池松の平
63	池の鶴遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小池池の鶴
64	今町遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町今町今町
65	塔の木古墳	古墳	阿蘇郡阿蘇町小倉塔の本
66	塔の本遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小倉塔の本
67	小倉前田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小倉前田
68	小倉城跡	城跡	阿蘇郡阿蘇町小倉坪の内

69	西川遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町山田西川
70	柏ノ木遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町山田柏ノ木
71	福田寺遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町山田小西
72	山田古墳	古墳	阿蘇郡阿蘇町山田今古閑
73	今古閑遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町山田今古閑
74	不動塚遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町山田不動塚
75	ケオトシ坂上遺跡	散布地	阿蘇郡一の宮町中通ケオトシ坂上
76	小倉遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町小倉大角田
77	大角田石棺	箱式石棺	阿蘇郡阿蘇町小倉大角田
78	村下石棺群	箱式石棺	阿蘇郡阿蘇町小野田村下
79	鷲の石遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町山田鷲の石
80	鞍掛塚A古墳	古墳（円）	阿蘇郡一の宮町中通鞍掛
81	鞍掛塚B古墳	古墳（円）	阿蘇郡一の宮町中通鞍掛
82	上鞍掛塚A古墳	古墳（方円）	阿蘇郡一の宮町中通上鞍掛
83	上鞍掛塚B古墳	古墳（円）	阿蘇郡一の宮町中通上鞍掛
84	大石平古墳	古墳	阿蘇郡一の宮町中通大石平
85	小嵐山古墳	古墳	阿蘇郡一の宮町中通大石平
86	長目塚古墳	古墳（方円）	阿蘇郡一の宮町中通上鞍掛
87	勝負塚古墳	古墳（円）	阿蘇郡一の宮町中通勝負塚
88	銭瓶塚古墳	古墳（円）	阿蘇郡阿蘇町小倉車塚
89	乳母塚古墳	古墳（円）	阿蘇郡阿蘇町小倉車塚
90	車塚A古墳	古墳（円）	阿蘇郡阿蘇町小倉車塚
91	車塚B古墳	古墳（円）	阿蘇郡阿蘇町小倉車塚
92	入道塚古墳	古墳（円）	阿蘇郡阿蘇町小倉入道塚
93	休塚古墳	古墳（円）	阿蘇郡阿蘇町小倉中原前
94	薬師藏古墳群	古墳（円）	阿蘇郡阿蘇町小倉井手前
95	迎平古墳群	古墳群（円）	阿蘇郡阿蘇町手野迎平
96	上御倉古墳	古墳（円）	阿蘇郡阿蘇町手野平
97	下御倉古墳	古墳（円）	阿蘇郡阿蘇町手野平
98	平井古墳	古墳	阿蘇郡阿蘇町手野平井
99	東手野古墳群	古墳群	阿蘇郡阿蘇町手野土井平
100	城山横穴群	横穴	阿蘇郡阿蘇町三野城山
103	下三閑貝塚	貝塚	阿蘇郡阿蘇町三野下三閑

104	三閑古墳	古墳	阿蘇郡阿蘇町三野三閑
105	大門遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町三野大門
112	笹塚遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾笹塚
113	戸下遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾戸下
114	上の小屋遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾上の小屋
115	宇土遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾宇土
116	日下遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾日下
117	上方遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾原田
118	一里山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾一里山
119	産神社遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾下山
120	下山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾下山
121	市原遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾市原
122	下田代遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾下田代
123	小無田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾小無田
124	尻無谷遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾尻無谷
125	池田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾池田
126	古園石棺群	箱式石棺	阿蘇郡阿蘇町狩尾古園
127	古園遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾小屋烟
128	東畠古墳	古墳	阿蘇郡阿蘇町狩尾東畠
129	下無田遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾下無田
130	小野原遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾小野原
131	下扇ヶ原遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町三久保下扇ヶ原
132	狩尾遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾下の原
133	西山崎遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町狩尾西山崎
134	宮山遺跡	集落跡	阿蘇郡阿蘇町赤水水溜
135	宮山石棺	箱式石棺	阿蘇郡阿蘇町の石檜山
136	宮前遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町赤水本宮前
137	松山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町永草松山
138	下山西遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町乙姫下山西
139	鏡山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町乙姫鏡山下
140	下谷中遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町乙姫下谷中
141	明神山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町乙姫下山の下
143	堤遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町黒川堤

144	北塚古墳	古墳	阿蘇郡阿蘇町黒川北塚
146	本塚古墳	古墳	阿蘇郡阿蘇町黒川本塚
147	灰塚古墳	古墳	阿蘇郡阿蘇町黒川灰塚
150	元黒川遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町黒川元黒川
151	踊山遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町藏原踊山
152	東菩薩寺遺跡	散布地	阿蘇郡阿蘇町藏原東菩薩寺
154	阿蘇神社神陵古墳	古墳 (円)	阿蘇郡一の宮町宮地宮園
156	小宰相局の墓	墳墓	阿蘇郡一の宮町宮地西古神
158	番手古墳群	古墳群 (円)	阿蘇郡一の宮町中坂梨前田
163	豆塚古墳	古墳 (円)	阿蘇郡一の宮町坂梨豆塚
164	端塚古墳	古墳 (円)	阿蘇郡一の宮町坂梨端塚
168	京大火山研究所遺跡	散布地	阿蘇郡長陽村河陽高野
169	乙ヶ瀬遺跡	散布地	阿蘇郡長陽村長野乙ヶ瀬
176	長陽中学校遺跡	散布地	阿蘇郡長陽村河陽村下
182	上積遺跡	石棺	阿蘇郡白水村吉田上積
183	俱利加羅谷遺跡	散布地	阿蘇郡白水村白川俱利加羅谷
187	狩塚古墳	古墳 (円)	阿蘇郡高森町色見小倉
188	上色見六地蔵	箱式石棺	阿蘇郡高森町上色見下大邑
190	大村古墳	古墳	阿蘇郡高森町上色見大村
191	てらうと遺跡	散布地	阿蘇郡高森町上色見中大邑

[10]

12	岩戸觀音遺跡	散布地	熊本市松尾町平山岩戸
17	近津園山石棺	箱式石棺	熊本市松尾町近津園山
18	松生島石棺群	箱式石棺	熊本市松尾町近津松生島
19	峠古墳群	古墳群	熊本市松尾町松尾下峠
20	要江石棺群	箱式石棺	熊本市松尾町松尾要江
21	梅洞石棺群	古墳	熊本市松尾町上松尾梅洞
22	小林石棺	箱式石棺	熊本市松尾町上松尾小林
27	馬の水遺跡	散布地	熊本市花園7丁目馬の水
34	フグリ塚古墳	古墳	熊本市花園町柿原滝の平
35	経塚古墳群	古墳群	熊本市花園町柿原経塚
36	本妙寺山石棺	箱式石棺	熊本市花園4丁目中尾
47	岳林寺内城親賢の墓	墳墓	熊本市島崎町島崎

50	鬼塚さん古墳	古墳	熊本市島崎町島崎三軒屋
57	野添遺跡	散布地	熊本市池上町野添平
58	千原台遺跡	散布地	熊本市島崎町島崎千原台
59	城西小学校校庭遺跡	散布地	熊本市島崎町島崎千原台
60	戸坂遺跡	散布地	熊本市戸坂町西原・北原
61	花岡山箱式石棺群 (花岡山古墳群)	箱式石棺	熊本市横手町北平
62	堂出古墳群	古墳群(円)	飽託郡北部町釜尾堂出
63	天福寺裏山古墳群	古墳群	熊本市花園町柿原本山
177	段山遺跡	散布地	熊本市段山町段山
180	吉祥寺裏横穴群	横穴	熊本市横手町宮の坂
184	唐人町遺跡	斐棺	熊本市西唐人町
187	明十橋際遺跡	散布地	熊本市紺屋町・鍛冶屋町
189	新町2丁目遺跡	斐棺	熊本市新町2丁目
192	古城横穴群	横穴	熊本市古城町
194	辛島町遺跡	散布地	熊本市辛島町
195	花畠館跡	館跡	熊本市花畠町
196	山崎町古墳	古墳	熊本市桜町
197	小泉八雲熊本旧居跡	館跡	熊本市安政町
206	千葉城石棺	箱式石棺	熊本市千葉城町
208	千葉城横穴群	横穴	熊本市千葉城町
216	内坪井遺跡	散布地	熊本市内坪井町
217	峰雲院跡墓地	墓地	熊本市坪井4丁目
222	七軒町遺跡	散布地	熊本市子飼本町七軒町
224	子飼遺跡	散布地	熊本市東子飼町・小輔町・大江町
225	一夜塘	堰堤跡	熊本市子飼本町一夜塘
226	坪井古屋敷遺跡	斐棺	熊本市黒髪2丁目
227	小輔町遺跡	散布地	熊本市子飼本町
228	上河原遺跡	斐棺	熊本市黒髪6丁目上河原
229	大江白川遺跡	散布地	熊本市大江1丁目
64	道手石棺郡	箱式石棺	熊本市花園町柿原道手
65	畑の原古墳群	古墳群(円)	熊本市花園町柿原畑の原
66	羽山古墳	古墳	熊本市花園町柿原羽山
67	久布白対馬守五輪塔	塔	熊本市花園町柿原成道寺

68	北島遺跡	散布地	熊本市池田4丁目北島
75	柿原美女尻甕棺群	甕棺	熊本市花園町柿原美女尻
76	花園中尾遺跡	散布地	熊本市花園町中尾
79	池龜遺跡	散布地	熊本市池龜町徳尾
80	井芹遺跡	甕棺	熊本市花園5丁目
81	井芹遺跡	散布地	熊本市花園5丁目井芹
85	本妙寺北遺跡	散布地	熊本市花園4丁目中尾
86	牧崎遺跡	甕棺	熊本市花園3丁目牧崎
87	熊本工業大学遺跡	甕棺	熊本市池田4丁目北島小林
88	富ノ尾1号墳	古墳	熊本市池田3丁目富ノ尾山本
89	富ノ尾2号墳	古墳	熊本市池田3丁目富ノ尾山本
90	長迫遺跡	散布地	熊本市池田3丁目長迫櫛山
91	長迫古墳	古墳	熊本市池田3丁目長迫櫛山
92	山伏塚A遺跡	散布地	熊本市池田3丁目長迫櫛山
93	山伏塚B遺跡	散布地	熊本市清水町高平上高平
94	山伏塚C遺跡	散布地	熊本市池田3丁目長迫櫛山
95	山伏塚	墳墓	熊本市池田3丁目長迫櫛山
96	雷通学園石棺	箱式石棺	熊本市清水町津浦櫛山
98	名義尾塚古墳	古墳	熊本市清水町高平
99	白川学園石棺	箱式石棺	熊本市清水町打越永浦
100	稻荷山古墳	古墳	熊本市清水町打越永浦
103	打越遺跡	甕棺	熊本市清水町打越永浦
104	打越貝塚	貝塚	熊本市清水町打越塚田
106	池田町遺跡 (池田小学校遺跡)	散布地	熊本市池田1丁目岩立
107	津浦一の谷横穴群	横穴	熊本市津水町津浦歩追
108	一の谷遺跡	散布地	熊本市清水町津浦中寄
109	船場山古墳	古墳(円)	熊本市清水町津浦船場
111	稗田横穴群	横穴	熊本市稗田町猪迫
112	往生院境内放牛地藏	塔	熊本市池田1丁目池田
113	往生院境内豪潮宝鏡印塔	塔	熊本市池田1丁目池田
115	寺原横穴群	横穴	熊本市京町本丁寺原
118	龜井松山墓地	墓地	熊本市清水町龜井上屋敷
119	龜井遺跡	散布地	熊本市清水町龜井天神上

121	松崎遺跡	斐棺・散布地	熊本市清水町龜井上屋敷
122	松崎石棺	箱式石棺	熊本市清水町龜井上屋敷
123	万石塚坊主古墳	古墳(円)	熊本市清水町万石
124	万石遺跡	散布地	熊本市清水町万石茶屋原
125	万石茶山遺跡	散布地	熊本市清水町万石茶山
126	万石茶山古墳	古墳	熊本市清水町万石茶山
127	株野遺跡	散布地	熊本市竜田町陳内株野
128	緑ヶ丘遺跡	散布地	熊本市竜田町陳内綠ヶ丘
129	竜田山山頂遺跡	散布地	熊本市清水町室園
130	竜田山南中腹遺跡	散布地	熊本市黒髪4丁目白石
133	九州女学院校庭遺跡	散布地	熊本市黒髪3丁目
135	黒髪町遺跡	斐棺	熊本市黒髪町坪井
136	小峰遺跡	散布地	熊本市黒髪4丁目小峰
137	小峰墓地	墓地	熊本市黒髪4丁目小峰
138	泰勝寺跡	寺院跡	熊本市黒髪4丁目
139	細川家墓地	墓地	熊本市黒髪4丁目
140	泰勝寺墓地古塔碑	塔碑	熊本市黒髪4丁目立田邸
141	泰勝寺内六地蔵石幢	塔	熊本市黒髪4丁目立田邸
142	宇留毛浦山火葬墓地	火葬墓	熊本市黒髪7丁目浦山
143	宇留毛浦山横穴群	横穴	熊本市黒髪7丁目浦山
144	宇留毛浦山2横穴群	横穴	熊本市黒髪7丁目浦山
145	長薫寺古墳	古墳(円)	熊本市黒髪7丁目浦山
146	長薫寺横穴群	横穴	熊本市黒髪7丁目
147	宇留毛神社内古墳	古墳(円)	熊本市黒髪6丁目
148	小穂橋際横穴群	横穴	熊本市黒髪7丁目
149	つつじが丘横穴群	横穴	熊本市黒髪7丁目浦山
150	つつじが丘遺跡	散布地	熊本市黒髪7丁目浦山
151	宇留毛浦山市営墓地遺跡	散布地	熊本市黒髪7丁目浦山
152	カブト山遺跡	散布地	熊本市黒髪8丁目カブト山
153	狐穴古墳	古墳	熊本市黒髪8丁目カブト山
154	女瀬平横穴群	横穴	熊本市竜田町陳内女瀬平
155	竜田山南麓上古墳	古墳	熊本市黒髪8丁目
157	白石古墳	古墳	熊本市黒髪5丁目白石

158	宇留毛神社裏古墳	古墳	熊本市黒髪 6 丁目城床
159	宇留毛城床古墳	古墳	熊本市黒髪 8 丁目城床
161	竜田口 A 遺跡	古墳	熊本市竜田町陳内女瀬
162	竜田口 B 遺跡	古墳	熊本市黒髪 7 丁目女瀬平
163	新南部三ツ石遺跡	集落跡	熊本市新南部町三ツ石
164	新南部 A 遺跡	散布地	熊本市新南部町小磯
167	宇留毛鶴畠 A 遺跡	散布地	熊本市黒髪 6 丁目鶴畠
168	宇留毛鶴畠 B 遺跡	散布地	熊本市黒髪 6 丁目鶴畠・道尻
169	宇留毛 A 遺跡	散布地	熊本市黒髪 6 丁目上屋敷
170	宇留毛上屋敷遺跡	散布地	熊本市黒髪 7 丁目上屋敷
172	桜山中学校遺跡	散布地	熊本市黒髪 5 丁目
174	石神原遺跡	散布地	熊本市島崎町島崎石神原
175	達矢塚遺跡	墓地	熊本市島崎町宮内高島
176	放牛の墓	墳墓	熊本市横手町千原台
231	渡鹿北原遺跡	甕棺	熊本市大江町渡鹿北原
232	渡鹿貝塚	貝塚	熊本市大江町渡鹿北原
234	辻遺跡	散布地	熊本市大江町渡鹿辻
235	北久根山遺跡	散布地	熊本市大江町渡鹿北久根山
236	小闘小松山遺跡	甕棺	熊本市大江町渡鹿小闘原
237	小闘原遺跡	散布地	熊本市大江町渡鹿小闘原
240	杉の木遺跡	散布地	熊本市大江町渡鹿託麻原
241	大江青葉遺跡	集落跡	熊本市大江 2 丁目
242	大江遺跡	散布地	熊本市大江 3 丁目
244	新屋敷町遺跡	散布地	熊本市新屋敷 1 丁目
245	九品寺北原遺跡	散布地	熊本市九品寺 4 丁目北原
246	大江東原遺跡	散布地	熊本市大江 6 丁目
247	熊本高校敷地遺跡	散布地	熊本市新大江 1 丁目
248	熊高通遺跡	散布地	熊本市白川 3 丁目
249	北水前寺町遺跡	散布地	熊本市水前寺 3 丁目
250	南平上墓地	墓地	熊本市大江町本南平上
251	大江新町遺跡	散布地	熊本市新大江 1 丁目
252	保田窪遺跡	散布地	熊本市保田窪本町蛇平
253	帯山遺跡	散布地	熊本市保田窪本町下山

254	西竹洞貝塚	貝塚	熊本市松尾町上松尾西竹洞
255	西竹洞石棺 (西竹洞古墳)	箱式石棺	熊本市松尾町上松尾西竹洞
258	中松尾貝塚	貝塚	熊本市松尾町
260	権現平 2号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾権現平
261	高城山遺跡	散布地	熊本市小島下町下松尾高城山
262	高城判官の墓	墳墓	熊本市小島下町下松尾北菖蒲谷
263	千金甲丙号古墳	古墳	熊本市小島下町下松尾高城山
264	高城山 2号墳	古墳 (円)	熊本市小島下町下松尾高城山
265	高城山 3号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾高城山
266	高城山 4号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾高城山
267	高城山 5号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾高城山
268	高城山 6号墳	古墳 (円)	熊本市小島下町下松尾高城山
269	高城山 7号墳	古墳 (円)	熊本市小島下町下松尾高城山
270	高城山 8号墳	古墳 (円)	熊本市小島下町下松尾高城山
271	高城山 9号墳	古墳 (円)	熊本市小島下町下松尾高城山
272	高城山10号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾高城山
273	高城 1号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
274	高城 2号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
275	高城 3号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
276	高城 4号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
277	高城 5号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
278	高城 6号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
279	高城 7号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
280	高城 8号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
281	高城 9号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
282	高城10号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
283	高城11号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
284	高城12号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
285	高城13号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾高城山
286	千金甲菖蒲谷貝塚	貝塚	熊本市小島下町下松尾千金甲・北菖蒲谷
289	檜崎山 1号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾折地
290	檜崎山 2号墳	古墳 (円)	熊本市小島下町下松尾折地
291	檜崎山 3号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾折地

292	檜崎山4号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾殿面
293	檜崎山5号墳	古墳(円)	熊本市小島下町下松尾殿面
294	檜崎山6号墳	古墳(円)	熊本市小島下町下松尾殿面
295	檜崎山7号墳	古墳(円)	熊本市小島下町下松尾殿面
296	檜崎山8号墳	古墳(円)	熊本市小島下町下松尾殿面
297	檜崎山9号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾殿面
298	檜崎山10号墳	古墳	熊本市小島下町下松尾殿面
299	檜崎山1号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾折地
300	檜崎山2号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾折地
301	檜崎山3号石棺	箱式石棺	熊本市小島下町下松尾折地
307	宮山古墳	古墳	熊本市上高橋町岩崎
308	皆代古墳群	古墳群	熊本市松尾町上松尾皆代山
309	二本松遺跡	散布地	熊本市上高森町鳥帽子山
310	二本松1号墳	古墳	熊本市上高橋町鳥帽子山
311	二本松2号墳	古墳	熊本市上高橋町鳥帽子山
312	二本松3号墳	古墳	熊本市上高橋町鳥帽子山
313	高橋鳥帽子山遺跡	散布地	熊本市上高橋町鳥帽子山
314	小松山1号墳	古墳	熊本市上高橋町鳥帽子山
316	二軒小屋古墳	古墳	熊本市池上町池上谷口
317	池上十三塚	古墳	熊本市池上町柿の木平
319	上高橋堂の園	散布地	熊本市上高橋町堂の園
320	上高橋堂の園古墳	古墳	熊本市上高橋町堂の園
321	たかぼう古墳	古墳	熊本市上高橋町町裏
323	浦田坂遺跡	散布地	熊本市高橋町居屋敷
328	独鉛山中腹遺跡	散布地	熊本市城山上代町高野辺田
329	高橋貝塚	貝塚	熊本市上高橋町居屋敷
330	高橋南貝塚	貝塚	熊本市高橋町
332	高橋稻荷山古墳群	古墳群・箱式石棺	熊本市城山上代町城山・無田脇
333	城山一の塚	古墳	熊本市城山上代町城山
334	城山二の塚	古墳	熊本市城山上代町城山
335	城山三の塚	古墳	熊本市城山上代町城山
337	じゅうしげ山古墳	古墳	熊本市城山上代町北田
338	うまの塚古墳	古墳	熊本市城山上代町宮の下

340	肥州高野山遺跡	散布地	熊本市城山上代町辺田ノ前
350	下代町遺跡	散布地	熊本市城山下代町宮の前
351	中代遺跡	散布地	熊本市城山下代町宮の前
352	中代町遺跡	散布地	熊本市城山上代町島田
353	お徳・徳兵衛古墳	古墳	熊本市城山上代町櫛田
354	道城方遺跡	散布地	熊本市蓮台寺町道城方
355	保徳寺遺跡	散布地	飽託都飽田町孫代保徳寺
356	明神社古墳	古墳	飽託都飽田町上大保
357	古護藤遺跡	散布地	飽田郡飽田町護藤井戸畠
358	刈草遺跡	散布地	熊本市刈草町居屋敷
364	北岡横穴群	横穴	熊本市春日1丁目
365	北岡古墳	古墳	熊本市春日1丁目
371	石塘遺跡	散布地・堤防	熊本市二本木1丁目、二本木2丁目、春日1丁目
375	建設会館遺跡	散布地	熊本市九品寺3丁目
376	西水前寺町遺跡	散布地	熊本市水前寺1丁目
381	出水神社遺跡	甕棺	熊本市神水本町、出水2丁目
383	上江津（大曲）遺跡	散布地	熊本市神水本町八丁馬場
385	江津中の島遺跡	散布地	熊本市画津町下江津中の島
386	古屋敷遺跡	散布地	熊本市画津町江津古屋敷
387	江津湖東岸遺跡	散布地	熊本市新生1丁目、水源1丁目
388	下江津遺跡	散布地	熊本市画津町下江津
389	春日町遺跡	散布地	熊本市春日2丁目
394	世安遺跡	散布地	熊本市世安町池田
395	南新宮遺跡	散布地	熊本市蓮台寺町南新宮
397	平田町遺跡	散布地	熊本市平田町今牛
398	近見遺跡	散布地	熊本市近見町居屋敷・高畑
399	西無田遺跡	散布地	熊本市御幸西無田町日焼
400	田迎下乙遺跡	散布地	熊本市田迎町田井の島七夕・横枕
401	重富遺跡	散布地	熊本市画津町重富野添
403	四戈町遺跡	散布地	熊本市田迎町良町四戈町
404	良町遺跡	散布地	熊本市田迎町良町二石
406	倉小路遺跡	散布地	熊本市白藤町倉小路
407	星敷遺跡	散布地	熊本市白藤町居屋敷

408	戸崎馬塚遺跡	散布地	飽田郡飽田町護藤戸崎
409	戸崎A遺跡	散布地	飽田郡飽田町護藤戸崎
410	八の坪遺跡	散布地	飽田郡飽田町護藤八の坪
425	中椎田遺跡	散布地	熊本市八幡町中椎田屋敷
431	御幸木部町遺跡	散布地	熊本市御幸木部町下屋敷
432	木部石棺	箱式石棺	熊本市御幸木部町上屋敷

[11]

3	陳内上の園A遺跡	散布地	熊本市竜田町陳内上の園
4	陳内上の園B遺跡	散布地	熊本市竜田町陳内上の園
6	陳内上の園古墳	古墳	熊本市竜田町陳内上の園
7	竜田陳内宮の前遺跡	散布地	熊本市竜田町陳内宮の前
8	竜田陳内遺跡	散布地	熊本市竜田町陳内戸の上
10	下南部遺跡	甕棺	熊本市下南部町前畠・北諸・前畠
11	中牧鶴遺跡	甕棺	熊本市竜田町上立田中牧鶴
12	牧鶴宮協(三の宮)遺跡	散布地	熊本市竜田町上立田宮協
13	牧鶴古墳群	古墳群	熊本市竜田町上立田中牧鶴・牧鶴
14	竜田町中牧鶴石棺	箱式石棺	熊本市竜田町上立田牧鶴
15	王田遺跡	散布地	熊本市上南部町王田
16	芭蕉遺跡	散布地	熊本市竜田町上立田芭蕉鶴
18	神園遺跡	散布地	熊本市長嶺町神園神西原
22	中山遺跡	散布地	熊本市小山町中山下井川坂の前
23	中山叶遺跡	集落跡	熊本市小山町中山叶丸
24	若殿塚石棺	箱式石棺	熊本市小山町中山叶丸
26	小山山伏塚遺跡	甕棺	熊本市小山町中山叶丸
29	小山上遺跡	散布地	熊本市小山町中山上の山
30	御船塚遺跡	散布地	熊本市小山町中山御船塚
31	新南部B遺跡	散布地	熊本市新南部町上西原
32	西原遺跡	散布地	熊本市新南部町西原
33	託麻団地遺跡	散布地	熊本市新南部町西原
34	田の迎遺跡	散布地	熊本市保田窟本町
35	乾原遺跡	散布地	熊本市長嶺町乾原
36	迎八反田遺跡	散布地	熊本市長嶺町迎八反田居屋敷
37	八反田遺跡	散布地	熊本市長嶺町八反田・合歎の平

38	殿ノ山古墳	古墳	熊本市長嶺町八反田・合歛の平
41	長嶺遺跡 (長嶺託麻村役場遺跡)	散布地	熊本市長嶺町馬場居屋敷
42	長嶺南共有墓地	墓地	熊本市長嶺町馬場居屋敷
43	長嶺南遺跡	甕棺	熊本市長嶺町南居屋敷
45	二岡中学校々庭遺跡	散布地	熊本市戸島町北向小坂
46	戸島北向遺跡	散布地	熊本市戸島町北向小坂
47	戸島東遺跡	散布地	熊本市戸島町日向
52	葉山A遺跡	散布地	熊本市戸島町北向
53	葉山B遺跡	散布地	熊本市戸島町葉山
55	日向遺跡	散布地	熊本市戸島町日向
56	三郎塚古墳	古墳	熊本市健軍町三郎塚
57	健軍新外遺跡	散布地	熊本市健軍町小峰・新外
58	遠見塚遺跡	散布地	上益城郡益城町木山遠見塚
59	中原道明遺跡	散布地	熊本市小山町中原
60	上陳遺跡	古墳・散布地	上益城郡益城町上陳辻
63	化粧塚古墳	古墳	阿蘇郡西原村布田化粧塚
64	北東・東原遺跡 (北向・東原遺跡)	散布地	阿蘇郡西原村布田化粧塚
65	小東遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森小東
66	べつじ遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森西原
67	玉の迫遺跡	散布地	阿蘇郡西原村布田玉の迫
68	まち遺跡	散布地	阿蘇郡西原村布田下玉田
69	恵良遺跡	散布地	阿蘇郡西原村布田南道角
70	山の神遺跡	散布地	熊本市西原村布田小鶴
71	あかどう石棺群 (あかどう古墳群)	箱式石棺	阿蘇郡西原村布田北平
72	下布田石棺群 (下布田古墳群)	石棺	阿蘇郡西原村布田古閑
73	仲鶴の石棺 (仲鶴古墳)	箱式石棺	阿蘇郡西原村小森仲鶴
74	下小森遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森葉山
75	将軍塚遺跡	散布地	阿蘇郡西原村宮山下高下
76	将軍塚古墳	古墳(円)	阿蘇郡西原村宮山下高下
77	下高下遺跡	散布地	阿蘇郡西原村宮山下高下
78	千人塚遺跡	散布地	阿蘇郡西原村宮山下高下
79	出の口遺跡	散布地	阿蘇郡西原村宮山出の口霍
80	袴野遺跡	散布地	阿蘇郡西原村小森袴ノ霍

84	滝石棺群	石棺	阿蘇郡西原村河原滝
85	滝向石棺群	石棺	阿蘇郡西原村河原滝向
86	日向・上ノ原遺跡	散布地	阿蘇郡西原村宮山日向・上ノ原
87	多々良上遺跡	散布地	阿蘇郡西原村宮山多々良上
88	多々良遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山多々良
89	ぬぬや遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山鬼山
90	宮山本村遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山西原
91	宮山神社の前遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山西原
92	宮山神社境内石棺群	箱式石棺	阿蘇郡西原町宮山西原
93	宮山神社東側遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山西原
94	宮山神社西側遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山西原
95	宮山神社裏手遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山西原
96	ならぎ遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山西原
97	牟田遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山広瀬
98	広瀬遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山広瀬
99	鬼太郎遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山鬼山
100	なこやしき遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山宮山
101	にれやま石棺群	箱式石棺	阿蘇郡西原町宮山奈良山
102	奈良山遺跡	散布地	阿蘇郡西原町宮山奈良山
104	谷頭遺跡	集落跡	阿蘇郡西原町河原谷頭
105	藤水遺跡	散布地	阿蘇郡西原町河原藤水
106	浜ノ谷入口遺跡	散布地	阿蘇郡西原町河原大野
108	冠岳一の峯南方の谷遺跡	散布地	阿蘇郡西原村宮山医王寺向
109	冠岳頂上遺跡	散布地	阿蘇郡西原村宮山医王寺向
110	冠岳山道遺跡	散布地	阿蘇郡西原村宮山医王寺向
111	鳥井原遺跡	集落跡	熊本市健軍町鳥井原
112	健軍町北原遺跡	集落跡	熊本市健軍町北原
114	健軍神社遺跡	集落跡	熊本市健軍町宮の下
115	上の原遺跡	集落跡	熊本市健軍町上の原
119	広木遺跡	方形周構墓	熊本市水源1丁目泉が丘
121	佐土原遺跡	散布地	熊本市健軍町佐土原
123	沼山津貝塚	貝塚	熊本市秋津町沼山津貝塚
126	沼山津遺跡	散布地	熊本市秋津町沼山津貝塚

127	横井小楠墓	墳墓	熊本市秋津町沼山津貝塚
128	福富古墳	古墳	上益城郡益城町広崎打出宅地
129	福富遺跡	散布地	上益城郡益城町広崎内牟田・古闕石井
130	広崎六本木遺跡	散布地	上益城郡益城町広崎六本木
131	古闕遺跡	散布地	上益城郡益城町古闕宅地
132	惣領遺跡	散布地・斐棺	上益城郡益城町惣領高木
133	狐塚古墳	古墳	上益城郡益城町馬水駿河原
134	馬水製鉄跡	製鉄跡	上益城郡益城町馬水駿河原
143	宮園A遺跡	散布地・斐棺	上益城郡益城町木山遠見塚 宮園三の迫・二の迫
145	平田遺跡	散布地・斐棺	上益城郡益城町平田境
147	福原横穴群	横穴	上益城郡益城町福原西鳥山
149	赤井遺跡	散布地	上益城郡益城町赤井登町
150	鬼の窟古墳	古墳	上益城郡益城町福原南市川
169	石塚遺跡	斐棺	上益城郡嘉島町北甘木石塚・笈の瀬劍原
170	剣原遺跡	斐棺	上益城郡嘉島町北甘木剣原
171	剣原古墳	古墳	上益城郡嘉島町北甘木剣原
173	上官塚1号墳	古墳(円)	上益城郡嘉島町井寺上官塚
174	上官塚2号墳	古墳(円)	上益城郡嘉島町井寺上官塚
175	上官塚遺跡	斐棺	上益城郡嘉島町井寺上官塚
176	塔ノ木石棺	箱式石棺	上益城郡嘉島町北甘木塔ノ木・豆板
177	小追遺跡	散布地	上益城郡嘉島町井寺小追
178	御前塚古墳	古墳	上益城郡嘉島町北甘木塔ノ木
179	二子塚遺跡	散布地	上益城郡嘉島町北甘木二子塚
180	二子塚古墳	古墳	上益城郡嘉島町北甘木二子塚
181	下ノ古闕遺跡	散布地	上益城郡嘉島町北甘木下ノ古闕
182	塔平遺跡	散布地	上益城郡益城町小池塔平
237	飯田古墳	古墳	上益城郡益城町祇川飯田常楽寺

(12)

2	揖ノ尾遺跡	散布地	阿蘇郡久木野村河陰西鶴
9	猶須遺跡	散布地	阿蘇郡久木野村河陰猶須原
10	平原遺跡	散布地	阿蘇郡久木野村久石平原
17	南鶴遺跡	散布地	阿蘇郡白水村吉田南鶴
20	新町遺跡	散布地	阿蘇郡白水村吉田城後

21	白川水源地遺跡	散布地	阿蘇郡白水村白川出口
22	孝女白菊の墓	墳墓	阿蘇郡白水村白川女辻
24	長塚古墳	古墳	阿蘇郡高森町色見下中山
25	柏塚相姫の墓	墳墓	阿蘇郡高森町高森市下
26	柏塚古沢元倫の墓	墳墓	阿蘇郡高森町高森市下
27	陣林石棺	石棺	阿蘇郡久木野河陰陣林
29	六の小石遺跡	散布地	阿蘇郡久木野河陰六の小石
30	二子石遺跡	散布地	阿蘇郡久木野河陰上二子石
31	津留大藏の墓	墳墓	阿蘇郡高森町高森大鶴
34	年の神遺跡	散布地	阿蘇郡高森町高森小鶴
37	了誓上人父子の墓	墳墓	阿蘇郡高森町高森町中
40	上の園 1号墳	古墳	阿蘇郡高森町高森上の園
41	上の園 2号墳	古墳	阿蘇郡高森町高森上の園
42	上の園 3号墳	古墳	阿蘇郡高森町高森上の園
43	上の園 4号墳	古墳	阿蘇郡高森町高森上の園
44	山村主殿父子の墓	墳墓	阿蘇郡高森町高森本町
45	深水摂津介瀬則の墓	墳墓	阿蘇郡高森町高森須坂
46	内山遺跡	散布地	阿蘇郡高森町高森城山下
48	高森伊予守の墓	墳墓	阿蘇郡高森町高森須坂

第3表 熊本県出土弥生時代銅器出土地名表

本表は九州歴史資料館刊の『青銅の武器』の付・日本青銅器武器出土地名表と隈昭志「熊本県の弥生時代鑑鏡」から引用した。

〔1〕熊本県銅剣・銅戈・銅鉤・巴型同器・銅製品出土地

番号	出 土 地 名	品名	数	型 式	所 �藏 者
1	玉名郡南関町下坂下	矛	1	広形	山鹿市立博物館
2	玉名郡岱明町野口年の神遺跡	矛	1	細形か?	岱明町公民館
3	玉名郡中富手永下米野	矛	2	1.細形 II c か ? (有文)	
4	山鹿市蒲生下原	戈	1	2. タ 細形 II a 鋒部のみ	山鹿市立博物館
5	菊池市隈府町玉祥寺	矛	1	中細 a 1尺7寸 幅1寸5分5厘	菊池武彦→東京 国立博物館出陳
6	菊池郡大津町後迫大松山	戈	2	1.中広	新聞紙
7	菊池郡大津町陣内下町出分	矛	1	2.中広 (中細に極 めて近い) 広形	日吉神社
8	菊池郡大津町真木西津留839	戈	2	1.中細 b 長28.9cm 2 タ 長30.0cm	京都国立博物館保 管

遺構	伴出品	備考
工事中表面採取		身の中央部のみ 田添夏喜「年の神弥生遺跡」『熊本史学』39 1971
田中より発掘		破片 長山源雄「肥後國玉名郡発見の銅鉢」『考古學』1-1 七田忠昭「文様ある銅矛について」『九州考古學』52
タ 斐棺		袋部・節部・鉢葉部 ・柄に特異な文様を施す。 高倉洋彰「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2 // 限昭志「熊製と隼人の文化」『光は西から』 橋口達也編『スダレ遺跡』 斐棺は「中期もややさがる」ないし「黒髪式」とされている一方で橋口は時期を「中期前葉」とする
地を掘つていて出土	不明	「熊本県下に於ける銅劍銅鉢の調査」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊 近藤「狭鋒銅矛d」 岡崎「中細銅矛B」
耕作中出土		「熊本県下に於ける銅劍銅鉢の調査」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊 長さ1尺1寸7分 幅2寸5分 長さ1尺1寸4分 幅2寸
タ 林を開く時に出土	何かあつたらしい	内に片面に鳥か虫の異形化したような絵あり。 内に両面に文様あり 近藤「広鋒銅矛A」 長さ2尺8寸3分 幅4寸
水田の地下げ工事中に掘り出す。特に施設なし		天保12年発見 『埋蔵文化財要覧』3 1962 坂本経堯「熊本県内の銅鉢銅戈」 昭和30年12月12日発見

9	菊池郡旭志村川辺上西原1945	矛	1	中広 長75.2cm	坂本傳男
10	飽託郡北部町和泉川東 八鉾神社	戈	1	中広（鋒部のみ）	八鉾神社→北部町 教委
11	飽託郡北部町鶴羽田	戈	1	熊本市立熊本博物 館	
12	鹿本郡植木町今古闇459	矛	4	1.中細 a 2. タ 3.中細 b 4. タ	京都国立博物館 タ タ タ
13	鹿本郡鹿本町御字田	矛	1	中広 長76.8cm	鹿本高校
14	鹿本郡鹿本町庄太郎丸	矛	1	中広 長82.5cm	星子清→鹿本高校
15	鹿本郡鹿本町大字下原字天神字 天神免	?	1	鋒部のみ	熊本県教育委員会
16	同 上	剣	1	タ	タ
17	熊本市藤崎宮蔵品 出土地不詳	矛	1	中広 長さ 2尺6寸7分 5厘 幅 2寸4分	藤崎宮

桑畑に堆肥を埋める塗を掘つているとき出土		『考古学集刊』2—4地名表 坂本経堯「熊本県内の銅鉢銅戈」昭和39年12月16日発見
箱式石棺		乙益重隆「広形銅戈を副葬した箱式石棺の一例」『上代文化』35最初から鋒部のみが副葬されていたらしい。 『北部町史』
地下げ工事中出土	弥生土器片	坂本経堯「熊本県内の銅鉢銅戈」『新たに國の保有になつた埋藏文化財』
豊穴住居址内に築かれた高床	磨製石	「特別陳列目録」1965（東博）
深さ二尺にして発見		長54.0、55.7、60.0、67.7cm
水田地下げの際発見	付近から弥生式土器の類発見	昭和32年12月17日発見
27号土壙墓の中		川村真一「熊本県鹿本郡来民町御字田発掘の銅鉢」『考古学雑誌』25—1 // 坂本経堯「熊本県内の銅鉢銅戈」長さ2尺7寸3分 幅3寸 「熊本県下に於ける銅劍銅鉢の調査」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』2 // 川村真一「考古学雑誌」25—1 前期の木棺墓の可能性大 小片なので器種不明
		「熊本県下に於ける銅劍銅鉢の調査」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』2
		細川侯の寄進といい 阿蘇出土の疑あり。

	出土地不詳	戈	1	々 (1尺2寸2分)	々
				幅2寸4分	
18	球磨郡多良木町大久保ヤリカケ松	劍	1	細形1B 全長21.5cm	龜居正喜 熊本市立熊本博物館保管
19	阿蘇郡西原村上烏子烏子三宮神社藏品 出土地不詳	矛	2	1.中広 長2尺6寸 幅1寸9分 2. 々 長さ2尺4寸5分 幅2寸3分	烏子三宮神社
20	阿蘇郡阿蘇町乙姫鏡山	戈	1	中細aかb 長さ1尺	笠原助→早稲田大文学部か
21	阿蘇郡小国町下城 神社藏品 出土地不詳	戈	4	1.中広 2. 々 3. 々 4. 々	下城神社 々 々 々
22	阿蘇郡小国町宮原 両神社藏品	矛	1	中広 長さ2尺6寸5分 (幅2寸2分) 3寸1分	両神社
23	阿蘇郡南小国町市原 天満宮神社藏品 出土地不詳	戈	1	中細aかb 長さ9寸4分 幅1寸2分	天満宮神社
	そ の 他				
24	山鹿市方保田	巴型	1	7脚 径11.9cm	山鹿市立博物館
25	下益城郡城南町	巴型 銅器	1	8脚 径12.3cm	
26	宇土市	不明			
27	菊池市	貨泉	1	径2.30cm	

	「熊本県下における銅剣銅鉾の調査」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告2』	阿蘇出土の疑あり
箱式石棺と推定される	乙益重隆『肥後上代文化史』1954	三折
	「熊本県下に於ける銅剣銅鉾の調査」 『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』2	近藤「中鋒銅矛A」 出土地不詳。だが恐らくは神社の附近らしい。 近藤「中鋒銅矛B」
地下4尺の所		
なし	同 上	
	同上長さ1尺2寸6分鋒2寸2分	出土地不詳
	長さ1尺2寸6分鋒2寸	タ
	長さ1尺3寸 文様アリ	タ
	長さ1尺2寸 鋒1寸8分	タ
	「熊本県下に於ける銅剣銅鉾の調査」 『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』2	近藤「中鋒銅矛B」 鋒欠
	同 上	出土地不詳 M. 19発見
	耕作中	出土地不詳
弥生式土器		

〔2〕弥生時代の鏡出土地一覧表

	遺跡名	所 在 地	鏡式	遺構
1	戸坂	熊本市戸坂町西原北原	内行花文鏡	不明
2	古閑原	菊池郡泗水町吉富古閑原	内行花文鏡	住居址内?
3	方保田白石I	山鹿市方保田白石	内行花文鏡 (十稜)	箱式石棺
4	同 II	同		箱式石棺?
5	石原龜甲I	熊本市石原町龜甲	内行花文鏡 (八稜?)	墓地?
6	同 II	同	内行花文鏡	墓地?
7	西弥護免	菊池郡大津町大津西弥護免	内行花文鏡 (六稜)	集落の溝上 (墓地?)
8	徳王	飽託郡北部町徳王鶴畠	内行花文鏡 (九稜)	住居址内?
9	諏訪原	玉名郡菊水町江田諏訪原	八乳文鏡	住居址内
10	木瀬	菊池郡合志町上の庄木瀬	S字文鏡	住居址内
11	大道小学校付近	山鹿市保田本村(付近)	方格規矩文鏡	不明

〔参考文献〕

- (1) 乙益重隆「戸坂町北原出土の内行花文鏡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1968
- (2) 頼昭志 原始・古代『植木町史』植木町教育委員会 1981
- (3) 頼、杉村彰一「方保田調査概報」チブサン13 県立鹿本高校考古学部 1968
- (4) 高木正文 光沢徳行「熊本県石原龜甲遺跡の小形防製鏡」『九州考古学』54、1979
- (5) 西弥護免遺跡調査団「西弥護免遺跡調査概報」1980
- (6) 濱丸敬二「西弥護免遺跡発掘調査概要」 どつばあ3-11 株式会社ドッパー 1981
- (7) 富田紘一「徳王出土の鏡」『北部町史』北部町 1979
- (8) 緒方勉「諏訪原遺跡発掘調査概報」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査団 1971
- (9) 緒方勉「諏訪原遺跡出土遺物」『熊本史学』37、1970
- (10) 佐藤伸二「菊池郡合志町木瀬遺跡 肥後考古学会第134回例会 1968 (発表要旨)

面径(cm)	保 管	出土年	参考文献	備 考
(15.0)	熊本市西山俊一		(1)	舶載、鏡片研磨
(14.6)	植木町古財国春	1970	(2)	舶載、鏡片研磨、穿孔
9.2	鹿本高校	1965	(3)	仿製
	不明	1965	(3)	仿製
7.5	県教育委員会	1976	(4)	仿製
(7.5)	県教育委員会	1976	(4)	仿製
8.6	阿蘇実験考古学研究所	1979	(5)(6)	仿製
7.7~7.9	熊本市上野辰男	1960	(7)	仿製
(9.0)	県教育委員会	1965	(8)(9)	仿製、鏡片研磨
4.9	熊本大学	1968	(10)	仿製
	山鹿市立博物館			舶載

これらの遺跡群には旧石器時代の石器を出土する大觀峯遺跡（8-52）や縄文時代早期の押形文を出土するカブト山遺跡（10-152）などがある。梅ノ木遺跡から出土した弥生式時代の斐棺墓群は竹ノ後遺跡や白藤遺跡など沖積平野にまで伸びている。また、梅ノ木遺跡から白川上流6.3kmのところから出土した銅鉢などもこの白川水系を境にして南に伸びていない。最近城南町から巴型銅器〔第4図〕が、用途不用の小銅片ではあるが宇土城三の丸に所在する弥生前期の溝から出土している。又人吉盆地からは小銅劍が出土しているがこれだけが分布圏はるかにこえている。銅鉢、銅戈の鋳型が筑後川付近を境界に南漸していないようで、この白川水系を境に弥生時代銅器の出土はほとんど見られなくなる。

次に示す銅戈や銅鉢はすでに古く熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2報に紹介されているものであるが詳細図を示したいと考える。

松山遺跡出土戈〔第6図参照〕

大津町大松山出土である。現在の所有者は新聞職氏で母方の父が京大報告にある坂本幸四郎氏になる。小さな塚から掘り出したとのことで、當時好事家がおり、「じだ（土地）3段と替えてくれ。」と言われたが替えなかつたとのことである。大津町より木製の保存箱が贈られ大切に保管されている。全国遺跡地図にはこれも銅鐸出土地と誤記されている。

戈は2本あって、内に文様があることは古くから注意されている。今回観察の機会を得たので紹介しておきたい。

1はJ型の鉤状文様が片面に1個、他は背中合せに2個ついている。文様は細線の浮出し文である。福岡市西区早良町西入部白塔の人面文様の目・口が省略され抽象化されたのではないかと考える。全長37.6cm、幅5.86cmである。穴と内の一部は使用されたものか紐ずれみたいな光沢がある。

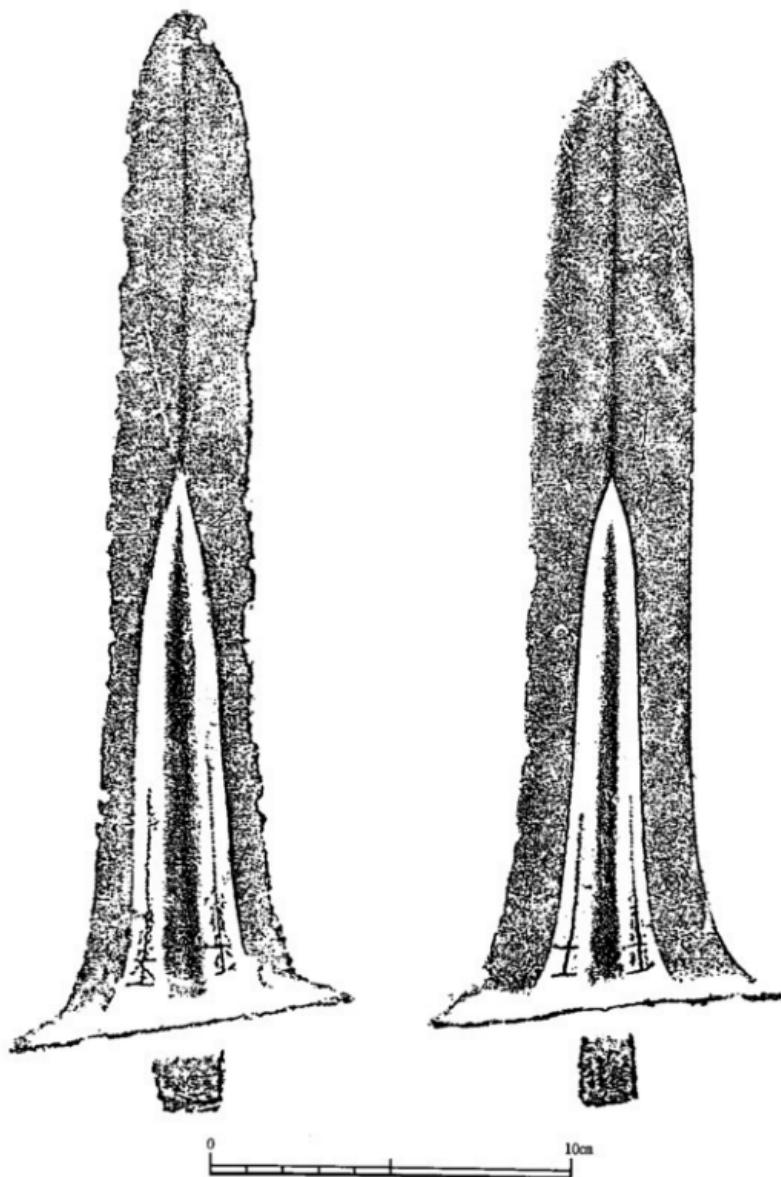
他の1つは「茎の一面に鳥か虫の異形化せるものと覺しき圖像を浮彫せるは」と紹介されているものである。全長37.8cm、幅7.54cmである。

祝屋敷遺跡（真木遺跡）出土戈〔第5図参照〕

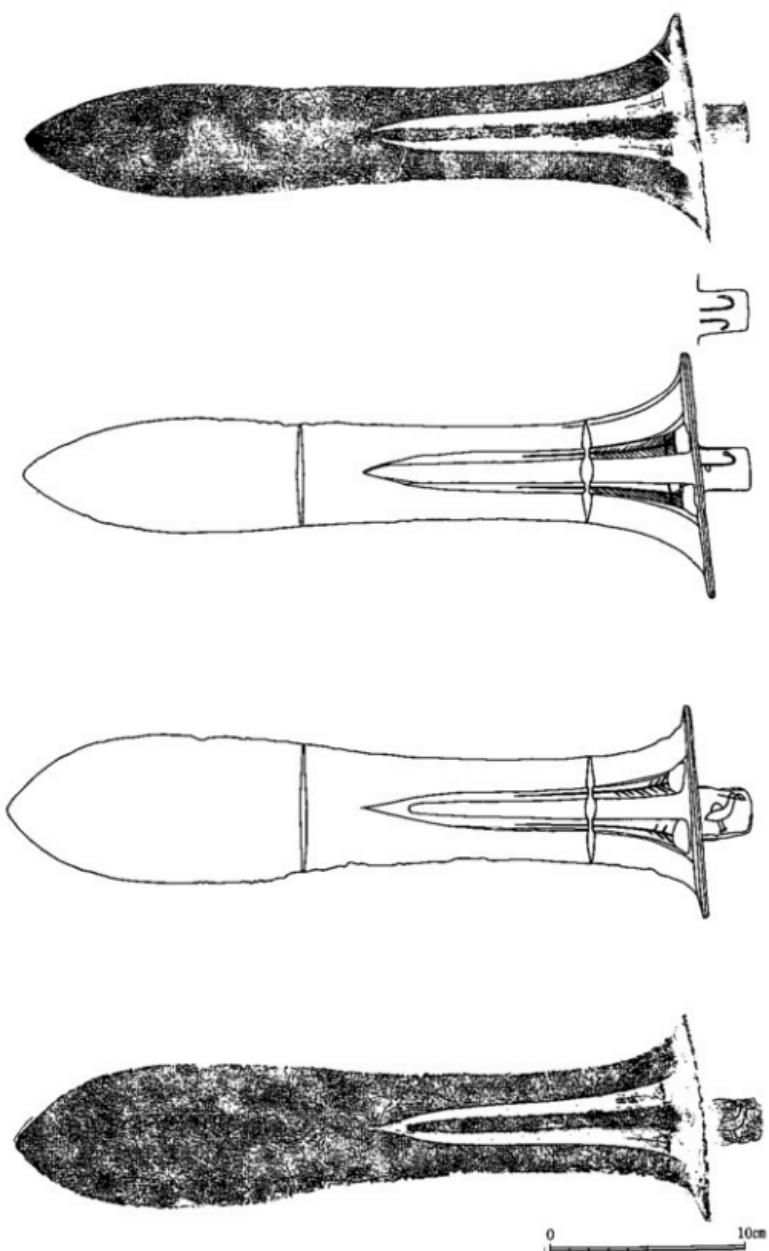
大津町真木西津留より出土したもので、国の保有となり京都博物館に保管されている。拓本は坂本経堯氏が拓をとり川上勇輝氏に贈られたものである。いずれも故人となられた。全国遺跡地図ではこれも銅鐸出土地・散布地となっているが銅鐸は銅戈の誤記である。

外園遺跡（貨泉出土地7-112）〔第7図参照〕

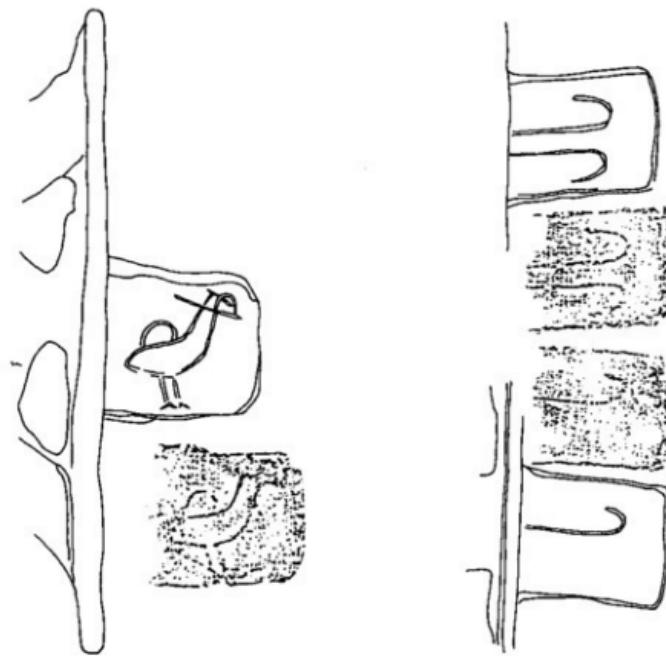
貨泉については紹介されているが、採集当時のようすがよくわからないので供伴資料としては少し不安はあるが一括資料として提示を試みる。資料は故川上勇輝氏の採集になるもので土器資料には未で「長外」の記入がある。又、生前筆者が宿泊させていただいた時にもこれら



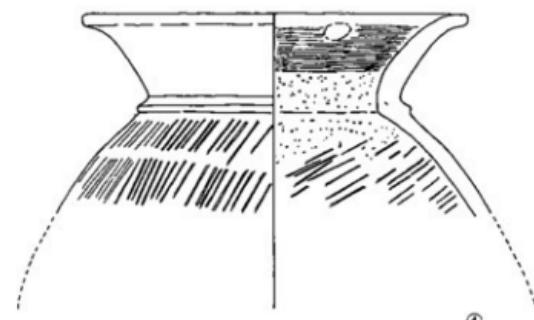
第5図 銅戈祝儀敷（真木）遺跡



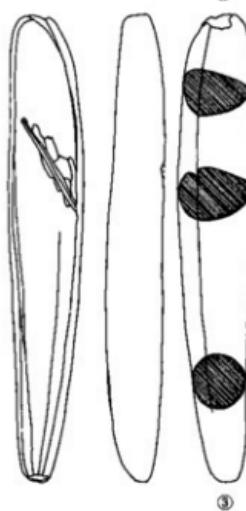
第6図 銅戈大松山遺跡



第7図 貨泉と銅戈

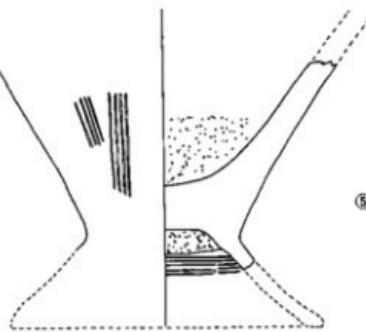


④

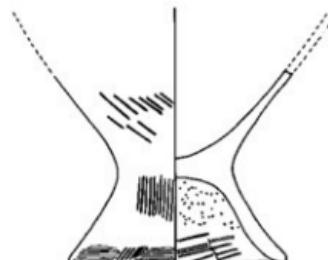


②

③



⑤



⑥



⑦

第8図 貝泉共伴資料

の資料は拝見させていただいた記憶がある。「菊池市博覧会」の記録写真が保存されており、それによると一括資料として図示した遺物の外にもう一点石包丁が写っている。今回の調査では確認できなかつた。貨泉については昭和45年6月21日佐藤伸二氏が実測に行かれた時に同行し、写したものである。又、貨泉の法量は佐藤氏の測られたものである。故川上勇輝氏の資料は現在御子息が大切に保存せられておる。

資料1 砥石。巖色の粘板岩で各々の面が平になつてゐるので砥石に使用されたものであろう。全長24.4cm 断面台形厚さ3.5cm

資料2 石刀である。全長23.8cm、厚さ3.8cm。かつおぶし形で、断面を見ると一方が丸く、他方はゆるやかな刃部を作りだす。これも手ずれによるようなつやがある。完形品であるが歯の刃による新しい傷跡が見られる。石質不明。河浦町史に弥生式土器共伴の石刀が図示されている。

資料3 石包丁 長さ9.9cm、2穴の穿孔。粘板岩黒色、厚さ0.65cm

資料4 弥生式土器壺の一部。やや厚手であるが頸部に一条の突帯がある。口唇は外反し、貼付円文が剥落したのか器壁のあれば1ヶ所みられる。ハケ調整痕 口径20.2cm、くびれ部径13.0cm。

資料5 弥生式土器の底部。内部と底内面に砂の付着が見られる。上。下とも欠失。

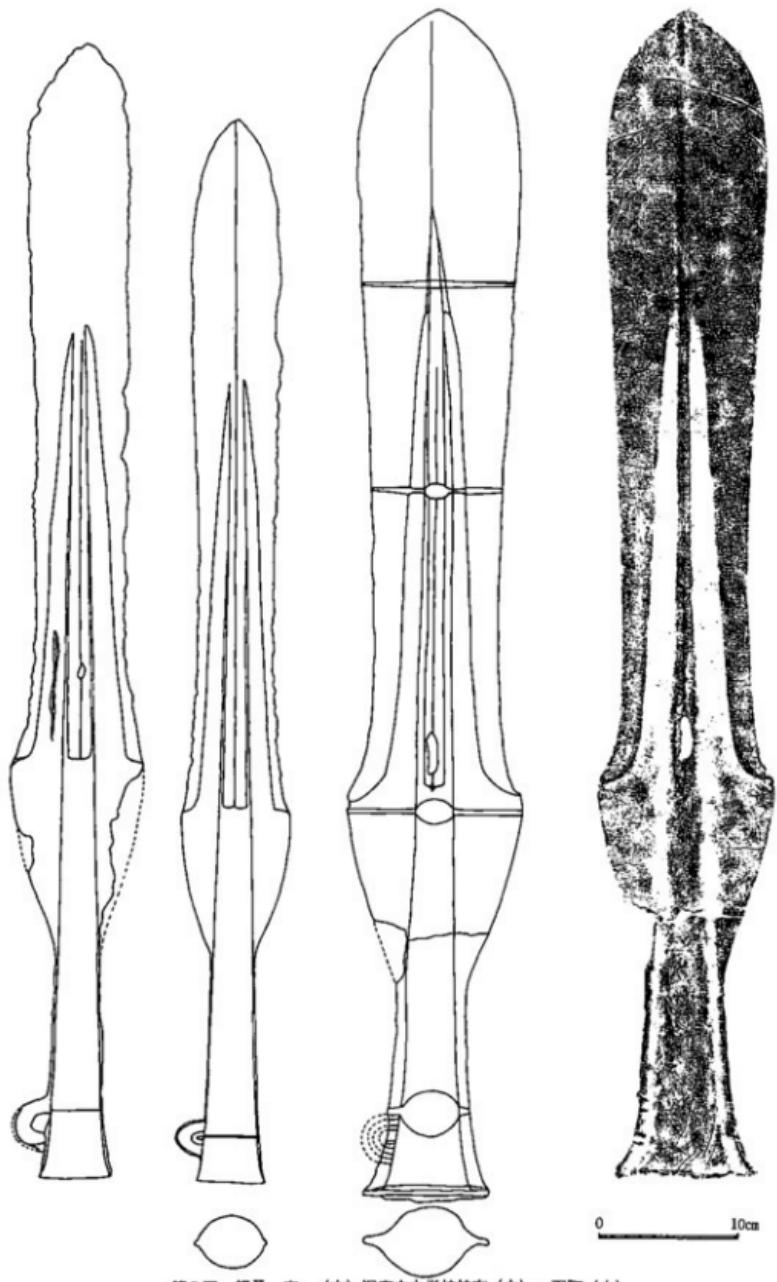
資料6 土器底部で八の字に開く。外面はハケ目、底側内面はハケ目、砂が表面に認められる。これは緒方勉氏が「黒髪式土器雑考」に記された砂粒を使用した手法と同じものと考えられる。

資料7 ルツボ型土器とされているが土器にはルツボとして使用された痕跡はない。完形品で外側はハケ目調整。器高9.3cm、口径7.5cm、底径4.0cmである。この器種は、重弧文(免田式)式土器の一群に把手のあるジョッキ型土器や把手なしのコップ状製品につながるものであろうか。

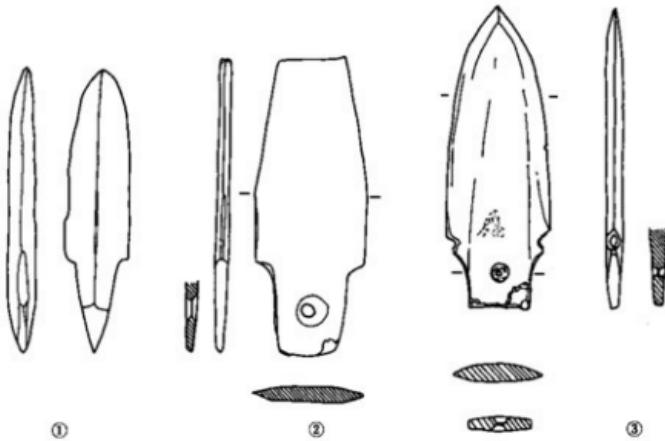
資料7 貨泉は径2.30cm、長崎県対島シゲノダンの貨泉が2.3cmである。新聞報道によると福岡県の御床松原では貨泉と人字半両錢が出土している。

下町遺跡出土銅鉢〔第9図参照〕

全国遺跡地図には銅鉢出土地と誤記されているが、銅鉢出土地である。広形銅鉢で全長cm、幅12.95cm。袋部端は全く手を加えず耳部は欠失している。背上にわずかに鏽のとぎだしが見られ、鋒部の鏽は突線化されている。袋部には真土がつまり、折損しているところ基部より20.4cm、湯のまわりが悪く基部より31.7~34.2cmのところに虫喰い様の穴があるが、そこまで真土がつまっている。耳部の欠失は京都帝国大学文学部考古学研究報告第7冊(大正15年9月)にも見られるが、折損はその後であろうか。又、同報告には発見地と出典の欄が前出の銅戈と

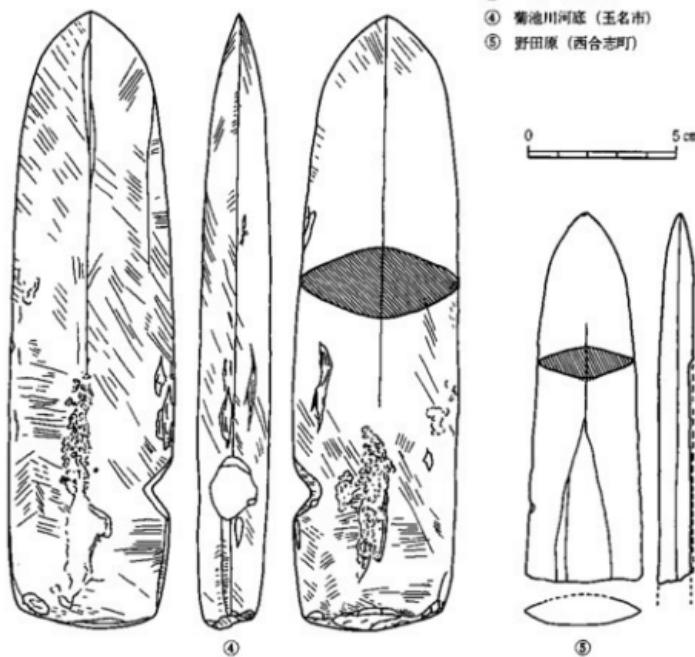


第9図 銅矛、庄、(左) 旧鹿本中学校校庭(中)、下町(右)

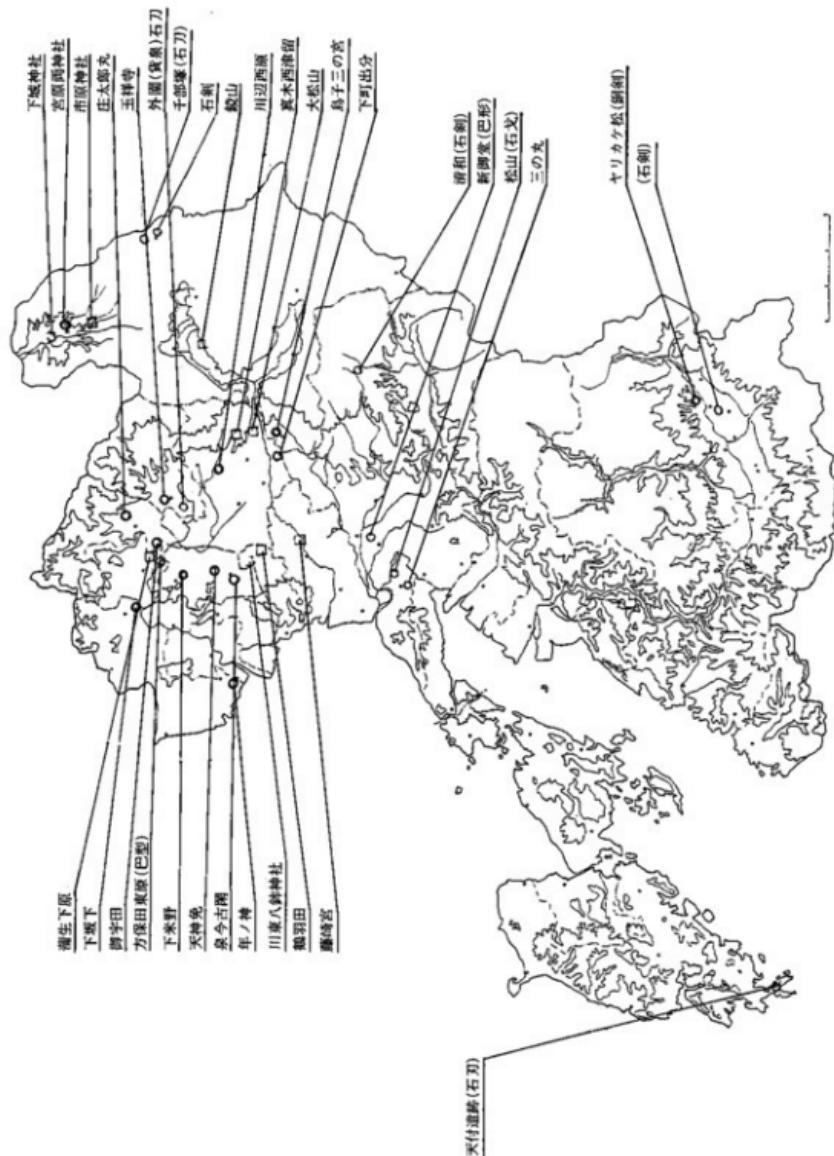


- ①
- ②
- ③ 桜木野（波野村）
- ④ 菊池川河底（玉名市）
- ⑤ 野田原（西合志町）

0 5 cm



第10図 県下各地出土石剣・石戈



第11図 銅劍・銅鉈・石戈・石劍等出土地

混乱しているので訂正をしておきたい。

発見地（所在地）	個数	型式	伴出遺物	出典
肥後菊池郡 同 同 大津町字下松山	2	剣35、剣32	単独出土	坂本幸四郎君藏
同 同 陣内村下町	1	鉢20	同上	同地久保田日吉神社蔵

保存については下記のような保存規約にしたがって、現在の区長さん大田黒春雄さんが保管されている。

窟田日吉神社銅鉢管理保存規約

1. 趣旨

第1条 この窟田日吉神社の銅鉢管理保存に関しては別段の定めのある場合のほかこの規約による。

----- (中略) -----

第3条 この銅鉢は代々下町区長管理保存するものとする。

----- (後略) -----

窟田日吉神社の管理人は7人おり、氏子は7部落483戸ある。

なお、出土地は鹿本郡鹿本町庄と地形が似かよっている。川の氾濫原に近い水田地帯である。庄の場合は付近に支石墓と甕棺が発見されている。この付近は最近の圃場整備で甕棺に使用できる大形甕が出土している。窟田日吉神社の例祭は9月19日に行われる。

以上、梅の木遺跡が所在する白川水系を中心に遺跡のあり方や梅ノ木に住居址が作られた弥生時代の青銅器についてもふれてみた。菊陽町町内の文化財については『菊陽の文化財 第1集』^{註1}や『菊陽町及び周辺の史跡・名勝・伝説(民話)』^{註2}がすでに刊行されているので参照されたい。

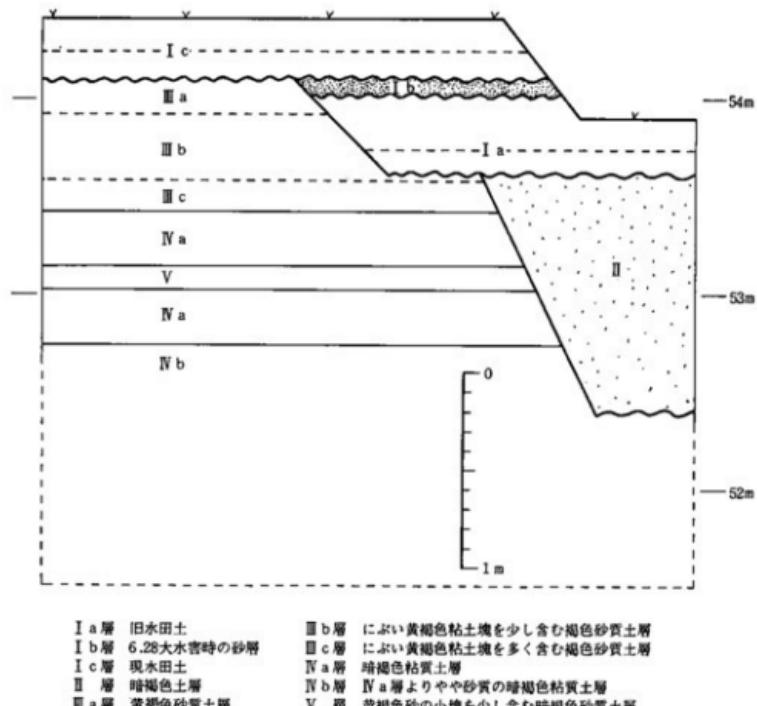
註1 菊陽町教育委員会 1982

註2 佐藤芳男編著 1980

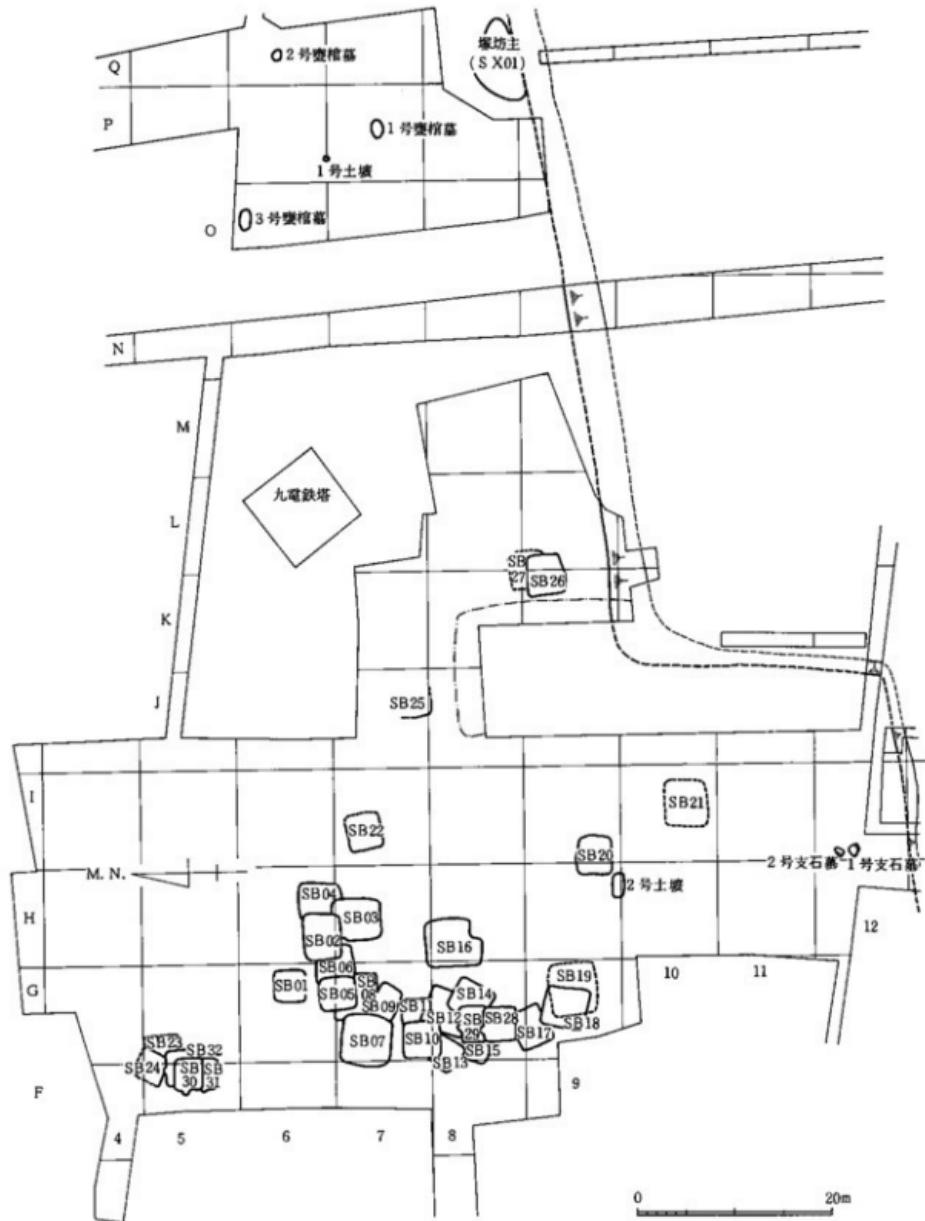
第4章 遺構と遺物

第1節 調査地の土層

梅ノ木遺跡は白川の形成した自然堤防状の微高地に位置している。遺跡の北方の県道沿いには東西方向の幅30~50mの低地がみられ、圃場整備前は小河川が流れているが（第3図）、圃場整備の工事中の観察によると地表下マイナス3mぐらいに白川と同様の人頭大以上の円礫が埋積しており、以前に相当量の水流があったことがうかがえる。調査中の洪水の流れもこの低地帯に向って流れている。以上のことから推すと、遺跡地付近はこの地の開発が進む以前は白川の中州状の地形でなかったかと考えられる。



第12図 梅ノ木遺跡の土層断面模式図



第13図 造橋配置図

遺跡の土層は、基本的には第12図の示した堆積をしている。Ⅱ層は現在の白川の堤防の北側と遺跡の位置する微高地との間にある幅50mの低地に堆積した土層である。砂粒を多く含んだ暗褐色土層で、比較的新しい時代に白川の河道沿いに堆積したものとみられる。Ib層は昭和28年の6月26日の白川大水害の名残りとみられる灰色砂層である。この水害では遺跡付近で1.5mほどの砂の堆積をもたらしており、この土砂の排除のために、遺構確認面で検出された縱横に走る溝が掘られ、砂流しに使用されている。Ia層はこの6.26大水害の以前の水田土であり、Ic層はこの大水害後から現在に至る水田土である。

Ⅲ層以下は白川運搬作用によって遺跡付近の微高地を形成した土層である。Ⅲ層は褐色～黄褐色を呈する砂質土層で、遺構はこの土層の上面において確認されている。これと同様の土層は白川下流5kmに位置する下南部遺跡で弥生時代住居跡が堀り込まれているⅣ層の黄褐色土層と同じものではないかとみられる。Ⅲ層の上部にはすぐ現在の水田床土がのっており、この層自体がかなり削平されているものとみられる。このⅢ層以下の土層中からは遺物は出土していない。

第2節 遺構各説

試掘調査の所見に基づいて、約6,000m²について水田耕作土を除去した。検出された遺構は弥生時代の竪穴住居跡27棟・支石墓2基・甕棺墓4基・土壙1基があり、奈良時代後半から平安時代初頭にかけての竪穴住居跡5棟がある（第13図）。この他、調査区の東部にある「塚坊主」と呼ばれていた塚は、調査の結果、明治以降の地下げに際して出土した多数の甕棺や土器類を集めて埋戻し、供養していたものであった。なお、調査終了後の圃場整備工事の際に7個体分の甕棺が調査区より北方約50mの付近（試掘トレンチの周辺）から採集されている。調査区東部の甕棺墓群のように、甕棺墓群を形成していたものであろう。

1. 弥生時代の竪穴住居跡

弥生時代の竪穴住居跡は合計で27棟が検出された。調査区の西半部中央に集中する傾向があり、西方調査区外にお住居跡が存在する可能性がある。住居跡が本来的に掘り込まれた土はかなりの削平をうけているらしく、床面だけが検出されたものや、わずかに壁を残しているもののがかなりある。反面、これらと隣接しているながら50cm以上の壁を残している住居跡も存在している。住居跡は、前述した微高地の中央部付近の最も高所となっていた地点に営まれたものとみられる。

1号住居跡（第14図上）

東辺3.5m、西辺3.0m、南北辺3.3mの台形に近い方形の住居跡である。深さは20cmを測る。床面は平坦で、焼土や炭化物は検出されていない。北西隅に貯蔵穴かとみられる深さ75cm、最大直径65cmの不整円形の土壙がある。床面には合計9個のピットがあるが、P. 2とP. 11が主柱となるのではないかとみられる。遺物の出土は極めて少ない。

2号住居跡（第5図上）

4・6号住居跡に後出する一辺4.5m前後の方形の住居跡である。プランは床の硬化面の広がりによって推定したもので、北辺で確認された壁高は36cmを測る。床面は平坦で、炭化物が南西隅において検出されている。床面には4個のピットがあるが、柱穴については不明である。遺物の出土は極めて少ない。

3号住居跡（第15図下）

長辺4.3m、短辺3.8mの隅丸方形の住居跡で、深さは中央で42cmを測り、床の東辺と南辺では10cmほどの段をもった凹みがめぐる。東辺中央とP. 5からは炭化物が検出されている。北東隅には長径67cm、短径58cmの梢円形を呈する深さ55cmの貯蔵穴かとみられる土壙があり、その埋土の上位には木炭片の他挙大の円礫が2個出土している。床には7個のピットが検出されているが、P. 2とP. 4が主柱穴となるものとみられる。この住居跡からは床面より10~15cmほど

浮いた状態で3本の石包丁が出土している。

4号住居跡（第14図下）

2号住居跡に先行する長辺4.6m、短辺約4.0mの方形の住居跡である。西辺上部は2号住居跡によって壊されているが、壁の残りは良く深さ60~65cmを測る。床における硬化面の発達は弱いが、ほぼ中央に焼土や炭化物の埋積がみられた。床面には11個のビットが検出されているが、P.5とP.9あるいはP.8とP.11が主柱穴になるのではないかとみられる。北西隅からは床より15cm浮いた状態で石包丁が出土している。

5号住居跡（第16図上左）

6・8号住居跡に後出する長辺約3.9m、短辺約3.5mの隅丸方形の住居跡である。床までの深さは東側で43cm、西側で49cmを測り西側に若干傾斜している。床面には焼土や炭化物は検出されていないが、3個のビットがあり、P.1とP.2が主柱穴となるものとみられる。

この住居跡の北側には、床面を切りこんだ斐棺墓（4号斐棺墓）が検出されている。斐棺墓はまず長辺2m、短辺1.5m、深さ32cmの長方形の土壙を掘ったうえで、その北西隅に斐棺を納めるために住居跡の外に向って、奥行70cm深さ30cmの穴を掘っている。斐棺は单棺で、目貼りのため粘土は検出されていない。傾斜角28°、主軸方位S49°Eを測る。

6号住居跡（第16図上右）

2・5号住居跡に先行する長辺約4.4m、短辺約4mと推定される隅丸方形の住居跡である。深さ40cmを測る。床面は平坦で、焼土や炭化物は検出されていない。5個のビットが検出されており、P.2とP.4が主柱穴になるのではないかとみられる。

7号住居跡（第17図上）

8・9号住居跡に後出する長辺4.45m、短辺5.25mの隅丸方形の住居跡である。床面の深さ57cmを測るが、東側は東辺に沿って幅1.2m、深さ10cmほどの凹みがめぐる。床には全体的に硬化面がみられたが、東側の凹みには認められなかった。中央には直径1.5mの炭化物の広がりがある。床には14個のビットと1個の土壙が検出され、P.2とP.8あるいはP.9とP.5が主柱穴となるとみられる。

南側中央で検出された長径1.6m、短径0.9cmの不整梢円形の土壙は、深さ60cmで横断形はU字状を呈する。土壙の埋土上面には硬化面は認められず、また住居跡の床面で検出されている炭化物が連続して広がっていた状態から、住居として機能していた時期に掘りこまれたものと考えられる。この土壙の埋土中からは磨製石剣1点のほか、獸骨（牛または馬の歯か）が出土している。

8号住居跡（第18図）

9号住居跡との先後関係は確認できなかったが、5・7号住居跡に先行する一辺4.5mほどの方形プランの住居跡である。深さは10~15cmぐらいしかなく、中央に東西方向に走る擾乱の溝

があるため遺存状況はよくない。床面の中央より西側の地点に長径50cmの炭化物の広がりがあるほか、7個ほどのピットが検出されている。主柱穴については不明。

9号住居跡（第18図）

8号住居跡との先後関係は確認できなかったが、7号住居跡に先行する長辺3.5m以上、短辺2.8m程度の住居跡と考えられる。遺構確認面よりの床面の深さは20cmを測り、床面に6ないしは8個（2個は8号住居跡のピットの可能性もある）のピットを検出している。主柱穴について不明。焼土炭化物は検出されていない。

10号住居跡（第19図）

11・12・13号住居跡に後出する長辺4.1m、短辺3.9mの方形の住居跡である。床面は平坦で深さ31cmを測る。中央には焼土と炭化物を埋土とした長径62cm、深さ8cmの円形の炉穴P.4があり、その東・西に主柱穴のピットとみられるP.1とP.2がある。

11号住居跡（第19図）

10・12号住居跡に先行する方形プランの住居跡で、一辺が2.4m以上の大きさとみられる。床面の深さは21cmを測り、8個のピットが検出されている。中央に長径82cm、深さ42cmの不整形の大型のピットがある。

12号住居跡（第19図）

10・14号住居跡に先行する長辺4.7m、短辺4.4mの方形プランの住居跡である。床面全体に硬面化面が認められ、壁の残りの良好な部分で深さが20cmを測る。北側中央に長径40cmの焼土の広がりを検出している。10個のピットがあるが、この中のP.5とP.8は大型のピットで深く、P.8からは挙大ほどの円礫が多数出土している。床面の直上から石包丁と磨製石鎌が各1点づつ出土している。

13号住居跡第（20図下）

10号住居跡に先行し、15号住居跡に後出する南辺3.5mの住居跡である。北側3分の1を10号住居跡によって削平されているが方形プランとみられる。床面は平坦で深さ12cmを測る。東側に長径34cmの炭化物の広がりが検出されている。合計8個のピットがみられるがP.3は長径50cmと他のピットよりも大型であり、主柱穴となるのではないかと考えられる。床面より15cm浮いた状態で玉が出土している。

14号住居跡（第20図上）

12号住居跡に後出する長辺4.1m 短辺3.8mの方形プランの住居跡である。床は平坦で深さ13cmを測る。北側の壁下に直径49cmの焼土の広がりがある。合計8個のピットが検出されており、各辺の壁際には深さ23～31cmの小ピットが各々1個づつある。中央のP.1とP.4は各々直径が51cmと52cmあり、深さが65cmと44cmを測る大型のピットで主柱穴となるとみられる。覆土中に人頭大から挙大の円礫が多数混入している。

15号住居跡（第20図下）

南側を搅乱によって削平されているが、13号住居跡に先行する長辺3.6m、短辺3.2mの方形プランの住居跡である。床面は平坦で深さが12cmを測る。焼土や炭化物は検出されず、長径20～33cmのピットを合計7個検出している。柱穴については不明。

16号住居跡（第21図上）

住居跡集中地区のほぼ中央に位置する長辺5.05m、短辺4.9mの方形プランの住居跡で、南辺の西側で1.05mの突出部がある。床面は平坦で、深さは中央で27cmを測る。炭化物を比較的多く含んだ焼土の広がりが広範囲にみられる。ピットが竪穴内に5個、竪穴外に5個検出されているが、主柱穴については不明である。

17号住居跡（第21図下）

18号住居跡に先行する長辺3.9m、短辺3.6mと推定される方形プランの住居跡である。南西隅で高さ約10cmの壁を検出したが、他の部分は硬化面の広がりによって推定した。竪穴内には焼土や炭化物を検出していないが、東壁外15cmに直径65cm、深さ15cmの炉穴とみられるピットがある。これは既に削平されてしまった住居跡に伴う可能性が強い。床面には7個のピットを検出しているが、どれが柱穴であるのかは断定できない。この住居跡からは遺物は出土していないが、埋土は他の弥生住居跡のそれと共通するものであった。

18号住居跡（第22図上）

17号住居跡に後出し、19号住居跡に先行する長辺4.6m、短辺4.25mの方形プランの住居跡である。南北に走る2本の搅乱を除けば、遺存状況は良好で、床面までの深さは22cmを測る。竪穴の覆土上面と東外方には部分的に住居跡の床面とみられる硬化面が残っており、ピット(P.8)も検出しているので、これを19号住居跡とした。

18号住居跡の床面は平坦で、焼土や炭化物は検出されなかった。合計7個のピットを検出しておらず、P.2とP.4が主柱穴とみられる。

20号住居跡（第22図下）

住居跡集中地区の南東で検出された。長辺4.05m、短辺3.8mの隅丸方形の住居跡である。床面は平坦で深さ25cmを測り、北東隅に直径25cmの炭化物の広がりと南側壁際に床より12cm浮いた位置に長径44cmの焼土がある。この住居跡の南西には長径81cm、深さ約20cmの焼土を埋土としたピットがあるが、これは既に削平されてしまった住居跡に伴うものとみられる。合計25個のピットが下央より東側の地点と壁際に集中して検出されているが、主柱穴については不明である。

21号住居跡（第23図上）

20号住居跡の南東6mの地点で検出された住居跡である。床面のみが遺存していたもので、長辺4.6m、短辺4.1mの方形プランと推定される。床面は平坦で焼土や炭化物は検出していない

い。合計9個のピットを検出しているがP. 9は長径1.12cm、深さ46cmを測る大型のピットで貯蔵穴として利用されたのかもしれない。このピットの埋土上位からは直径9cmの木炭片が出土している。

22号住居跡（第23図下）

住居跡集中地区の東端で検出された南北3.63m、東西3.8m前後の方形プランの住居跡である。北辺と西辺で高さ5～7cmの壁を確認できたのみで、他は硬化面の範囲によった。中央に直径53cm、深さ12cmの木炭を混入する炉穴（P. 2）があり、これを中心として炭化物と焼土の広範な広がりが認められた。主柱穴はP. 1とP. 3とみられる。南辺壁際には直径79cm、深さ22cmの大型のピット（P. 4）がある。炉穴の南側の床面上から鉄鎌1本が出土し、これと隣接して粉末状の朱が出土している。この他、長径41cm、短径21cm、厚さ24cmの石製の工作台があり、試掘調査の際に鉄斧が1本出土している。

23号住居跡（第24図）

調査区北部で検出された方形プランとみられる住居跡であるが、北側を搅乱され、西側に歴史時代の住居跡が重複するため、規模は判明できなかった。壁は10cmほどを残しており、床面の南東隅に長径68cmの不整形のピットを検出しただけであった。

24号住居跡（第24図）

調査終了後の圃場整備工事中に気付いた住居跡であるため遺物をとりあげただけであるが、東西辺約3.25mを測る方形プランの住居跡とみられる。壁の高さは約35cmを残す。覆土下位には多量の木炭が出土しており、完形に近い土器が多いため、焼失した住居跡の可能性が強い。

25号住居跡（第25図上）

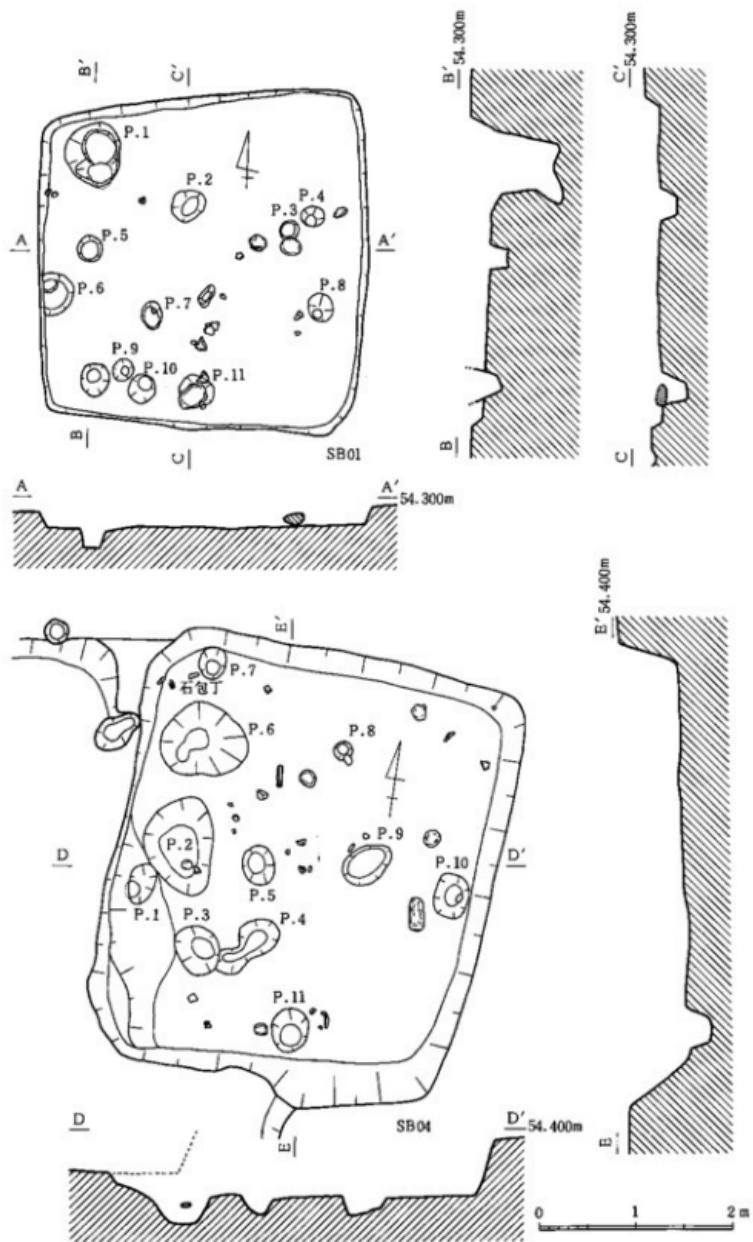
22号住居跡の南東11mで検出された住居跡である。南西側をわずかに残して削平されているため、プランと規模は確定できない。壁の高さは遺存良好な部分で約5cmを計る。焼土・炭化物・ピット等は検出できなかったが、南西壁際で壊の破片が出土している。

26号住居跡（第25図下）

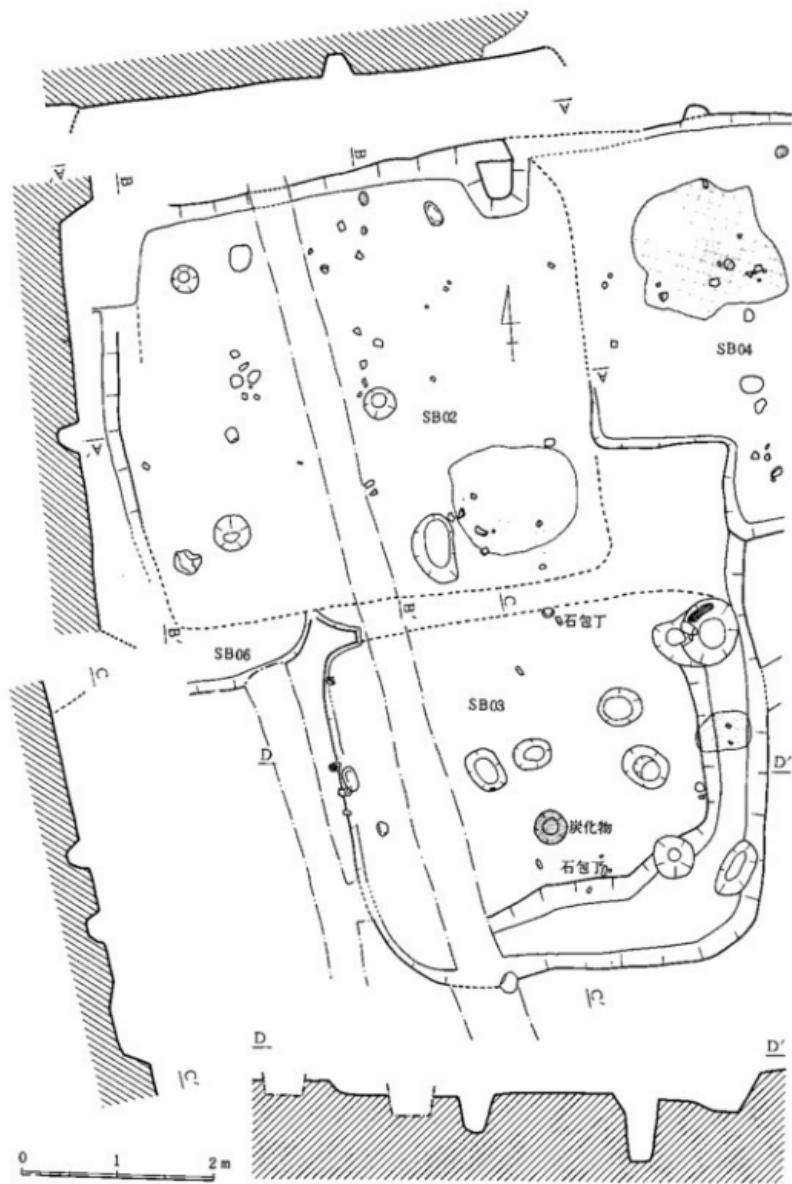
S B25の南東15mで検出されたS B27に後出する長辺4.2m、短辺4.1mの方形プランの住居跡である。床面は平坦で深さ13cmを測る。焼土や炭化物は検出されていない。合計7個のピットを検出しているが、南辺と西辺の壁際のP. 2・P. 3・P. 7は長径が104cm・78cm・107cm、深さが35cm・23cm・27cmを測る大型のピットである。

27号住居跡（第25図下）

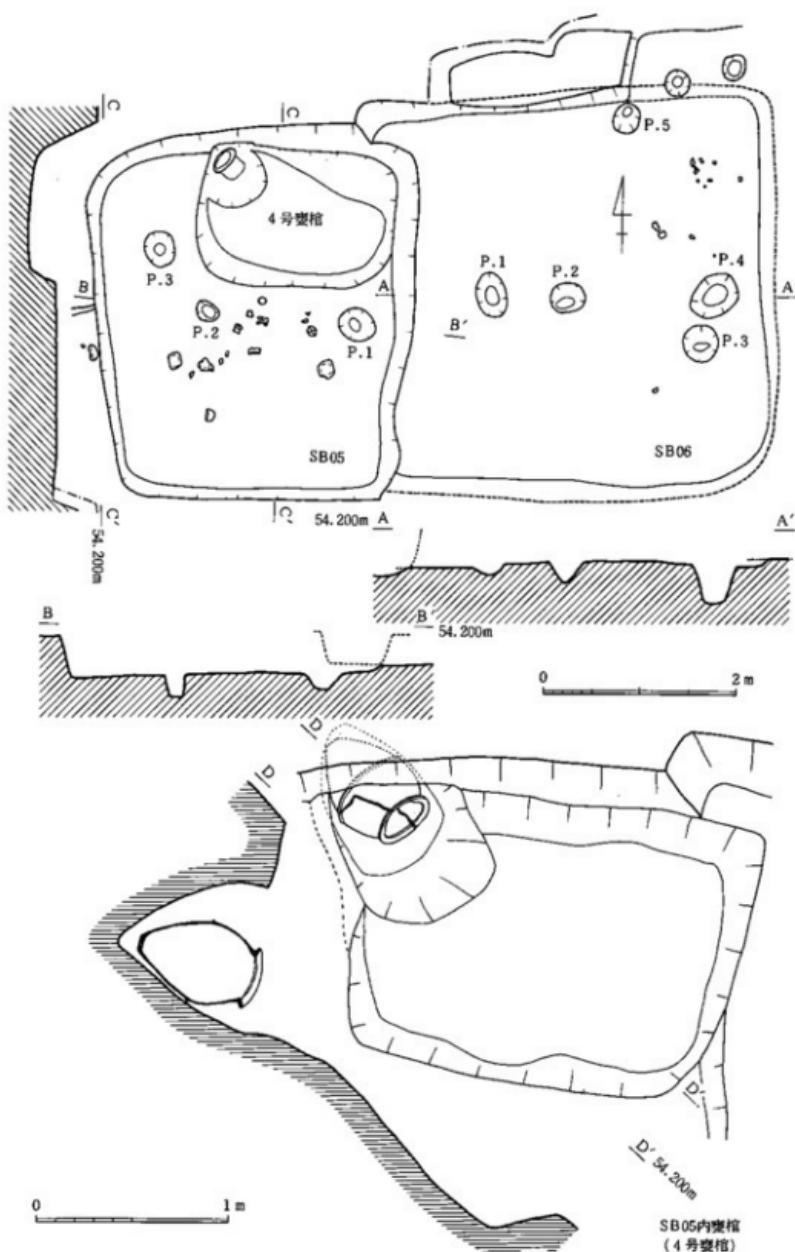
26号住居跡に先行する住居跡であるが、大部分を削平されているため長辺2.2m、短辺1.5mの床面とみられる硬化面を検出したのみで、プランや規模は判明できなかった。2個のピットが検出されており、P. 2に隣接して長径44cmの焼土の広がりがみられた。



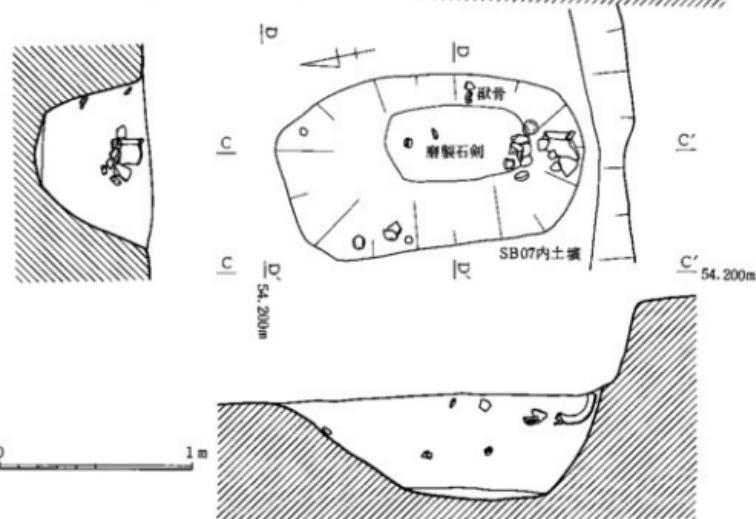
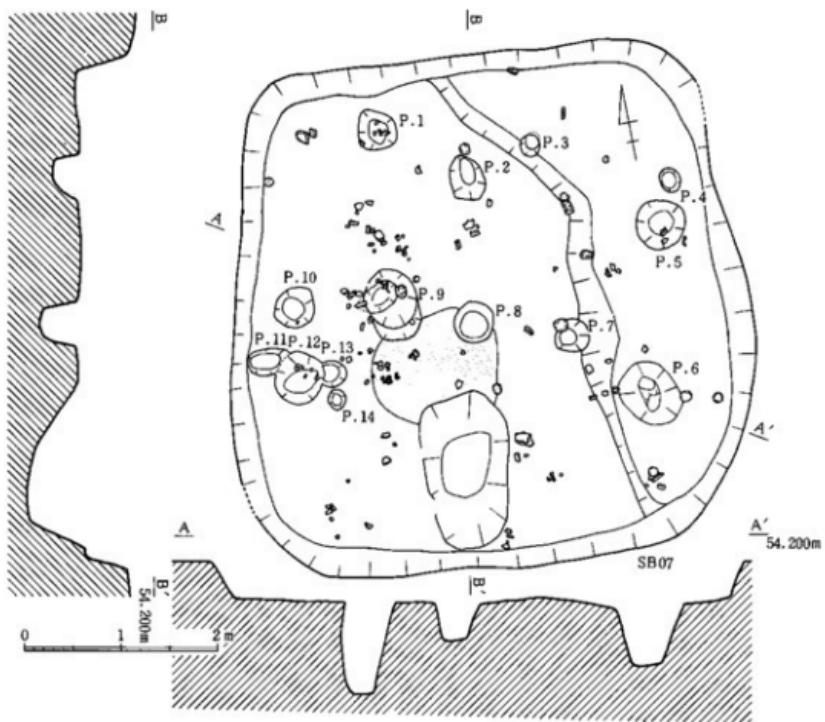
第14図 1・4号住居跡実測図 S=1/50



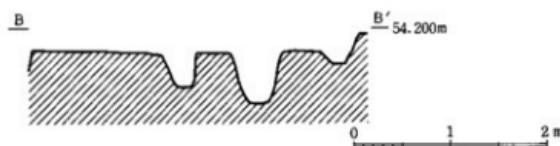
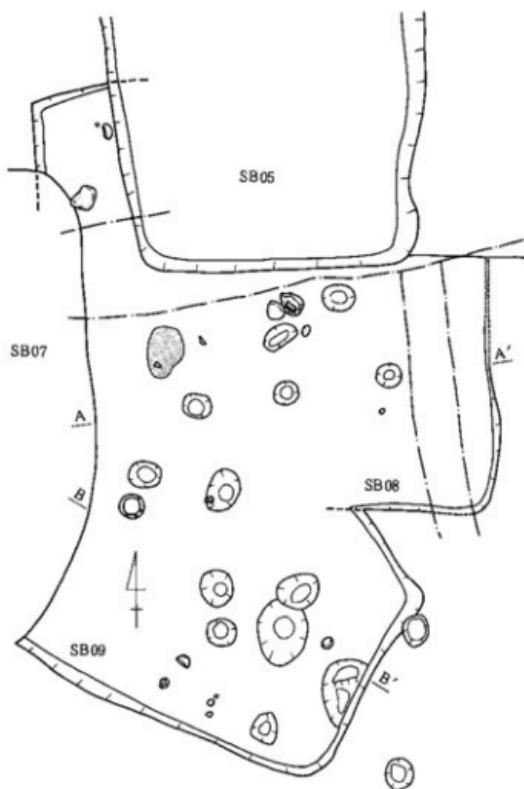
第15図 2・3号住居跡実測図 S=1‰



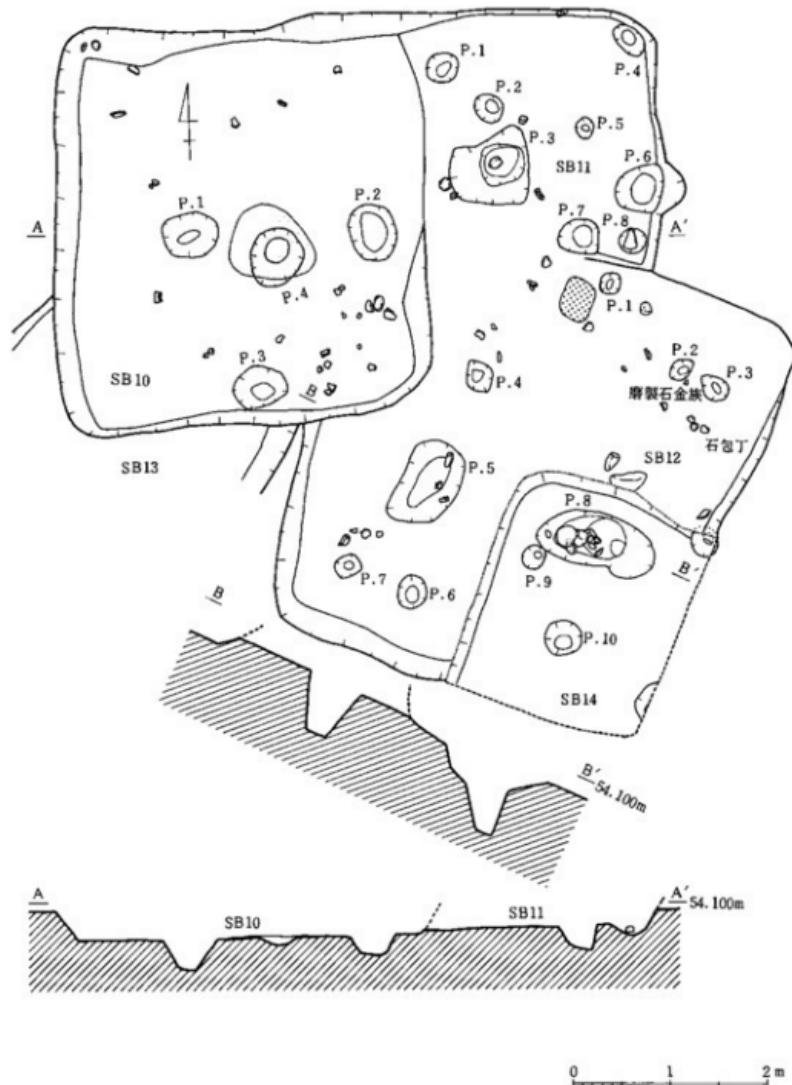
第16図 5・6号住居跡実測図、4号墓室実測図



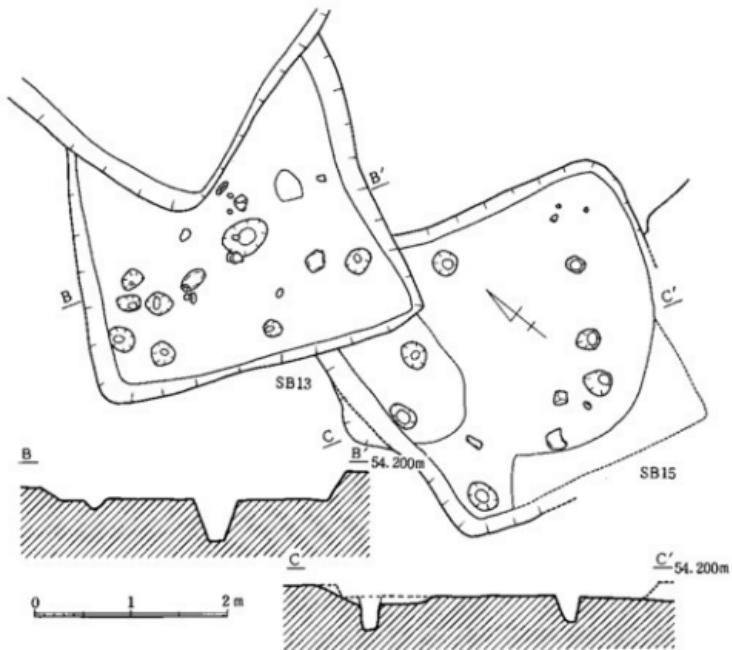
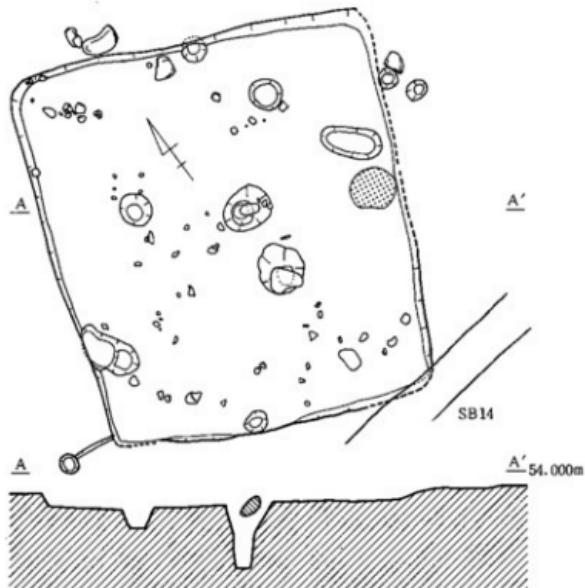
第17図 7号住居跡実測図



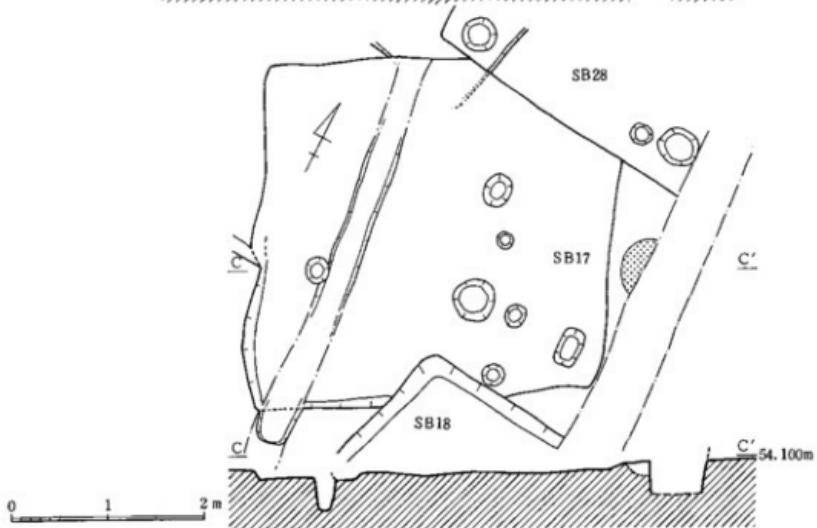
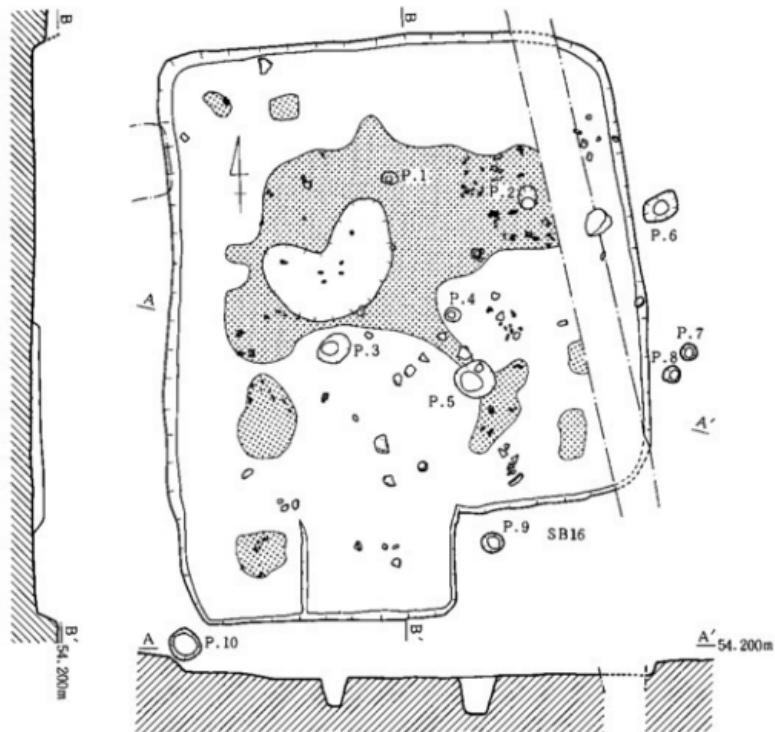
第16図 8・9号住居跡実測図 $S=1\%$



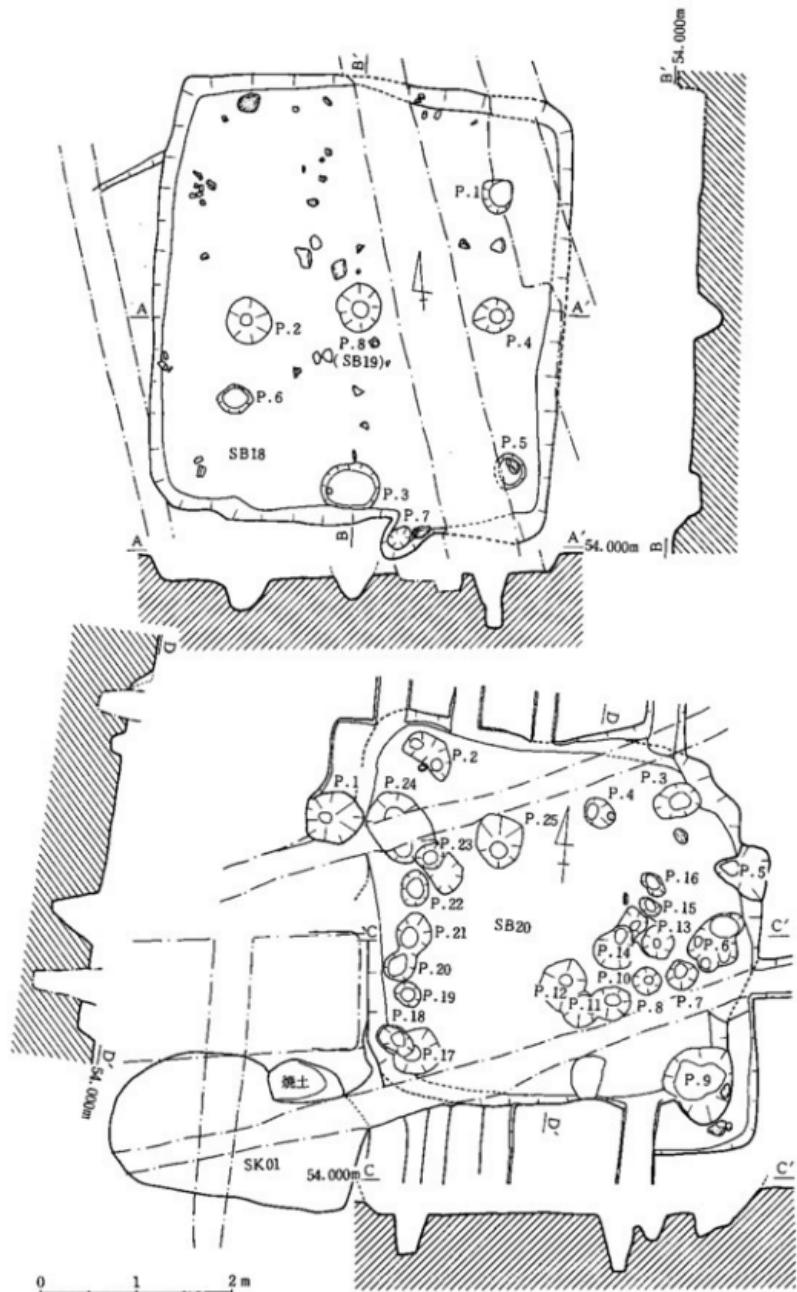
第19図 10~12号住居跡実測図 S = 1‰



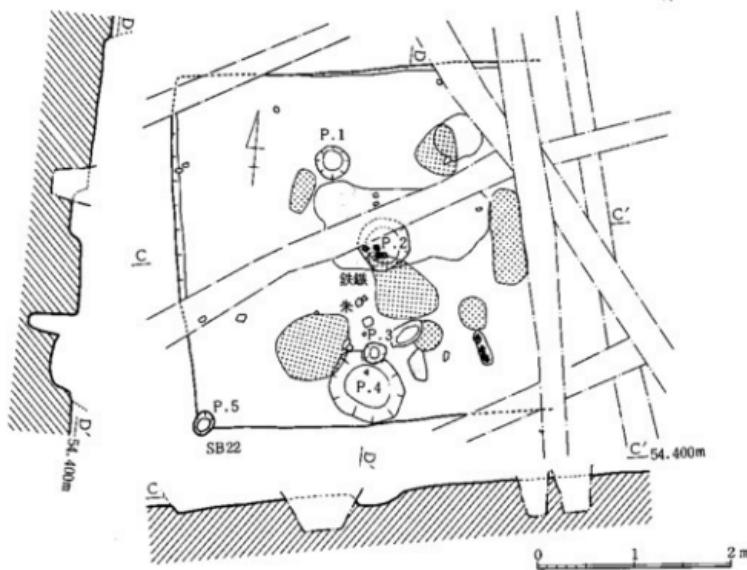
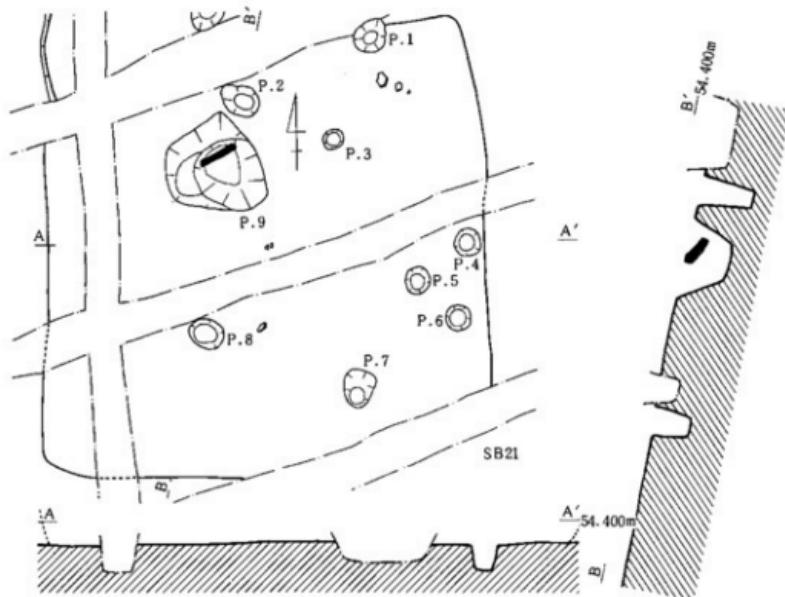
第20図 14号住居跡実測図、13・15号住居跡実測図 S = 1‰



第21図 16・17号住居跡実測図 S=1/40



第22図 18・20号住居跡実測図 S=1‰



第23図 21・22号住居跡実測図 S=1‰

2. 歴史時代の竪穴住居跡

歴史時代の竪穴住居跡は、弥生時代の住居跡に重複する形で、2カ所に合計5軒が検出されている。いずれの住居跡も竪穴の北辺または西辺にカマドを有しており、どちらの地点も2~3軒の重複関係にある。遺存状況は良好でないが、住居跡の埋土は共通した黒褐色土であった。

28・29号住居跡（第26図）

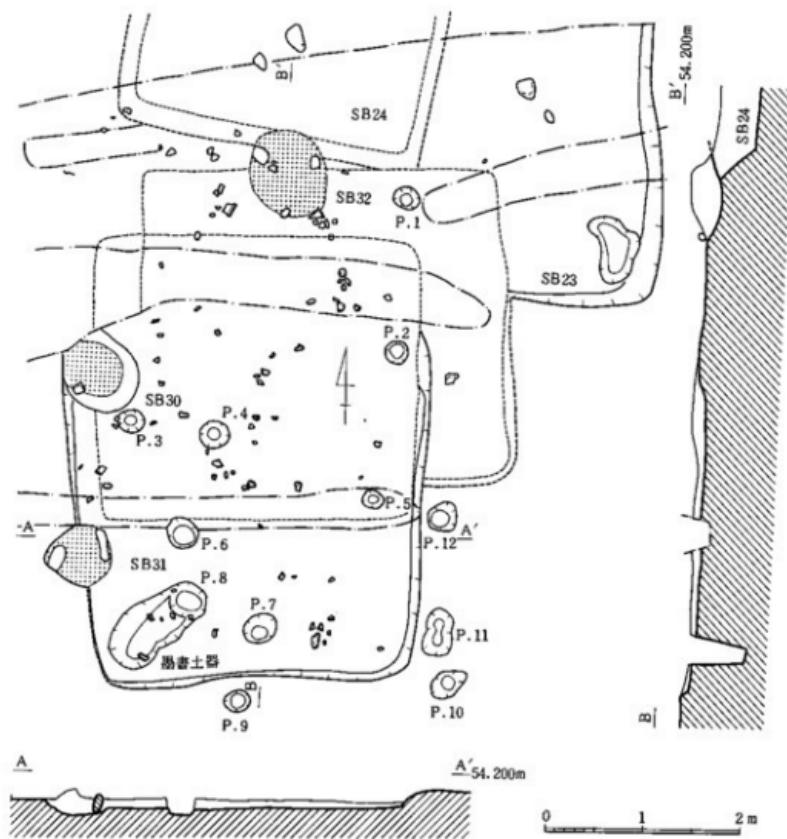
28号住居跡は29号住居跡に後出する南北3.55m、東西3.9mの方形プランの住居跡である。北辺のやや西よりのところにカマドを有しているが、その大半は削平によって失なわれている。カマドと連続した長径196cm、短径63cm、深さ9cmの不整形の土壙には焼土塊が多数混入している。床面の四隅には直径26cmから42cm、深さ13~30cmの柱穴とみられるピットが検出されている。覆土中から刀子が1本出土している。

29号住居跡は、南北3.25m、東西4mの方形プランの住居跡である。削平が著しいが、北辺中央にカマドを有している。床面からは合計4個のピットを検出しているが主柱穴については判定できない。

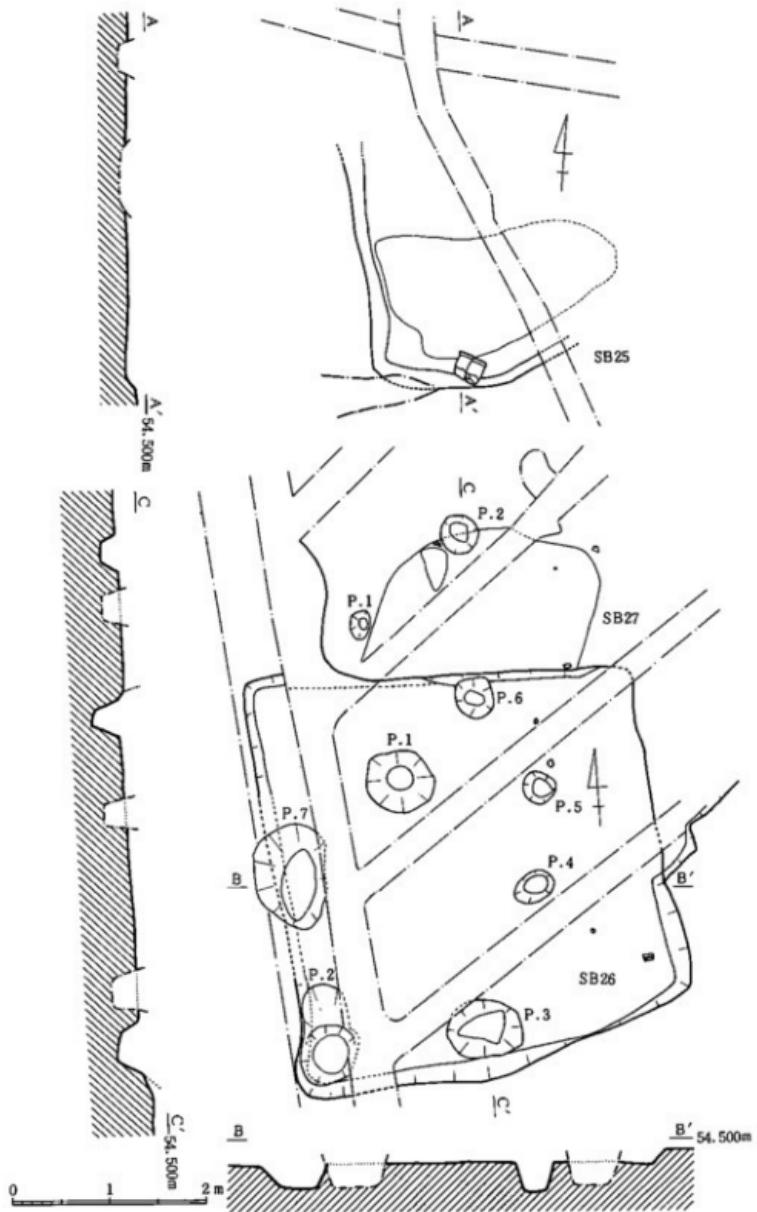
30~32号住居跡（第24図）

調査区北部で検出された相互に重複する住居跡群であるが、削平が著しいうえに搅乱の溝が多数走っているため、遺存状況はよくない。重複関係は32→31→30の順である。

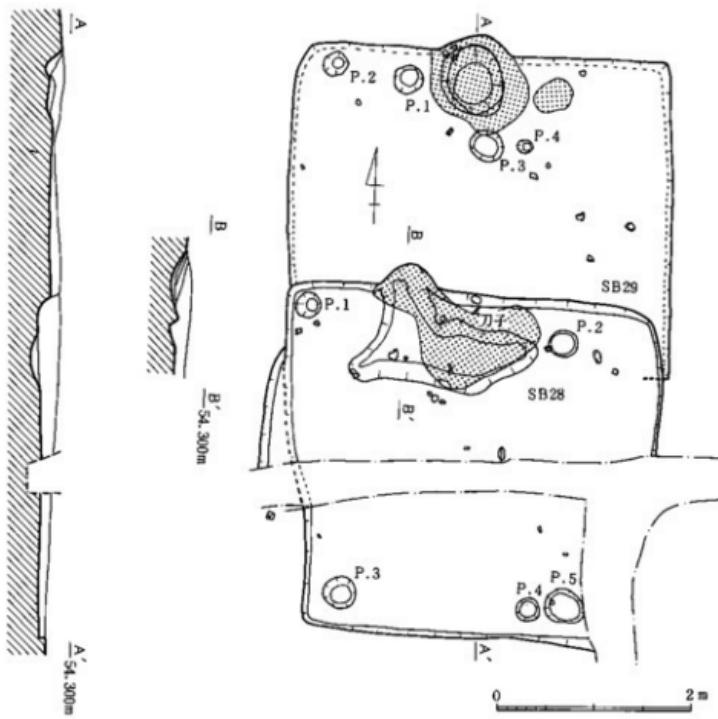
32号住居跡は北辺中央にカマドを有する南北3.3m、東西3.8mの方形プランの住居跡と推定される。カマドは両袖に円礫を立てて粘土で固定している。31号住居跡は西辺の中央にカマドを有する東西3.6m南北3.3m前後の方形プランの住居跡と考えられる。カマドの両袖に据えられていた円礫は動かされていた。P.8からは「□人」と書いた墨書き器が出土している。30号住居跡も西辺中央にカマドを有する住居跡で、東西3.4m南北2.9m程度の方形プランの住居跡とみられる。カマドの袖には円礫を据えている。これらの住居跡の主穴については明確にしえなかつた。



第24図 23・24・30~32号住居跡実測図 S=1%



第25図 25号住居跡実測図、26・27号住居跡実測図 S=1/40



第26図 28・29号住居跡実測図 S=1/40

3 . 支石墓（第27図）

調査区南端の地形変換線（微高地の南端）の近くで、南北に並んで2基の支石墓が検出されている。ここでは南側の支石墓を1号支石墓、北側の支石墓を2号支石墓と呼称する。両支石墓の周囲は水田耕作によって大きく削平されており、支石墓自体もその影響を受けて旧状は留めていない。

1号支石墓は南北径1.65m、東西径1.27m、最大厚さ0.5mを測る上・下面が比較的扁平な安山岩を擣石としている。擣石下には砂層や水田耕作土が流入しており、また拳大の円礫が投げこまれていた。擣石は北側に少し傾いているものの、支石とみられる人頭大より一回り大きな円礫が4個存在することから、大きくは動いていないと考えられる。当初の支石としては、もう2個ほどはあったと推定される。内部主体は長径1.55m、短径1.37m、深さが推定で0.5mの隅丸方形の土壙である。擣石に比較して土壙が大きいことから、土壙を埋積した後に、その上部に支石と擣石を置いたと考えられる。土壙の埋土中からは弥生土器の小破片が数点出土しただけで、副葬品はなかった。

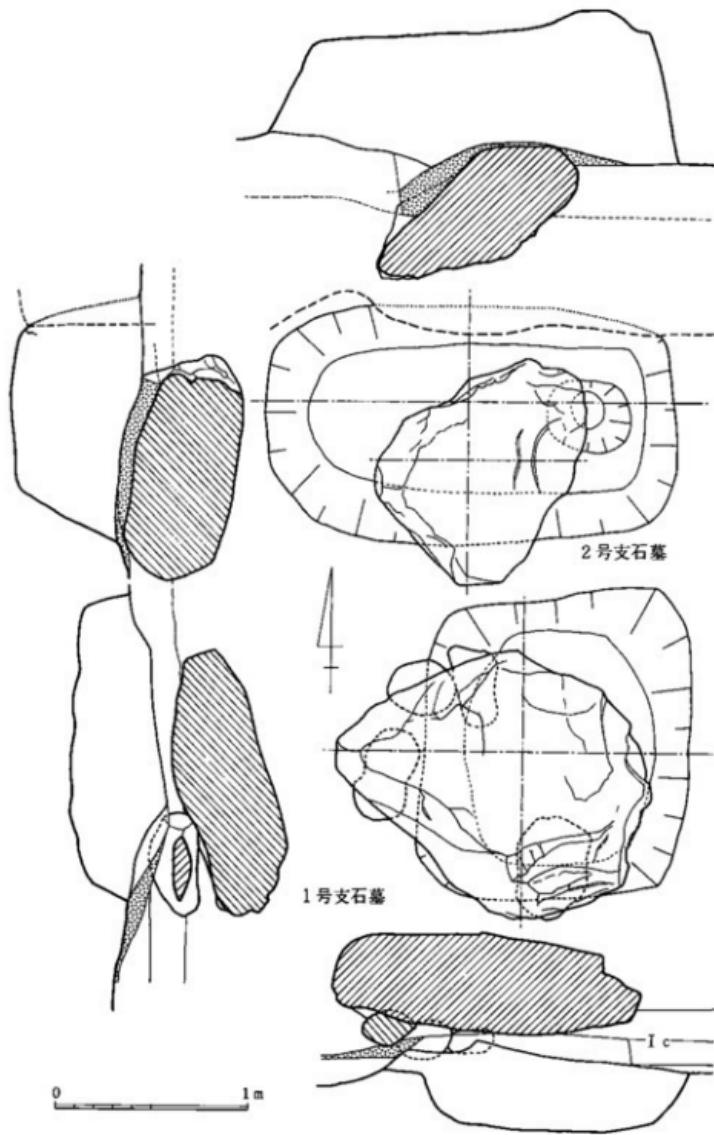
2号支石墓は、1号支石墓の北側30cmに築かれている。擣石は長径1.18m、短径0.93m、最大厚さ49cmの安山岩である。擣石下には先の大洪水時の砂層があり、支石も失なわれて大きく傾いている。内部主体は、東西径2.12m、南北径1.21m、深さが推定で0.81mの隅丸長方形の土壙である。底部東側には長径43cm、深さ10cmの凹みがある。埋土中からは弥生土器とみられる小破片が出土しただけで副葬品はなかったが、底部の東側の底面近くでは直径55cmの範囲からヒトの歯が8本出土している。歯の遺存状態は不良だが、北条暉幸氏に現在鑑定を依頼している。

4. 瓦棺墓

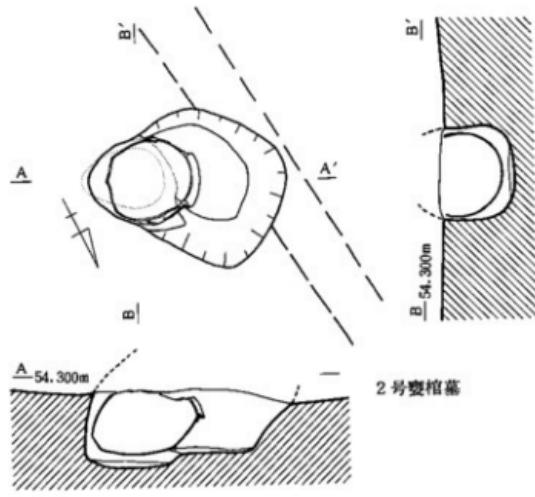
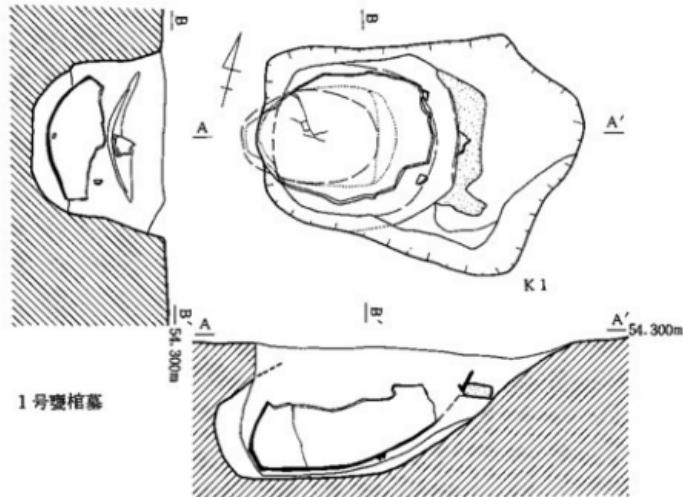
調査地区の東端に位置する「塚坊主」(SX 01)と呼ばれる塚を発掘したところ、内部の3つの土壙(SX 01-1・2・3)より多数の瓦棺片を含む土器群が出土した。これらは、明治以降の開田に伴う地下げによって出土した遺物を再び埋設したものであったが、このことによって周辺に瓦棺墓が存在していたことが推察された。そこで「塚坊主」の北側一帯の耕作土を除去したところ、3基の瓦棺墓と1基の土壙を検出した。

遺構が検出されたのは水田耕作土の直下にあったⅢ層中であり、本来の瓦棺墓を掘り込んだ土層は削平によって失なわれていた。

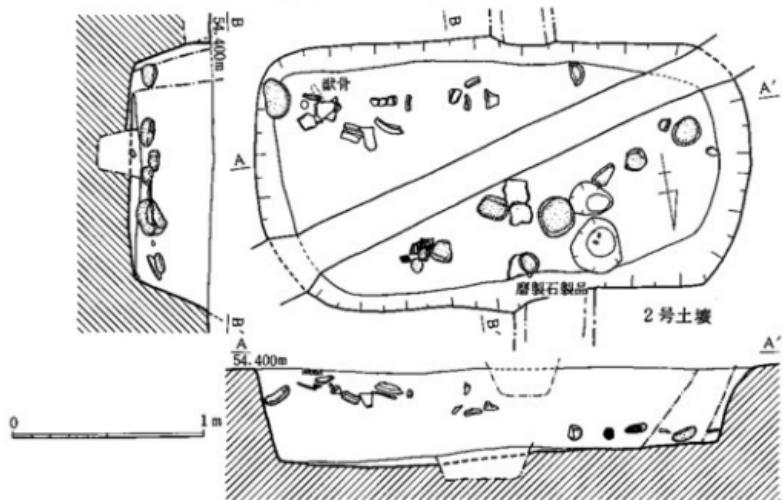
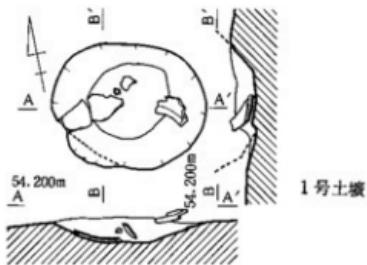
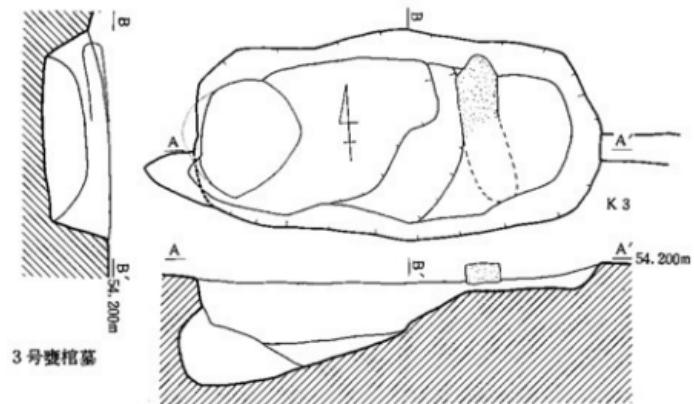
なお、調査予定地外であったが、調査区北方の水田から、調査終了後の圃場整備工事に際して、多数の瓦棺片が採集されている。恐らくこの地域も瓦棺墓群を形成していたものであろう。



第27図 1・2号支石墓実測図 S=1%



第28圖 1・2号墓棺基実測図 S = 1‰



第29圖 3号墓棺室、1・2号土壤実測図 S=1/50

1号斐棺墓（第28図上）

「塚坊主」より北西11mの地点で検出された斐棺墓である。墓壙の上部は失なわれているが、斜め下に幅93cm・高さ68cmの横穴を掘り込んでいる。斐棺は鉢形の蓋と組み合う大型の斐棺でその大半は開田時に取り上げられている。接合部には目貼りのための粘土が残る。傾斜角は推定で30°前後、主軸方位はN-71°-Eである。

2号斐棺墓（第28図下）

1号斐棺墓より北東へ12mの地点で検出された単棺の斐棺墓である。墓壙上部は失なわれているが、遺存している墓壙の平面形は直径71cmのほぼ円形を呈し、現存する深さは32cmを測る。この墓壙の東壁を奥行20cm・幅48cm・深さ7cmの掘り込みを行ない斐棺を設置している。目貼りのため粘土は検出されていない。傾斜角は32°、主軸方位はN-65°-Wを測る。

3号斐棺墓（第29図上）

1号斐棺墓の北西15mで検出された斐棺であるが、斐棺自体は開田時にきれいに取上げられている。墓壙は長径100cm以上・短径107cmの楕円形と推定され、深さは13cmのみを残す。この墓壙の西壁を幅63cm・深さ47cmで掘り込み、斐棺を設置している。接合部の目貼りの粘土が遺存しており、墓壙の大きさを考慮すると鉢形の蓋と組み合う大型の斐棺と推察される。

5. 土壙

1号土壙（第29図中）

1号斐棺の北西5mで検出した大型斐棺片を出土した土壙である。長径81cm・短径64cmの楕円形を呈する。深さ12cmを残すのみであり、他の斐棺墓に比較して大幅に浅いため、斐棺墓とは考えられない。

2号土壙（第29図下）

20号住居跡の南西0.4mで検出された東西径2.57m・南北径1.38m・深さ0.43mの隅丸長方形プランの土壙である。埋土は炭化物やⅢ層の砂粒を含む暗褐色土で、弥生時代の住居跡群の覆土と共に通している。底面は平坦で、長径29cm・深さ19cmのピットと長径23cm・深さ18cmのピットが2個検出されている。埋土中の底面近くに木炭塊や拳大の円礫群が出土し、底面上から磨製石製品の破片が1点出土している。埋土中から出土する土器は大型斐棺の口縁部破片を含む弥生土器で、牛あるいは馬とみられる歯が埋土上位から出土している。

第4表 穫穴住居跡出土土器観察表

(単位cm)

番号	出土遺構	器種	法量	特徴	胎度	焼成	色調
1	1号住居跡	壺	口径 21.2 高さ 底径	頸部の外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の蒐磨きをする。外面には縦方向の幅2~3mmの暗文を施す。	砂粒をほとんど含まない	良好	淡赤褐色
2	1号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁から頸部にかけての破片で、口縁上面が丸みをもち、内側へ張り出す。 口縁部内外面と頸部外面は横撫で、頸部内面と口縁部の内側への張り出しの先端を横方向に蒐磨きする。 口縁上面の中程から頸部内面は丹塗り。	砂粒をほとんど含まない	良好	黄褐色
3	1号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面は丸みをもち、厚く短かく、内側へ若干張り出す。内外面とも横撫です。	砂粒を多く含む	良好	黄褐色
4	1号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面は水平で、厚く短かく、断面三角形を呈する。 内外面とも横撫でし、外面には煤が付着している。	白色の砂粒を多く含む	やや不良	黄褐色
5	2号住居跡	壺	口径 27.9 高さ 底径	口縁部はやや内傾し、上面が若干くぼみ、内側へ張り出す。内外ともに横撫です。	砂粒を含む	やや不良	にぶい黄褐色
6	2号住居跡	壺	口径 30.7 高さ 底径	口縁上面が少しづくぼみ、内傾し、内側への張り出しが強い。口縁下に一条の断面三角形の凸帯を有する。内外とともに横撫である。口縁と頸部の外面に煤が付着する。	砂粒を含む	良好	明黄褐色
7	2号住居跡	壺	口径 高さ 底径 7.6	壺の脚台片で、外形は曲線的で大きく開く。内部は高さ2.4cmの上げ底で丸みをもつ。底部の厚さは0.8cmで、胴部の器壁と変わらない。 外面は細かな縦方向の刷毛目、底縁部と内面は横撫である。	石英粒を多く含む	良好	暗褐色

8	2号住居跡	壺	口径 高さ 底径	7.8	壺の脚台片、外形は曲線的で大きく開く。内部は高さ1.7cmの上げ底で丸みをもつ。底部の厚さは2.2cmと厚い。外面は細かな刷毛目、底縁部と内面は横拂です。	石英粒を 多く含む	良 好	黄褐色
9	2号住居跡	壺	口径 高さ 底径	19.5	口頭部が直線的に外反し、口縁先端は明瞭な面を有する。外面を横拂でし、内面は蒐磨きを施す。	砂粒を含 まない	良 好	赤褐色
10	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径	30.3	丸みをもった「く」字形口縁で、口唇部は丸い。外面と内面上位を横拂でし、内面下位に横方向の刷毛目を施す。外面に煤が付着する。	砂粒を少 し含む	良 好	暗灰褐色 ～黒褐色
11	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径	28.3	直線的な「く」字形口縁で、口唇部は丸い。 内外面ともに横拂です。 2次的な火によって桃色に焼けている。	石英粒を 含む	良 好	黄褐色
12	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径		直線的な「く」字形口縁で、脣部の張り出しが弱い。口縁下に1条の沈線をもつ。脣部の外面にタテ方向の刷毛目、内面をタテ方向に拂でて、口縁部内外面を横拂です。	細かい白 色砂粒を 含む	良 好	暗褐色
13	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径	15.9	丸みをもつ「く」字形口縁で、口唇部は丸い。	砂粒を少 し含む	良 好	黄褐色
14	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径		やや直線的な「く」字形口縁で口唇部は丸い。	砂粒を少 し含む	やや不良	黒褐色
15	3号住居跡	小型壺	口径 高さ 底径	8.4	短かい丸みをもった「く」字形口縁で、口唇部は丸い。 口頭部の外面を横拂するが、その他の調整は不明。	砂粒を含 む	良 好	外 面 黄褐色 内 面 黑色 は 色 は 色

16	4号住居跡	甕	口径 高さ 底径	26.8	口縁部は厚く、短かく、断面は三角形に近い。口縁上面がややくぼみ気味で内傾する。 口縁部の内外面と胴部最上位は横撫でし、胴部内面の口縁部近くはヨコ方向の刷毛目のあとにナデを施す。	砂粒を含む	良好	灰白褐色
17	4号住居跡	甕	口径 高さ 底径	25.4	口縁部は厚く、短い。口縁上面が丸みをもち、若干内傾する。 口縁部から胴部にかけて内外面とも横ナデする。	砂粒を含む	良好	灰褐色
18	4号住居跡	甕	口径 高さ 底径	24.2	口縁部は厚く、短く、断面が三角形に近い。口縁上面が少しくぼみ、若干内傾し、内側へ少し張り出る。 口縁部から胴部にかけては内外面とも横撫です。	砂粒を含む	良好	黄褐色
19	4号住居跡	甕	口径 高さ 底径	6.2	甕の脚台片で、外形はやや直線的に開く。内部の高さは1.4cmの上げ底で、丸みをもつ。外は荒れており調整法をよく観察できない。 内面は撫でられている。	石英粒を多く含む	良好	黄褐色
20	4号住居跡	甕	口径 高さ 底径	6.8	甕の脚台片で、外形は直線的に大きく開く。内部は高さ1.85cmの上げ底で丸みをもつ。底部の厚さが1.8cmと厚い。 外は粗いタテ方向の刷毛目を施し、内面を撫である。 底部内面には炭化物が付着している。	石英粒を多く含む	良好	黄褐色～赤褐色
21	5号住居跡	甕	口径 高さ 底径	25.9	口縁部は厚く短く、断面が三角形に近い。口縁上面はくぼみ気味で、内傾する。 口縁から3.3cm下に1条の鹿による沈線を施す。 内外面とも横撫でしている。	細かい砂粒を含む	良好	暗黄褐色
22	5号住居跡	甕	口径 高さ 底径	26.6	口縁部は厚く短く、断面が三角形に近い。口縁上面はくぼみ気味で、内傾し、内側へ張り出し気味である。 口縁部外面と胴部上位は横撫でし、胴部内面は斜方向の刷毛目を施す。	石英粒を少し含む	良好	黄褐色
23	5号住居跡	甕	口径 高さ 底径	6.6	甕の脚台片で、外形は直線的で大きく開く。内部は高さ1.7cmの上げ底で丸みをもつ。底部の厚さが2.3cmと厚い。 外は縦方向の細かい刷毛目を施し、内面は撫でている。底部内面に炭化物が付着する。	白色砂粒を含む	良好	黄褐色

24	6号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は厚く短く、断面が三角形に近い。口縁上面はややくぼみ気味で内傾し、内側に弱く張り出す。 内外面ともに横撫です。外面に煤が付着している。	石英粒を多く含む	良好	灰褐色
25	6号住居跡	壺	口径 高さ 底径 6.2	壺の脚台片で、外形はやや曲線的に開く。内部は高さ0.9cmの小さな上げ底で、底縁部は広い面をなす。 底部の厚さが2.3cm以上で厚い。 外面に縱方向の粗い刷毛目を施す。	石英粒を多く含む	良好	赤褐色
26	7号住居跡	壺	口径 28.5 高さ 底径	口縁部は丸みをもった「く」字形口縁で、口唇部は丸みをもつ。 外面に煤が付着する。 内外面ともに横撫です。	砂粒を含む	良好	黄褐色
27	7号住居跡	壺	口径 27.1 高さ 底径	口縁部は直線的で、「く」字形口縁に近いが、口唇部近くで厚味を増し、内側へ若干張り出す。 内外面ともに横撫です。	砂粒を含む	良好	黄褐色
28	7号住居跡	壺	口径 27.2 高さ 底径	口縁部は丸みをもった「く」字形で頭部下に断面三角形の凸唇を張りつける。 口縁部内外面は横撫でし、頭部内面を横方向に荒磨きする。	砂粒を含む	良好	にぶい暗褐色
29	7号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は丸みをもつ「く」字形口縁で、口唇部は丸みをもつ。 内外面ともに横撫です。	砂粒を含む	良好	灰褐色
30	7号住居跡	壺	口径 高さ 底径 8.1	壺の脚台片で、外形は曲線的に開き先端は丸い。内部は高さ3.3cmの上げ底で、丸みをもつ。底部の厚さは1.0cmと薄い。 外面は細かな刷毛目を施し、内面を横撫です。	砂粒を含む	良好	黄褐色
31	7号住居跡	壺	口径 高さ 底径 7.2	壺の脚台片で、外形は直線的大きく開く。内部は高さ1.8cmの上げ底で平坦面をもつ。脚台先端は面を有する。 底部内面に炭化物が付着する。 外面に縱目の粗い刷毛目を施し、内面を横撫です。	砂粒を含む	良好	にぶい黄褐色

32	7号住居跡	壺	口径 高さ 底径	8.6	壺の脚台片で、外形は曲線的に大きく開く。内部は高さ2.9cmの上げ底で、平坦面をもつ。底は厚さ0.4cmと薄い。 外面に縦方向の粗い刷毛目を施し、内面を横撫です。	砂粒を含む	良好	黄褐色
33	7号住居跡	壺	口径 高さ 底径		口頭部下に1条の刻目凸帯を有する。刻目は粗である。 内面は縦方向の刷毛目のあと横撫し、外側の凸帯下に縦方向の暗文を粗に施す。	砂粒を含む	良好	黄褐色
34	7号住居跡	壺	口径 高さ 底径		胴部上位の破片で1条の刻目凸帯を旋す。 刻目は比較的密に施す。 外側の凸帯より上は刷毛目のち横撫でし、凸帯より下は横方向に箒磨きする。 内面は磨耗して調整不明。	砂粒を含まない	良好	淡赤褐色
35	7号住居跡	壺	口径 高さ 底径	16.9	口縁上面はくぼみ気味で強く、内傾し、内面へ若干張り出す。 焼成前に口縁部の内側から外側に向って直徑3mmの孔を穿孔する。破片のため孔の数は不明。内外とともに横撫を施すが、外側に粗い刷毛目が残る。	砂粒を少し含む	良好	にぶい黄褐色
36	7号住居跡 土 壤	壺	口径 高さ 底径	19.8	口頭部は直線的で、「く」字形を呈し、口唇部は面をもつ。胴部の張りは弱く、最大直徑は胴部上半にある。 口頭部外側は縦方向の刷毛目を施し、内面は箒磨きを施す。胴部内外面は縦方向の刷毛目を施す。口頭と胴部の外側には縦方向の暗文を施す。	砂粒を少し含む	やや不良	にぶい暗褐色
37	7号住居跡 土 壤	壺	口径 高さ 底径	8.3	壺の脚台片で、外形は曲線的に大きく開き、先端は丸い。内部は高さ3.2cmの上げ底で、平坦面をもつ。 外面は縦方向の撫でを施し、内面は横撫です。	砂粒を含む	良好	黄褐色
38	7号住居跡 土 壤	壺	口径 高さ 底径	7.5	壺の脚台片で外形は曲線的に大きく開き、先端は丸い。内部は高さ2.2cmの上げ底で丸みをもつ。 外面は縦方向の刷毛目、内面は縦方向に撫でる。	砂粒を含む	良好	黄褐色
39	8号住居跡	壺	口径 高さ 底径	25.6	口縁部は厚く短く、断面は三角形に近い。 口縁上面は丸みをもち、水平である。 口縁下に断面三角形の凸帯を張りつける。 内外面ともに横撫です。	砂粒を含む	良好	にぶい橙色

40	8号住居跡	壺	口径 高さ 底径	25.7 口縁部は厚く、上面がくぼみ、内側へ張り出す。口縁下に断面三角形の凸帯を張りつける。内外面ともに横撫です。	砂粒を含む	良好	にぶい色 に橙
41	8号住居跡	壺	口径 高さ 底径	25.7 口縁部は厚くて、短く、上面が丸みをもち内傾する。内側へ張り出しがみである。内外面ともに横撫です。	砂粒を含む	良好	外にぶい色 内に橙 内に橙
42	8号住居跡	壺	口径 高さ 底径	25.7 口縁上面が少しくぼみ、強く内傾する。口唇部に面をもち、内側に小さく張り出す。 外面は横撫で、内面を横方向に撫でる。	砂粒を含む	良好	外にぶい色 内に橙 内に橙
43	8号住居跡	壺	口径 高さ 底径	25.7 口縁上面がくぼみ、強く内傾する。口唇部は丸く、内側に強く張り出す。内外面ともに横撫でを施す。	砂粒を少し含む	良好	褐灰色
44	9号住居跡	壺	口径 高さ 底径	27.1 口縁上面がくぼみ、内傾する。口唇部は丸く、内側に強く張り出す。 房部内外面に刷毛目を施したのち、全体を横撫です。	砂粒・小石を含む	良好	浅黄色 に橙
45	9号住居跡	壺	口径 高さ 底径	7.2 壺の脚台片で、曲線的に小さく開き、先端は広い面をもつ。内部は高さ0.7cmの上げ底で丸みをもつ。 外面に縱方向の細かな刷毛目を施す。	石英粒を含む	良好	橙色
46	10号住居跡	壺	口径 高さ 底径	25.6 口縁部は直線的で「く」字形口縁をなす。口唇部はやや丸みをもった面をもつ。胴部外面と頭部内面に刷毛目を施し、全体を横撫です。	砂粒を少し含む	良好	橙色
47	10号住居跡	壺	口径 高さ 底径	19.7 口頭部は曲線的で、「く」字形を呈し、口唇部に面をもつ。口頭部下に丸みをもった断面三角形の凸帯を張りつける。 内外面ともに横撫でを施す。	砂粒・小石を含む	良好	にぶい色 に橙

48	10号住居跡	壺	口径 高さ 底径	16.5 口頭部は曲線的で外反する。口唇部に1条の幅広い凹線を薦す。 外面に縱方向、内面に横方向の粗い刷毛目を施し、横撫でを施す。	細かい砂粒を含む	良好	にぶい 橙色
49	10号住居跡	壺	口径 高さ 底径	強く外反する口縁部先端の破片で、口唇部は丸く尖り、口縁部下端は強く張り出して頭部にいたる。 内外面ともに刷毛目を施したあと横撫でを施す。	砂粒をほとんど含まない	良好	外面は 橙色 内面は にぶい 橙色
50	11号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面がくぼんで内傾し、内側へ強く張り出す。口唇部は丸い。 内外面ともに横撫でを施す。	細かい砂粒を含む	良好	灰黄褐色
51	11号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面が少しくぼんで強く内傾し、内側へ張り出す。口唇部は丸い。 内外面ともに横撫でを施す。	砂粒を含む	良好	砂粒を含む
52	11号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面が大きくくぼみ強く内傾して、内側へ強く張り出す。口唇部は丸みをもつてふくらむ。 内外面ともに横撫でを施す。	細かい砂粒を含む	良好	灰褐色
53	11号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面がくぼみ内傾して、内側に強く張り出す。 内外面ともに横撫でを施す。	石英粒を含む	良好	赤褐色
54	11号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面は平坦で内傾し、内側に弱く張り出す。口唇部は丸みをもち、口唇下に荒による調整を施す。 内外面ともに横撫でを施す。	細かい砂粒と大粒の石英砂を含む	良好	灰黄褐色
55	11号住居跡	壺	口径 高さ 底径	7.1 壺の脚台片で、外形は曲線的に開き、先端は丸い。内部は2.2cm以上の上げ底である。 外面に縱方向の粗い刷毛目を施し、内面を横撫でする。	細かい砂粒を含む	良好	黄褐色

56	11号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面は水平で少し丸をもち、内側へ少し張り出す。口唇部は丸い。 頸部は弱く外反する。 内外面ともに横撫でを施す。	石英粒などの砂粒を多く含む	良 好	外面が灰褐色 内面が黄色
57	11号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部の断面は楕円形に近く、口縁上面は水平で丸みをもち内外に張り出す。頸部は強く外反している。 内外面ともに横撫でを施す。	砂粒（雲母）を多く含む	良 好	赤褐色
58	12号住居跡	壺	口径 27.6 高さ 底径	口縁部は厚く短く断面三角形を呈する。 口縁上面は水平で丸みをもつ。口縁部下を接合のため窓によって押さええる。 内外面ともに横撫でを施す。	石英粒を多く含む	良 好	淡褐色
59	12号住居跡	壺	口径 30.1 高さ 底径	口縁部は薄く長く口唇部は丸い。 口縁上面はくぼんで内傾し、内側に強く張り出す。 内外面ともに横撫でを施す。	石英粒・ 雲母を含む	良 好	灰赤褐色
60	12号住居跡	壺	口径 23.2 高さ 底径	口縁部は長く、口唇部は丸い。口縁上面はくぼみ強く内傾し、内側に強く張り出す。 外面に煤が付着する。 内外面ともに横撫でを施す。	石英粒・ 黒雲母を含む	良 好	赤褐色
61	12号住居跡	壺	口径 23.8 高さ 底径	口縁部は細長く、口唇部は丸い。口縁上面はやや丸みをもち、強く内傾し、内側に少し張り出す。 内外面ともに横撫でを施す。	細かい砂粒を含む	良 好	淡褐色
62	12号住居跡	壺	口径 高さ 底径 6.4	壺の脚台片で、外形は直線的に小さく開き、先端に面をもつ。内部は高さ 0.6cm の小さな上げ底で丸みをもつ。 底内面に炭化物が付着する。 外面に縱方向の刷毛目を施す。	石英粒を多く含む	良 好	淡褐色
63	12号住居跡	壺	口径 高さ 底径 6.0	壺の脚台片で、外形は直線的に開き、先端に面をもつ。内部は高さ 1.6cm の上げ底で丸みをもつ。 外面に縱方向の細かい刷毛目を施す。	石英粒を多く含む	良 好	赤褐色

64	13号住居跡	甕	口径 高さ 底径	23.6 口縁部の断面が三角形を呈し、口縁上面が少しくぼんで小さく内傾する。 内外面は横撫でを施す。	石粒を少 し含む	良 好	灰白色
65	13号住居跡	甕	口径 高さ 底径	口縁部は厚く短かく、断面が三角形を呈する。 口縁上面は水平で丸みをもつ。 内外面は横撫でを施す。	砂粒を含 む	良 好	外 面 は 黒 色 裏 面 は い 橙 内 に
66	13号住居跡	甕	口径 高さ 底径	口縁部は断面が三角形を呈し、口縁上面がやや丸みをもち小さく内傾する。 胴部外面に縱方向の刷毛目を施し、口縁部内外面は横撫でを施す。	砂粒・小 石を含む	良 好	に ぶ い 橙 色
67	13号住居跡	甕	口径 高さ 底径	口縁部は細長く、口唇部は丸みをもつとふくらむ。口縁上面はやや丸みをもち、小さく内傾する。口縁下に凸帯をもつとみられる。 内外面ともに横撫でを施す。	わずかに 砂粒を含 む	良 好	橙 色
68	13号住居跡	甕	口径 高さ 底径	甕の脚台片で、外形は直線的であり開かず、先端に面をもつ。内部は高さ0.6cmの上げ底でやや平坦面をもつ。 外面に縱方向の粗い刷毛目を施し、内部は撫である。	砂粒を多 く含む	良 好	に ぶ い 橙 色
69	14号住居跡	甕	口径 高さ 底径	29.1 口縁部は厚く短かく、口縁上面は丸みをもち小さく内傾する。 内外面ともに横撫でを施す。	石英粒を 多く含む	良 好	赤 楠 色 ～ 黄褐色
70	14号住居跡	甕	口径 高さ 底径	26.5 口縁上面がくぼみ、小さく内傾して、内側に張り出す。 内外面ともに横撫でを施す。	大粒の石 英を含む	良 好	灰 楠 色
71	14号住居跡	甕	口径 高さ 底径	28.7 口縁部は細長く、口唇部は丸い。口縁上面がくぼみ、内傾して内側に強く張り出す。 内外面とも横撫でを施す。	密	良 好	橙 色

72	14号住居跡	甕	口径 高さ 底径	23.8 口縁部はやや曲線的な「く」字形口縁を呈し、口唇部に面をもつ。 内面を横方向に刷毛目を施し、その後に内外面を横撫でを施す。	細かい砂粒を含む	良 好	外黒 内褐 は色 は色 は色 は色 は色 は色
73	14号住居跡	甕	口径 高さ 底径	21.0 口縁部はやや曲線的な「く」字形口縁で、 口唇部は丸い。胴部の張りは弱い。 胴部の外面は縱方向、内面は横方向に刷毛目を施す。	石英粒を含む	良 好	外 面 は色 は色 は色 は色 は色 は色
74	14号住居跡	甕	口径 高さ 底径	17.8 口縁部は曲線的な「く」字形口縁で口唇部に小さな面をもつ。胴部の張りは弱い。 胴部外面は縱方向の刷毛目を施し、胴部近くを横方向に刷毛目を施す。内面にも刷毛目を施す。	石英粒を含む	良 好	外黒 内褐 は色 は色 は色 は色 は色
75	14号住居跡	甕	口径 高さ 底径	7.4 甕の脚台片で、外形は直線的に小さく開き、先端に面をもつ。内部は高さ0.5 cm の上げ底で丸みをもつ。底内面には炭化物が付着している。外面は、縱方向の刷毛目を施して撫でる。内面は撫でる。	大粒の石英粒を含む	良 好	黄褐色
76	14号住居跡	甕	口径 高さ 底径	6.1 甕の脚台形で、外形は曲線的に大きく開き、先端に面をもつ。内部は高さ1.4 cm の上げ底で丸みをもつ。 外面は、縱方向に細かい刷毛目を施し、内面は撫でる。	砂粒を含む	良 好	にぶい 黄褐色
77	14号住居跡	甕	口径 高さ 底径	6.1 甕の脚台片で外形は直線的に大きく開き、先端は尖る。内部は2.6 cm程の上げ底で平担面をもっとみられる。 外面に縱方向の刷毛目を施し、内面は横方向に撫でる。	大粒の石英粒を含む	良 好	赤褐色
78	15号住居跡	甕	口径 高さ 底径	26.6 口縁部は厚く短かく、断面が三角形に近い、口縁上面は平指で内傾する。 口縁下 2.7cmに断面三角形の小さな凸帯を1条貼り付ける。 内外面とも横撫でを施す。	砂粒・小石を含む	良 好	にぶい 橙色
79	15号住居跡	甕	口径 高さ 底径	口縁部は逆「し」字形で、口縁上面は水平で丸みをもつ。 内外面ともに横撫でを施す。	砂粒・小石を含む	良 好	橙色

80	15号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は逆「し」字形で、口縁上面はほぼ平坦で小さく内傾する。 内外面ともに横撫でを施す。	砂粒・小石を多く含む	良 好	にぶい色
81	15号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は厚く短かく、断面が三角形を呈する。口縁上面はくぼみ気味で小さく内傾する。 内外面ともに横撫でを施す。	砂粒を僅かに含む	良 好	外面は黒褐色 内面は明黄褐色
82	15号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面が少しくぼみ、内傾して内側に張り出す。 内外面ともに横撫でを施す。	砂粒を僅かに含む	良 好	灰白色
83	16号住居跡	壺	口径 28.6 高さ 底径	口縁部は細長く、口唇部は丸い。口縁上面はくぼみ、内傾して内側に張り出し氣味である。 内外面ともに横撫で調整。	砂粒・小石を含む	良 好	灰白色
84	16号住居跡	壺	口径 高さ 底径	壺の脚台片で、上げ底の上面は平坦で砂粒が付着している。 外面には斜方向の刷毛目を施す。	砂粒・小石を含む	良 好	明褐色
85	16号住居跡	壺	口径 高さ 底径	壺の脚台片で、上げ底の上面は平坦で砂粒が付着している。 外面には縦方向の粗い刷毛目を施す。	砂粒・小石を含む	良 好	外面はにぶい色 内面は浅黄橙色
86	16号住居跡	壺	口径 高さ 底径	壺の脚台片で、上げ底の上面は小さな面をなす。 外面は縦方向の粗い刷毛目を施し、底内面は細かな刷毛目を施し、脚台内は撫でる。	砂粒・小石を僅かに含む	良 好	浅黄橙色
87	16号住居跡	壺	口径 高さ 底径 10.8	平底で、底部外面には細かい刷毛目を丁寧に施す。	砂粒を多く含む	不 良	外面は灰褐色 内面は白色

88	18号住居跡	甕	口径 高さ 底径	20.1 は断面が三角形を呈し、口縁上面はほぼ平坦で小さく内傾する。 内外面ともに横撫を施し、内面に斜方向の刷毛目が残る。	砂粒を含む	良好	外面はぶい色 内面は黒褐色
89	18号住居跡	甕	口径 高さ 底径	24.5 口縁上面はくぼみ気味で小さく内傾する。 口唇部は丸い。 内外面ともに横撫を施す。	砂粒・小石を含む	良好	にぶい 黄褐色
90	18号住居跡	甕	口径 高さ 底径	27.6 口縁部は断面が三角形で、口縁上面が丸みをもち、小さく内傾する。口縁下3.2cmに1条の沈線を入れる。 内外面ともに横撫を施す。	砂粒・小石を含む	良好	外面は極端赤褐色 内面にはぶい橙色
91	18号住居跡	甕	口径 高さ 底径	24.6 口縁部は断面が三角形を呈し、口縁上面が丸く、小さく内傾する。口縁下には寛と指頭によって接合を強化している。 外間に刷毛目を施したあと全体を横撫をする。	砂粒・小石を含む	良好	明褐色
92	18号住居跡	甕	口径 高さ 底径	口縁部は細長く、口唇部は丸くふくらむ。 口縁上面は強くくぼんで内傾し、内側に強く張り出す。口縁下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。 内外面ともに横撫を施す。	砂粒・小石を含む	良好	にぶい 黄褐色
93	18号住居跡	甕	口径 高さ 底径	6.4 甕の脚台片で、外形は直線的に大きく開き先端に面をもつ。内部は高さ1.0cmの上げ底で丸みをもつ。 外間に縱方向の細かい刷毛目を施し、内面は撫でを施す。	砂粒・小石を含む	良好	にぶい 黄褐色
94	20号住居跡	甕	口径 高さ 底径	26.8 口縁部は細長く、口唇部は丸い。口縁上面はくぼんで内傾し、内側へ張り出す。 内外面ともに横撫を施す。	大粒の石英粒を含む	良好	赤褐色 ～灰褐色
95	20号住居跡	甕	口径 高さ 底径	27.1 口縁部は長めで、口唇部は丸い。口縁上面はくぼんで内傾し、内側に強く張り出す。 内外面とも横撫を施す。	粗	良好	にぶい 赤褐色

96	20号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は厚く、口唇部は丸い。口縁上面はくぼんで内傾し、内側に弱く張り出す。内外面とも横撫でを施す。	密	良 好	にぶい赤褐色
97	20号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は厚く短かく、断面が三角形に近い。口縁上面は平坦で内傾し、内側に弱く張り出す。内外面とも横撫でを施す。	大粒の石英粒を含む	良 好	灰褐色
98	20号住居跡	壺	口径 19.6 高さ 底径	口縁部は鋸先状口縁で、口縁上面は水平である。 外面は横・斜方向に撫でを施し、内面は横撫でを施す。	粗	良 好	にぶい赤褐色
99	20号住居跡	壺	口径 21.7 高さ 底径	口頭部は曲線的で、ゆるやかに外反する。 口唇部には面をもつ。 外面は縦方向に細かな刷毛目を施し、縦方向に間隔0.8 cmで暗文を入れる。内面は横撫でを施す。		良 好	にぶい赤褐色
100	21号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は断面が三角形を呈し、口縁上面が平坦で内傾し、内側に弱く張り出す。内外面とも横撫でを施す。	砂粒を少し含む	良 好	浅黄橙色
101	21号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は口唇部に向って細くなり、口縁上面が小さくくぼみ内傾し、内側に弱く張り出す。内外面とも横撫でを施す。	砂粒を少し含む	良 好	浅黄橙色
102	21号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は厚く短い。口縁上面は丸みをもっており小さく内傾する。内外面とも横撫でを施す。	砂粒を多く含む	良 好	浅黄橙色
103	21号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は鋸先状口縁に近く、口縁上面は水平である。 内外面とも横撫でを施し、頭部外面には縦方向の暗文を施す。	石英粒を含む	良 好	にぶい橙色

104	22号住居跡	壺	口径 高さ 底径 14.9	壺の脚台片で、外形は曲線的に大きく開き、先端は角がある。 外面は斜方向の施でを施し、内面は縦方向の粗い刷毛目を施した後に施である。	砂粒を少 し含む	良 好	にぶい 橙 色
105	22号住居跡	壺	口径 高さ 底径	壺の脚台片で、外形は曲線的に大きく開く。 外面は斜方向の刷毛目を施した後に横方向の施でを施す。内面は横方向に小刻みに刷毛目を施し、上面は施である。	砂粒を少 し含む	良 好	黄褐色
106	22号住居跡	鉢	口径 12.5 高さ (10.2) 底径	丸底の鉢と考えられる。口唇部は丸い。 胴部下半の内外面は、縦または斜方向に刷毛目を施し、上半は横振でを施す。	砂粒を含 まない	良 好	淡赤褐色
107	23号住居跡	壺	口径 24.0 高さ 底径	口縁部は断面が三角形を呈し、口縁上面が平坦で小さく内傾する。 内外面ともに横振でを施す。	砂粒を含 まない	良 好	橙 色
108	23号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁部は細長く、口唇部は丸い。口縁上面はくぼんで内傾し、内側へ張り出す。 内外面ともに横振でを施す。	砂粒を少 し含む	良 好	橙 色
109	23号住居跡	壺	口径 高さ 底径 8.8	壺の脚台片で、外形は曲線的に大きく開き、先端に面をもつ。内部は高さ2.3cm以上の上げ底で、表面に砂粒が付着する。 外面を縦方向に施で、先端部の内外面は横振でを施す。	砂粒を含 まない	良 好	明黄褐色
110	23号住居跡	壺	口径 21.7 高さ 底径	口縁部は曲線的に強く外反する。口唇部は面をもつ。 内外面に横振でを施した後に口縁部下半の内面を荒磨きする。	砂粒を含 まない	良 好	明黄褐色
111	24号住居跡	壺	口径 23.6 高さ 底径	脚台付の長脚の壺で、脚部の最大径は上半にある。口縁は直線的な「く」字形口縁で、口唇部に面をもつ。 口縁部の内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目を施し、横振である。脚部上半は内外面とも縦方向の刷毛目に横方向の刷毛目を加える。脚部下半の外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目に縦方向の刷毛目を加える。	砂粒を含 む	やや不良	外 にぶい 面 橙 色 内 黒 褐 色

112	24号住居跡	壺	口径 高さ 底径	23.4 口縁部はやや丸みをもつ「く」字形口縁で、口唇部に面をもつ。 外面は綫方向の刷毛目、内面は縦・斜・横方向の刷毛目を施し、口縁部は横撫で施す。	僅かに砂粒を含む	良好	外浅黄 内黒褐色
113	24号住居跡	壺	口径 高さ 底径	14.3 壺の脚台片で、外形は直線的に大きく開き、先端は丸い。内部は高さ4.3cmの上げ底で、上面は平坦となり、砂粒が付着している。 内外面とも横撫で施す。	砂粒・小石を含む	良好	にぶい 橙色
114	24号住居跡	壺	口径 高さ 底径	13.9 口縁部はやや丸みをもった「く」字形で、口唇部は面をもち、1条の沈線を施す。 口縁部内外面は横撫で施し、脚部外面は縦・斜方向の刷毛目、脚部内面は斜方向の刷毛目を施す。	僅かに砂粒を含む	良好	橙色
115	24号住居跡	鉢	口径 高さ 底径	20.2 「く」字形口縁で丸平底の鉢である。口縁部は直線的に開き、口唇部に面をもつ。 口縁部は内外面とも横撫で施す。脚部上半の外面は縦方向の刷毛目、内面は斜方向の刷毛目を施す。脚部下半は内外面とも斜方向の刷毛目を施し、外面には横方向の撫でを加える。	砂粒を僅かに含む	良好	褐灰色
116	24号住居跡	台付鉢	口径 高さ 底径	16.5 16.1 12.9 脚部は丸く、口縁が外反し、脚台を有する鉢である。脚台は高さ4.5cm。 口縁部と脚台は内外とも横撫を施す。脚部の外面は斜方向の刷毛目に横方向の刷毛目を加える。脚部内面は縦方向の刷毛目に斜方向の刷毛目を加える。	砂粒・雲母を含む	良好	暗褐色
117	25号住居跡	壺	口径 高さ 底径	30.4 口縁部は曲線的に聞く「く」字形口縁で、口唇部に面をもつ。 口縁部内外面は横撫で施し、脚部内外面は斜・縦方向の刷毛目を施す。	砂粒・小石を含む	良好	にぶい 橙色
118	26号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面がくぼみ内傾して内側に張り出す。口唇部は丸い。口縁下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。 内外面とも横撫で施す。	砂粒を少し含む	良好	灰白色
119	26号住居跡	壺	口径 高さ 底径	口縁上面が大きくくぼみ、強く内傾して内側に張り出す。口唇部は丸い。 内外面とも横撫で施す。	石英を少し含む	良好	浅黄橙色

120	26号住居跡	壺	口径 高さ 底径	7.8	丸みをもつ平底で安定を欠く。 外面に縱方向の刷毛目を施し、内面を撫する。底外面には刷毛目を施す。	細かい砂粒を含む	良 好	浅黄橙色～橙色
121	27号住居跡	壺	口径 高さ 底径		口頸部は曲線的に外反し、「く」字形を呈する。口唇部は中央でくぼむ。 外面に横方向の刷毛目を施した後、口縁付近を横撫です。くびれ以下は縱方向の刷毛目を施す。	砂粒を含まない	良 好	黄褐色
122	27号住居跡	壺	口径 高さ 底径		口頸部はやや曲線的に開き、「く」字形を呈する。口唇部に面をもつ。 外面とも横撫でを施す。	石英を少し含む	良 好	淡黄色
123	27号住居跡	甕	口径 高さ 底径		口縁上面がくぼみ、内傾して内側へ張り出す。口唇部は丸く、若干ふくらむ。 外面とも横撫無でを施す。	石英砂を含む	良 好	浅黄橙色
124	27号住居跡	甕	口径 高さ 底径	9.4	甕の脚台片で、外形は曲線的に大きく開き、先端は丸い。内部は約2.6cmの上げ底で上面には砂粒が付着する。 外面とも横撫でを施す。	石英砂を含む	良 好	浅黄橙色
125	28号住居跡	土師器・壺	口径 高さ 底径	26.6	口縁部は曲線的に外反する「く」字形口縁で、口唇部は丸い。外面に煤が付着する。 口頸部内外面は横撫でを施し、胴部に縱方向の刷毛目を施す。口縁部内面は横方向の刷毛目を施し、胴部内面は上方に蓖削りする。	砂粒を多く含む	良 好	暗褐色
126	28号住居跡	土師器 高台付杯	口径 高さ 底径	23.4 6.2 15.6	大型の高台付杯で、体部は比較的直線的に立ちあがり、外反する。底部端に外方に開く断面方形の高台を貼りつけ、底外面を除いて丹塗りする。 外面は口縁部を除いて回転蓖削り。高台部と口縁部と内面は横撫でを施す。	砂粒を含まず精良	良 好	暗褐色
127	29号住居跡	土師器・甕	口径 高さ 底径	22.7	口縁部は曲線的に強く外反し、口唇部は丸くふくらむ。口縁下に2条の沈線を施す。 口縁部内外面は横撫でを施し、胴部外面は縱方向の粗い刷毛目、内面は上方に向って蓖削りする。	砂粒を少し含む	良 好	明褐色

128	29号住居跡	土師器・杯	口径 高さ 底径	34.4 2.4 9.2	体部は曲線的に立ち上がり外反する。 底部外面は回転窓削りし、内外面に横撫でを施した後、全面に回転利用の窪磨きを施す。	砂粒を含まず精良	良好	明褐色
129	31号住居跡	土師器・鉢	口径 高さ 底径	21.0	体部は直線的に外反する。丹塗りを施した痕跡を残す。 体部下半を横方向に窪削りし、他は横撫でを施す。	砂粒を含まず精良	良好	黄褐色
130	31号住居跡	土師器 高台付杯	口径 高さ 底径		大型の高台付杯とみられる。杯部は丸底に近く、底部端に断面方形の高台を貼りつける。 体部下半の外面から底部外面は回転窓削りを施し、他は横撫でを施す。	砂粒を含まず精良	良好	暗褐色
131	31号住居跡	土師器・杯	口径 高さ 底径	40.0 2.7 8.6	体部は曲線的に立ちあがり外反する。 底外面に「□人」の墨書きがある。全面に丹塗りする。 体部内外面に横撫でを施し、底内面は撫で、体部下半は回転窓削りする。底外面は窪切り離し。	砂粒を含まず精良	良好	黄褐色
132	31号住居跡	土師器・杯	口径 高さ 底径	13.1 2.4 8.2	体部は曲線的に立ちあがり外反する。 内面に丹塗りする。 体部内外面に横撫でを施し、底内面は撫で、底外面は窪切り離し。	砂粒を含まず精良	良好	黄褐色
133	31号住居跡	須恵器・蓋	口径 高さ 底径	15.1 (0.9)	器高が低く、口唇部は断面が三角形を呈す。 口縁部は横撫でを施す。	砂粒を含まず精良	良好	灰色
134	31号住居跡	須恵器・杯	口径 高さ 底径	15.3 3.8 8.6	体部は直線的に外反する。 内外面とも横撫でを施す。	砂粒を含まず精良	良好	灰色
135	31号住居跡	須恵器・椀	口径 高さ 底径	15.2	体部は直線的に開き、口縁部が外穹する。 内外面ともに横撫でを施す。	砂粒を含まず精良	良好	暗褐色

136	32号住居跡	土師器・甕	口径 高さ 底径	25.1 丸みをもって外反し、口唇部は丸い。脇部のふくらみは弱い。外面に煤が付着する。 口縁部外面は横撫で、脇部外面は縱方向の刷毛目を施す。口縁部内面は横方向の刷毛目、脇部内面は上方に薙削りを施す。	小石を少し含む	良好	黒褐色～暗褐色
-----	--------	-------	----------------	---	---------	----	---------

第3節 出土遺物

1. 弥生時代の竪穴住居跡出土器（第31～41図）

全般的に住居跡内からの遺物の出土は少なく、また、全形を知ることのできる資料もほとんどない状況である。さらに大半の資料は覆土中から出土しており、確実に住居跡に伴うもの、いわゆる一括遺物として認定しうる資料は、焼失によって棄てられたと推定される24号住居跡出土の土器を除けば、ほとんどないといってよい。

しかし、ここに図示した床面直上ないしは覆土下位の土器をみると、7号住居跡のように土器の形態的特徴に大きな差異を認められない場合があることも事実である。したがって、ここでは主要な器種である菱形土器を形態的特徴によって分類し、他の遺跡のそれと比較することによって大まかな年代観を考えたいと思う。

①菱形土器の分類

菱形土器は口縁部と底部に分けて、前者をA～I類に、後者をa～h類に分類した。

A類：口縁部は厚く短く、断面は三角形に近い。口縁上面はやや丸みをもち、水平ないしは低く内傾する。口縁下に三角凸帯をもつものがある（39・78）。胸部はややふくらみをもつ。

B類：断面は細身の三角形に近く、口縁上面がやくばみぎみで低く内傾する。内側への張り出しが見られない（21・64・89）。21には口縁下に沈線がめぐる。

C類：形態はB類と類似するが、内側に張り出しが気味となる（22・70・100・101）。

D類：断面は舌状で、口縁上面がくぼみ、低く内傾して、内側に張り出しが見られる（5・6・18・40・44）。6と40には口縁下に三角凸帯がつく。

E類：口縁が細長くなり、口縁上面がくぼんで、強く内傾して、内側に張り出す。この類は口唇部でふくらむE₁類（50）とそうでないE₂類（60）がある。北方菱棺墓群出土の12の菱棺（第49図）はE₁類で、口縁直下に三角凸帯をもち、胸部最大径は上半にあり口径とほぼ同じで、脚台がつく。

F類：口縁上面は平坦で強く内傾し、「く」字形に近いが、内側に小さな張り出しが見られる（27・61）。

G類：口縁上面が丸みをもち、強く内傾して「く」字形を呈するが、口唇部が丸い（10：26・46・72・73・74）。

H類：口縁上面が丸みをもち、強く内傾して「く」字形を呈し、口唇部に面をもつ（117）。最大胸部径は上半にあり、口径とほぼ同一である。

I類：口縁上面はやや丸みをもち、強く内傾し「く」字形を呈し、口唇部に明瞭な面がみられる（111・112）。最大胸部径はやや上位にあり、口径よりも大きい。

a類：わずかな上げ底の脚台で、脚の開きは小さく接地面が広い（25・45・62・68・75）。

- b類：半球状に近い上げ底の脚台で、脚は直線的に開き、接地面は比較的広い（25・63）。
- c類：b類よりも上げ底となるため脚の厚味が減少し、脚らしい形となる。脚は直線的にやや大きく開き、接地面をもつ（19・20・23・76・93）。
- d類：脚の厚味はc類と大差ないが、曲線的に大きく開き、先端はやや丸みをもつ（8）。
- e類：底部の厚みが減少して、やや高い上げ底となり、脚は曲線的に大きく開いて、内側の上部は丸みをもつ（7・38）。
- f類：e類と類似するが、内側の上部が明確な面をもつ（32・37・86）。
- g類：脚台の内側上部が広く明確な面をなし、砂粒が付着する（84・85・124）。
- h類：脚台が著しく発達したもので、脚台内面には刷毛目を残しているもの（104・105）と横撫でを施したもの（113）がある。

以上、変形土器の口縁部と底部について分類したが、次にその組合せについて考えてみたい。本遺跡では全形を知りうる資料は非常に少なかったが、E類については北方甕棺墓群出土の甕（第49図12）によって「類となることは確実である。他の組合せは、県内出土の小型甕棺として使用されている変形土器によって、A類-a・b類（鹿本町荒子遺跡出土甕棺の下蓋）B類-c類（城南町一丁畠遺跡出土甕棺の下蓋）、D類-e類（熊本市黒髪町遺跡出土の甕）⁽¹⁾と⁽²⁾考えることができよう。また、H類は鹿本町津袋大塚遺跡の住居跡や、同じ白川流域にある熊本市下南部遺跡の4号住居跡から出土した変形土器によって、「類ないしはg類となるとみられる。さらに、I類は阿蘇町陣内遺跡の8号住居跡や津袋大塚遺跡の溝状遺構出土の変形土器によって、h類と組合うものと考えられる。

②変形土器の年代

他遺跡出土の変形土器によれば、A類は中期初頭に位置づけられている城之越式土器に類似し、D・E類は從来から中期後半に位置づけられているいわゆる黒髪式土器と呼ばれているものである。さらに、H・I類は下南部遺跡や津袋大塚遺跡によって、それぞれ後期の前半と後半に年代が求められている。

このような変形土器の年代観からすると、今回分類した変形土器は、口縁部が部厚く断面三角形のものから、口縁上面がしだいにくぼむと同時に内側への張り出しが現われ細長くなり、

〔註〕

- (1) 西健一郎「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」『古文化論集』上巻
森貞次郎博士 古稀記念論文集刊行会 1982
- (2) 高木正文「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集 九州古文化研究会 1979
- (3) 大城康雄・廣瀬正照「下南部遺跡発掘調査報告書」熊本市教育委員会 1978

やがて「く」字形の口縁となる変化をたどれ、これと併行して脚台が平底に近いものからしだいに上げ底が強くなる過程をもつことが知られる。

したがって、口縁部と脚台の組合せが明確でないものについても、D類とe類、E・F・G類とf類ないしはg類という組合せを考えることが可能とみられる。

2. 歴史時代の竪穴住居跡出土土器（第24図）

5 軒の竪穴住居跡から出土した遺物は、各々が重複関係にあるにもかかわらず、その器種別に見る形態的特徴に大きな差異は認められない。すなわち、土師器の縁は脚部の外面に縦方向刷毛目を施し、内面を縦方向に箆削りし、「く」字形の口縁内面には横方向の刷毛目を施している。土師器の杯や高台付の大型の杯にしても、法量や体部の立ち上がり方、成形・調整方法に差異は認められない。したがって、短時期に間断なく営なまれた住居跡群であろうと考えられる。その年代は、直線的な体部をもつ須恵器の杯や碗によって8世紀後半末から9世紀初頭頃に位置づけされるものとみられる。

3. 弥生時代の石器（第43・44図）

(1)石包丁

1～3は3号住居跡覆土中からの出土である。

1は長径31.1cm・身幅3.25cm・厚さ0.8cm・重量42.70gを測る。刃部は両刃で、直線的である。紐孔は身幅のほぼ中央に両側より穿孔されており、孔間は心心で2.35cmを測る。紐孔の上縁に紐擦れが認められる。石材は粘板岩で、にぶい暗灰色を呈する。

2は3分の1を欠失し、現存長径9.1cm・身幅3.9cm・厚さ0.8cmを測る。刃部は両刃で、わずかに外弯する。紐孔は身幅の4分の1のところに両側より穿孔され、孔間は心心で2.95cmを測る。石材は粘板岩で、灰黒色～にぶい暗灰色を呈する。

3は長径9.85cm・身幅4.1cm・厚さ0.55cm・重量31.18gを測る。刃部は両刃で外弯する。紐孔は身幅の3分の1のところに両側より穿孔され、孔間は心心で1.7cmを測る。石材は粘板岩で黒灰色を呈する。

4は4号住居跡の覆土中より出土している。長径10.55cm・身幅3.9cm・厚さ0.5cm・重量31.73gを測る。刃部は両刃で外弯する。紐孔は身幅の約3分の1のところに両側から穿孔し、孔間は心心で2.0cmを測る。上縁に紐擦れが認められる。石材は粘板岩で黒灰色を呈する。

5は12号住居跡の覆土中より出土した石包丁で、2分の1を欠失し、片面が剥落する。現存長径6.8cm・身幅3.45cm・現存厚さ0.6cmを計る。刃部は両刃とみられ外弯する。紐孔は身幅の3分の1のところに両側より穿孔する。石材は粘板岩で黒灰色を呈する。

6も12号住居跡の覆土中より出土している。2分の1を欠失し、現存長径6.65cm・身幅5.25

cm・厚さ0.65cmを測る。刃部は両刃で外弯する。紐孔は身幅の約5分の1のところに両側より穿孔されている。石材は粘板岩で灰色～黒灰色を呈する。

7はJ-7区Ic層より出土している。2分の1を欠失し、現存長径5.65cm・身幅4.4cm以上・厚さ0.6cmを測る半月形の石包丁で、刃部は両刃で外弯する。紐孔は現存部には認められない。石材は粘板岩で黒灰色を呈する。

8はH-9区の耕作用溝から出土した石包丁で3分の1を欠失する。現存長径5.9cm・身幅2.6cm・厚さ0.5cmを測る。紐孔は身幅の中程にあり、両側より穿孔する。孔間は心心で2.3cmを測り、孔の上縁に紐擦れが認められる。石材は粘板岩でにぶい暗灰色を呈する。

9はQ-8区の「塙坊主」の3号土壌(SX01-3)より出土した石器である。約2分の1を欠失しているとみられ、現存長径8.3cm・幅6.2cm・厚さ0.8cmを測る。石材は緑色片岩で通有の石包丁の石材と異なり、研磨方法も異なることから磨製石斧の可能性がある。

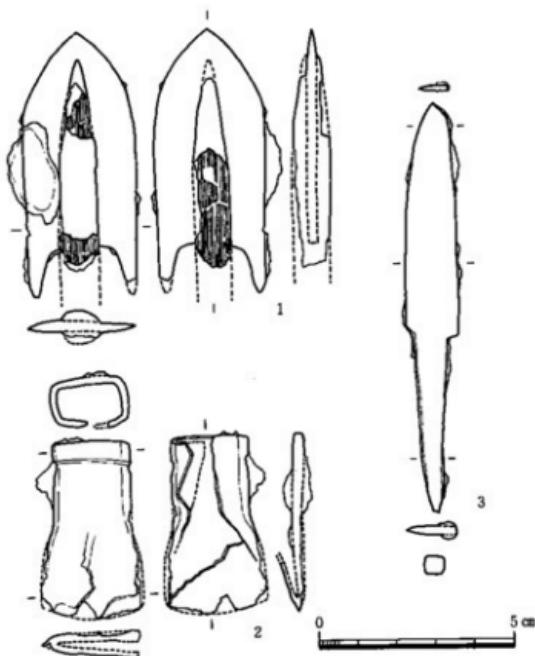
10は7号住居跡の土壌の埋土上位から出土した磨製石剣である。中茎の一部を消失するだけで全長7.6cm・身幅3.25cm・厚さ8.7cm・中茎の長さ1.8cm・中茎の幅2.04cm・中茎の厚さ0.7cm・現存重量24.43gを測る。刃部は両刃で、剣身中央の陵線は中央より切先にかけてにぶい。破損のためかまたは度重なる研磨のためか、切先はノミ状に研磨されている。石材は綾状の文様の極細粒砂岩でにぶい暗灰色を呈・黒灰色を呈する。

11は12号住居跡の覆土中から出土した基部を抉る三角形に近い磨製石鎌で、全長3.45cm・幅1.69cm・厚さ0.22cm・重量1.90gを測る。丁寧に研磨され刃部と切先は鋭い。石材は粘板岩でにぶい暗灰色を呈する。

12は9号住居跡の床面直上から出土した三角形状の磨製石鎌で、切先と基部を若干欠失する。現存長3.0cm・幅1.95cm・厚さ0.34cm・重量2.47gを測る。石材は粘板岩で黒灰色を呈する。

13はH-9・10区の2号土壌の底部直上より出土した磨製石製品の一部である。残存部が少ないため器種については不明である。現存長3.0cm・幅1.35cm・厚さ0.31cmを測る。全面を丁寧に研磨し端部は鋭く仕上げられている。石材は頁岩または粘板岩で黒灰色を呈する。

14は13号住居跡の覆土中から出土した玉である。一辺を抉りこんだ隅丸三角形状を呈し、長径1.55cm・短径1.1cm・厚さ0.2cm・重量0.63gを測り、抉りの反対側に直径0.1cmの孔を穿つ。器面は荒調整されているだけで、研磨はみられない。石材は深緑色を呈し、長崎ヒスイかと考えられる。



第30図 鉄製品実測図 S=3%

4. 鉄製品（第30図）

梅ノ木遺跡からの出土鉄器は合計5点ある。内訳は鉄斧2点、鉄鎌1点、刀子1点、不明品1点である。これらの鉄器のうち1と2が弥生後期の住居である。SB22の床面近くから出土している。また刀子は奈良時代後半期の住居であるSB28の床面近くから出土している。

図示しなかった不明鉄器および鉄斧細片はそれぞれSB07、攪乱溝より出土している。不明鉄器は鉄鎌あるいは刀子の茎かと思われるが、細片のためここでは保留する。また鉄斧細片は図に示した鉄斧の刃部と類似しており、同様の形状を示すものと思われる。

鉄鎌（図1） 全体の形状は柳葉形を呈し、切先がふくらみ、両側が平行している。装着部は無茎で逆刺を持っている。表裏両面に矢柄の木質部がみられ、切先近くまで完全に残存している。着装方法は矢柄先端を半割し、挟み込んでいる。なお、矢柄表面に薄い皮が覆っているが、矢柄の材質とともに不明である。全長6.8cm・最大幅3.0cm・最大厚0.3cm・重量19.60gを測り、矢柄径約1.0cmである。

鉄斧（図2） 小型の有袋無肩の鉄斧であり、全体の形状は撓形に近くなっている。両側

および刃部の三方から鉄板を折り曲げて作られた鍛造品である。刃部は鎌のため鉄板が浮き上っており、刃端もかなり欠損している。なお、着柄口外面は若干盛り上っており、二重に鉄板を重ねている可能性がある。全長5.6cm・最大幅2.6cm・現存重量26.10gを測る。

刀子（図3）両闘の刀子である。背部は明確な角闘であるが、刃部は直線的な削闘になっている。茎は長方形の断面を示し、先細りする。切先はふくらを有しており、背部は先端近くで切先へ向け直線的に屈曲する。全長10.5cm・身長6.0cm・茎長4.5cm・背幅0.2cm・重量13.40gを測る。

5. 支石墓出土遺物（第45図）

2墓の支石墓の内部主体である土壙からは、弥生土器の小破片のほか繩文土器の破片が数点出土している。図示できうるような資料は少ないが、1号支石墓の土壙中より出土した3点をあげる。

1は壺形土器の肩部付近の破片で、口縁部近くに断面三角形の凸帯を1条貼りつけている。内外面ともに横方向の丁寧な箝磨きが施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。2は壺形土器の口縁部と考えられる。口唇部は丸く仕上げられており、内外面ともに横撫でを施した後に内面に横方向の箝磨きを施す。胎土に砂粒を少し含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。3は壺形土器の頸部から肩部にかけての破片で、外面に断面三角形の凸帯を2条貼りつけている。内外面ともに剥離がひどく調整は不明。胎土に石英粒を少し含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

6. 裔棺

1号甕棺墓甕棺（第46図4）

鉢形の蓋と組み合う大型の甕棺であるが、開田時に口縁部付近が取り去られている。遺存の状態から器高は110cm前後と推定される。胴部上半はほぼ直立するが口縁部に向って若干すぼまり、胴部中位には三角凸帯を2条貼りつける。底部は平底で直径14.4cmを測る。器壁は1.0cm前後で、内外面とも撫で調整が施され、底部近くの胴部外面に黒斑がある。胎土は密で雲母や白色の砂粒を多く含み、焼成は良好で、外面は橙色～にぶい黄橙色を呈する。

2号甕棺墓甕棺（第47図1）

鉤状の凸帯を肩部に貼りつけた特殊な文様をもつ甕棺である。器高56cm・口径27.2cm・底径9.45cmを測る。口縁部は上面が丸みをもち、内傾して内側に少し張り出す。胴部は丸みをもち、最大径は上半にある。底部は凸レンズ状の丸みをもった平底で、安定性を欠く。口縁下と胴部最大径のところにそれぞれ断面三角形の刻目凸帯を有し、口縁下の凸帯より下方に向って鉤状の断面三角形の刻目凸帯を貼りつける。この刻目突帯は口縁部側からみると右振りで、約10cm

の等間隔に貼りつけており、8本に復原できる。口縁部は内外面とも横撫を施し、胴部内面は斜方向の刷毛目を施した後に撫でを施す。胴部外面は斜・横方向の刷毛目を施した後に胴部上半は部分的に縦方向の箒磨きを施し、胴部下半は全面を丁寧に箒磨きを施す。底外面も箒磨きを施されている。胎土に微砂粒を含み、焼成は良好で明褐色を呈する。底部から胴部の外面には黒斑がある。

4号壺棺墓壺（第47図2）

口径30.6cm・器高63.1cm・底径6.7cmを測る。口縁部は断面が三角形に近く、口縁上面は平坦で内傾し、口唇部は丸い。口縁部の内側は焼成後に丁寧に打ち欠いている。胴部は丸みをもち、最大径は上半にあり、ここに断面三角形の刻目凸帯を1条貼りつける。底部は平底である。口縁部内外面は横撫でを施す。胴部上半の内外面は縦・斜方向の刷毛目を施した後外面に横撫でを加える。胴部下半の外面は縦方向の刷毛目を施した後に全面を縦方向に丁寧に箒磨きを施す。内面は剥離のため不明。底部外面は撫でを施す。胴部下端と胴部上半の中央に小さな黒斑がある。胎土には微砂粒を含み、焼成は良好で暗褐色を呈する。

7. 「塚坊主」出土壺棺（第46図3・5～8、第48図9・10）

明治以降の開田によって出土した土器類を集めて埋設した「塚坊主」（SX01）からは、7個体分の壺棺（鉢形の蓋を除く）が出土している。

3は胴部下半を欠失するが、口径64.9cmを測り、器高は100cmほどに復原できる。口縁部は内側により強く張り出したT字形を呈し、上面はほぼ平坦で外に低く傾斜する。口縁下でややすぼまるが、胴部はほぼ直立しており、胴部の中程に小さな三角凸帯を1条貼りつける。器壁は0.8～1.1cmで、内外面とも横撫でを施す。胎土は密で雲母や白色の砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面は橙色～浅黄橙色を呈し、内面は橙色を呈する。胴部上半の中程に黒斑がみられる。

5は完形で、口径71.7cm・器高111.5cm・底径14.2cmを測る。口縁はT字形だが、外側に強く張り出しており、上面は平坦で外に低く傾斜する。口縁下がややすぼまり、胴部の中程に三角凸帯を2条貼りつける。底部は平底である。器壁は1.2cm前後を測る。胴部外面は縦方向の刷毛目を施した後に撫でを加え、胴部内面は撫でを施す。底外面は削り調整し、底径の2分の1のところに撫でによって幅1.5cmの浅い溝をめぐらす。胎土は密で、雲母や白色の砂粒を多く含む。焼成は良好で赤褐色を呈する。胴部上半の下位に黒斑がみられる。

6は完形で、口径76.5cm・器高111cm・底径11.5cmを測る。口縁部は内外に張り出しT字形を呈し、上面は平坦で外に低く傾斜する。胴部上半は外側に開き気味で、口縁下と胴部のやや下位にそれぞれ2条の三角凸帯を貼りつける。底部は平底である。器壁は0.7～0.9cmと薄い。胴部の内外面とも丁寧に撫でを施し、底外面は箒削りの後に底径の3分の1のところに撫でによつて幅1.6cmの浅い溝をめぐらす。胎土に白色の砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色～淡橙色を

呈する。胴部上半の中程から底部にかけて円周の4分の1にわたる黒斑がみられる。

7は大型壺棺の蓋として使用されたとみられる鉢形土器で、口径63.4cm・器高40.2cm・底径12.4cmを測る。口縁部は内外に張り出しT字形を呈し、上面はほぼ平坦で外に若干低く傾斜する。口縁下には三角凸帯を1条貼りつける。胴部はやや丸みをもって大きく開く。底部は高さ0.4cmの低い上げ底となっている。器壁は0.7~1.1cmを測る。胴部の外面は撫でを施し、内面は縱方向の刷毛目を施した後に撫でを加えている。胴部の中位と口縁部外面に黒斑がみられる。

8も7と同様の鉢形土器で、口径63.5cm・器高31.8cm・底径11.0cmを測る。口縁部は内外に張り出してT字形を呈し、上面はくぼみ気味で外側に傾斜する。凸帯はみられず、胴部は直線的に大きく開く。底部は平底である。器壁は0.9~1.1cmを測る。胴部外面には縱方向の刷毛目を施し、下位と上位に縱方向に箒状工具によって強く撫でつける。胴部内面の下位には縱方向の刷毛目を施し、全面を撫でによって仕上げている。胎土は密で砂粒を多く含み、焼成は良好で外面が橙色、内面が暗赤褐色を呈する。胴部中位と口縁部の外面に小さな黒斑がみられる。

9は完形で、口径39.0cm・器高71.9cm・底径10.5cmを測る。口縁は内外に強く張り出しT字形を呈し、上面は平坦で外に傾斜する。口縁下ですばまり、胴部は丸みをもち、やや上位に三角凸帯を2条貼りつける。底部は高さ0.5cmの上げ底である。器壁は0.9~1.1cmを測る。胴部上半の外面は横方向に撫で、下半外面は縱方向に撫でを施す。外面の下位には縱方向の刷毛目が残る。内面は丁寧に撫でを施す。胎土に細かい砂粒を含み、焼成は良好で淡褐色を呈する。胴部凸帶付近から胴部下半の上位にかけて黒斑がみられる。

10は完形で、口径40.1cm・器高65.4cm・底径11.0cmを測る。口縁は内外に張り出しT字形を呈し、上面はくぼみ気味で外に傾斜する。口縁下ですばまり、胴部は丸みをもつ。胴部のやや上位に2条の三角凸帯を貼りつける。底部は高さ0.3cmの低い上げ底である。器壁は1.0cm前後を測る。胴部上半の外面は横方向に撫でを施し、下半外面は縱方向の刷毛目の後に横方向に撫でを施す。胴部内面の中程には縱方向の刷毛目が残るが全面を横方向に撫でている。胎土に細かい砂粒を含み、焼成は良好で外面は淡赤褐色、内面は淡褐色を呈する。胴部外面には黒斑がみられる。

8. 北方壺棺墓群出土壺棺（第48図11・第49図12~15）

調査終了後の圃場整備工事中に、調査区北方の水田下より、7個体の壺棺が出土している。出土状態が不明のため、組み合せは不明である。

11はほぼ完形で、口径41.6cm・器高86.3cm・底径10.9cmを測る。口縁上面はくぼみ、内側に強く張り出す。強く内傾するため直立に近い形となる。胴部は口縁下で大きくすぼまるため、肩が張り丸みをもち、胴部のやや下位にコ字形の凸帯を2条貼りつける。底部は平底である。器壁は0.9cm前後を測る。胴部外面は口縁部に向って丁寧な刷毛目を施し、上半で部分的に撫で

を施す。胴部内面は下半を縦方向に撫で、上半を横方向に撫でるが、肩部付近と凸帯部付近は竪状工具によって撫でつけを行なう。胎土に石英粒を含み、焼成は良好で灰白色を呈する。肩部から凸帯下にかけて黒斑がみられる。

12は口縁部を一部欠失するが、口径40.6cm・器高54.35cm・底径9.8cmを測る脚台付の變形土器である。口縁部は細長く口唇部で丸くふくらむ。口縁上面は大きくくぼんでおり、強く内傾して内側に張り出す。口縁下ですばまり、ここに1条の三角凸帯を貼りつける。脚台の外形は直線的に大きく開き、先端は丸い。脚台内部は高さ2.9cmの上げ底で、天井に平坦面をもつ。胴部と脚台の外面は縦方向に刷毛目を施し、その後に胴部下半に撫でを加える。胴部内面は上半で縦方向の刷毛目を施したのち撫でを加え、下半では撫でを施す。脚台内面は横方向に撫でを施す。口縁下の胴部内面は横方向に刷毛目を施して横撫でしている。胎土には石英などの砂粒や石粒を多く含む。焼成は良好で、外面は浅黄橙色～浅暗褐色、内面は黒色～灰褐色を呈する。脚台の内外面と胴部中位に黒斑がみられる。

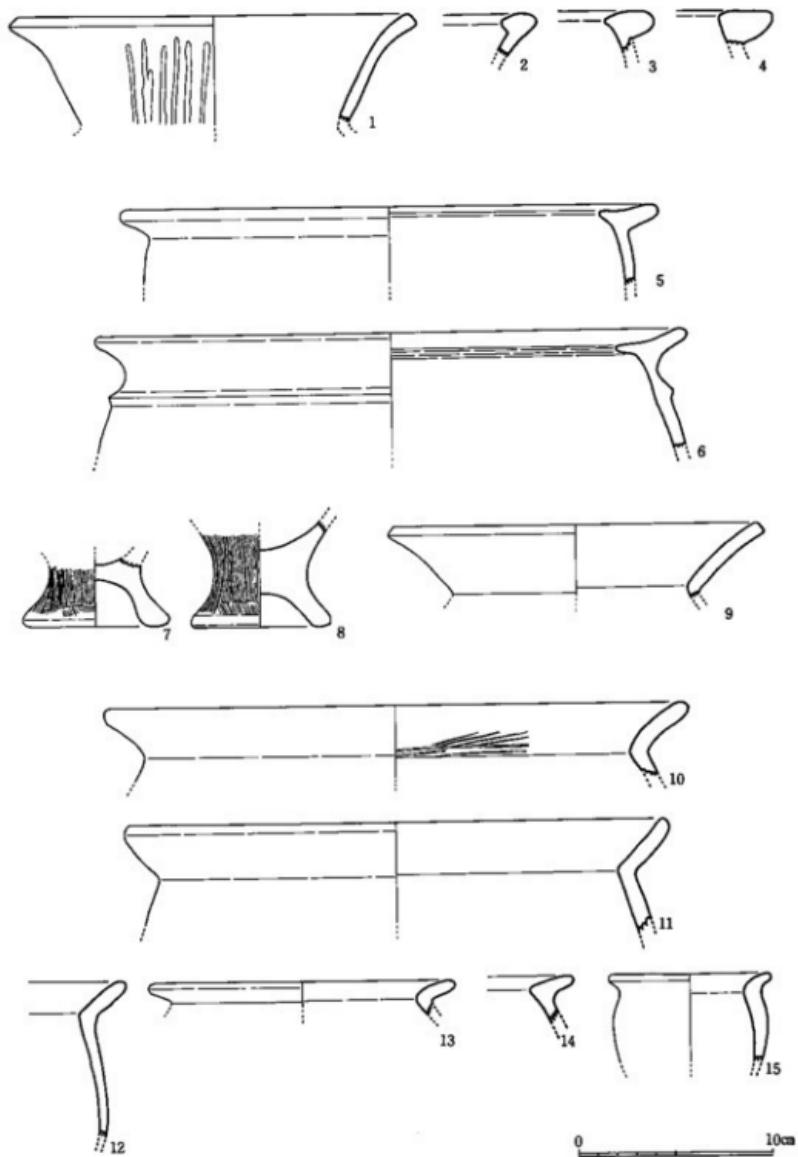
13は口縁部を欠失しており、底径10.5cmを測る。胴部は丸みをもち、最大径は上半にある。肩部と最大径の部分にそれぞれ1条の刻目を入れた三角凸帯を貼りつける。底部は平底である。胴部外面は横方向に撫でを施し、内面は下半を縦方向の刷毛目、上半に横方向の撫でを施す。胎土に細かい砂粒を含み、焼成は良好で黄橙色を呈する。底部付近の外面に黒斑がみられる。

14は完形で、口径45.0cm・器高41.9cm・底径13.3cmを測る鉢形土器である。口縁部は細長く、口唇部は丸い。口縁上面は平坦で内傾して、内側に若干張り出す。口縁下で胴部はややすばまり、ここに1条の刻目を入れた三角凸帯を貼りつける。底部は凸レンズ状に丸みをもっており、安定性を欠く。胴部の外面は縦方向に刷毛目を施した後、底外面を含めた全面を縦方向に丁寧な竪磨きを施す。胴部内面の上半は縦方向の刷毛目を施し、下半は剥離のため調整不明。胎土に細かい砂粒を含む。焼成は良好で、外面は淡赤褐色、内面は淡褐色を呈する。胴部上半の外面には黒斑がみられる。

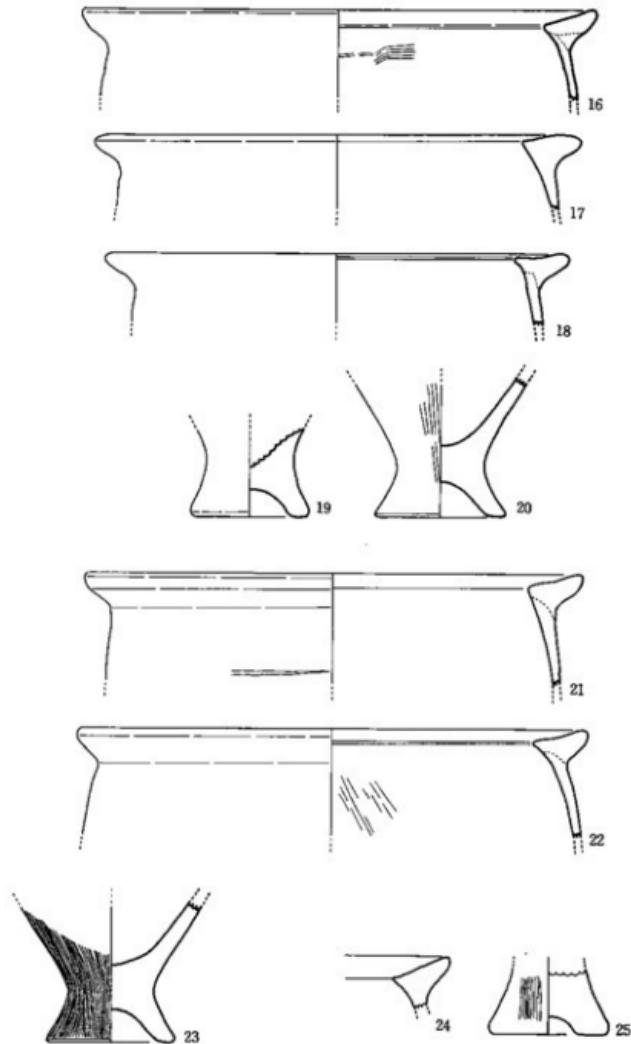
15は完形で、口径23.3cm・器高42.3cm・底径8.2cmを測る壺形土器である。口縁部は比較的厚みがあり、口唇部は中くぼみの面をもつ。口縁上面は若干くぼみ気味で内傾する。胴部の最大径は中位にあり、ここに1条の刻目を入れた三角凸帯を貼りつけている。底部は凸レンズ状にやや丸みをもつため安定性を欠く。底部には焼成後に外方から直径2cm程の孔を穿つ。胴部内外面には横・縦方向の刷毛目を施し、内面には部分的に横方向の撫でを加える。底外面にも刷毛目を施している。胎土は密で砂粒を少し含む。焼成は良好で、外面は浅黄橙色～灰白色、内面は淡赤橙色を呈する。底部と胴部上半の外面に黒斑がみられる。

9. 2号土壙出土土器（第45図4・5）

4は變形土器の口縁部片で、口径29.6cmを測る。口縁部は上面がくぼんで内傾し、内側に強

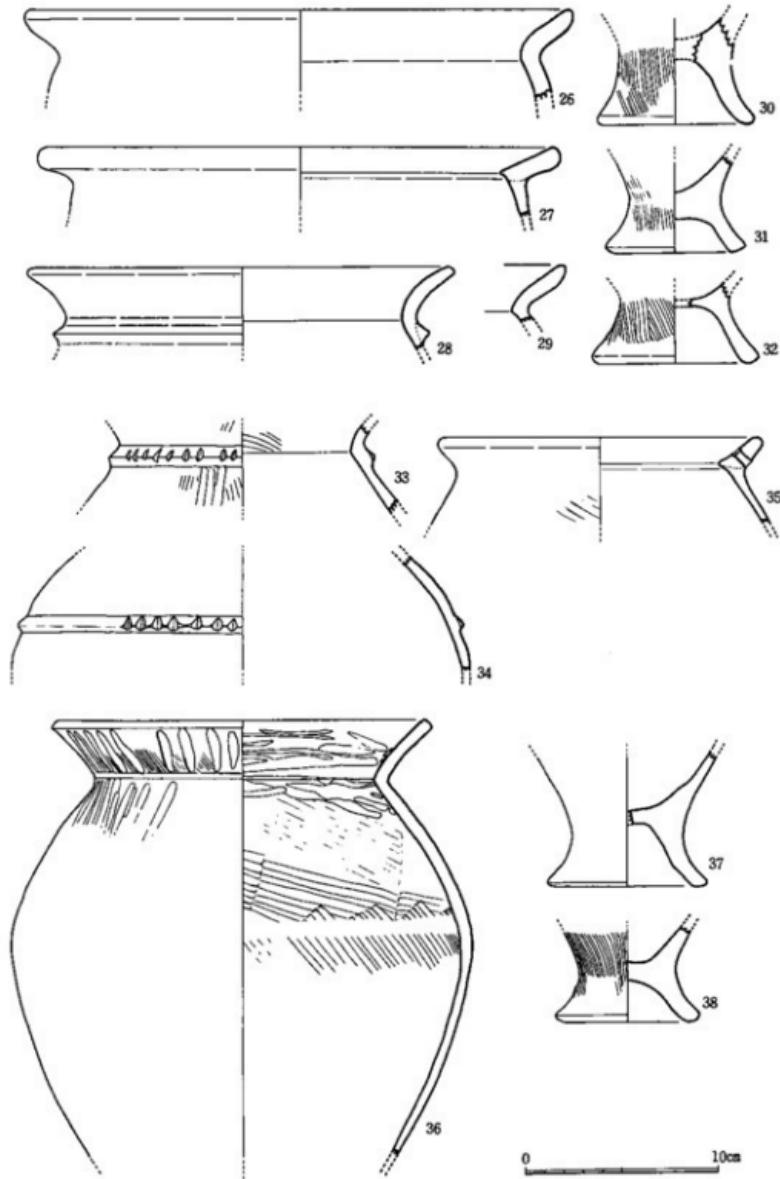


第31図 1~3号住宅跡出土土器実測図 S=1/2

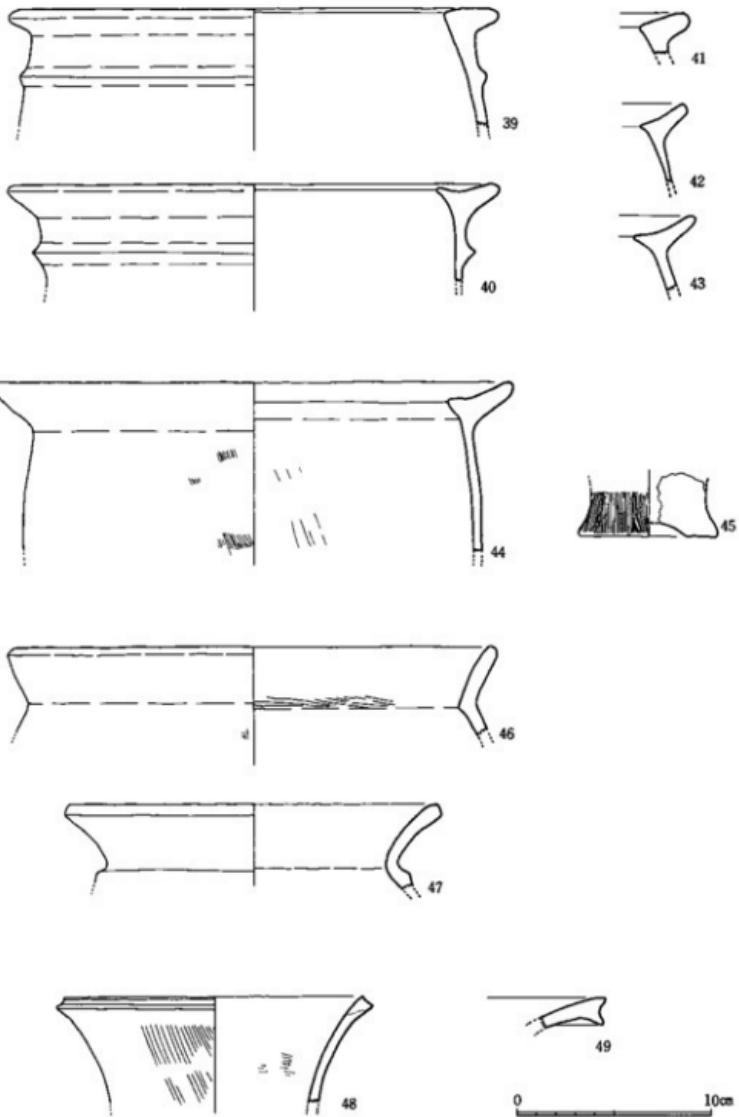


0 10cm

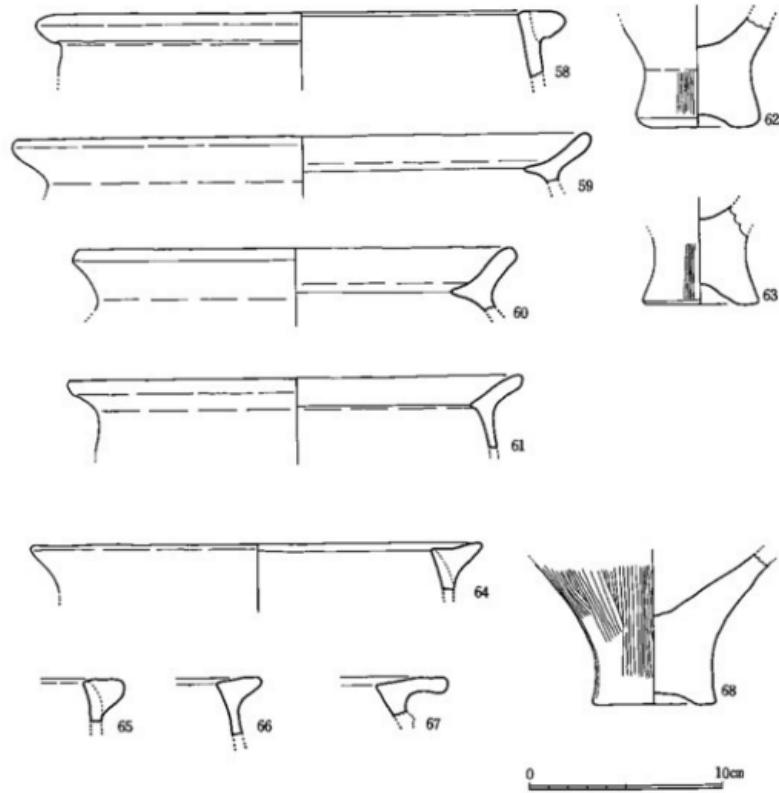
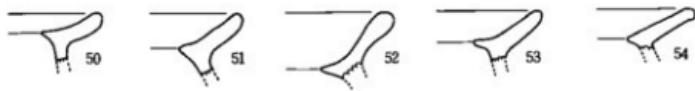
第32図 4~6号住居跡出土土器実測図 S=1/2



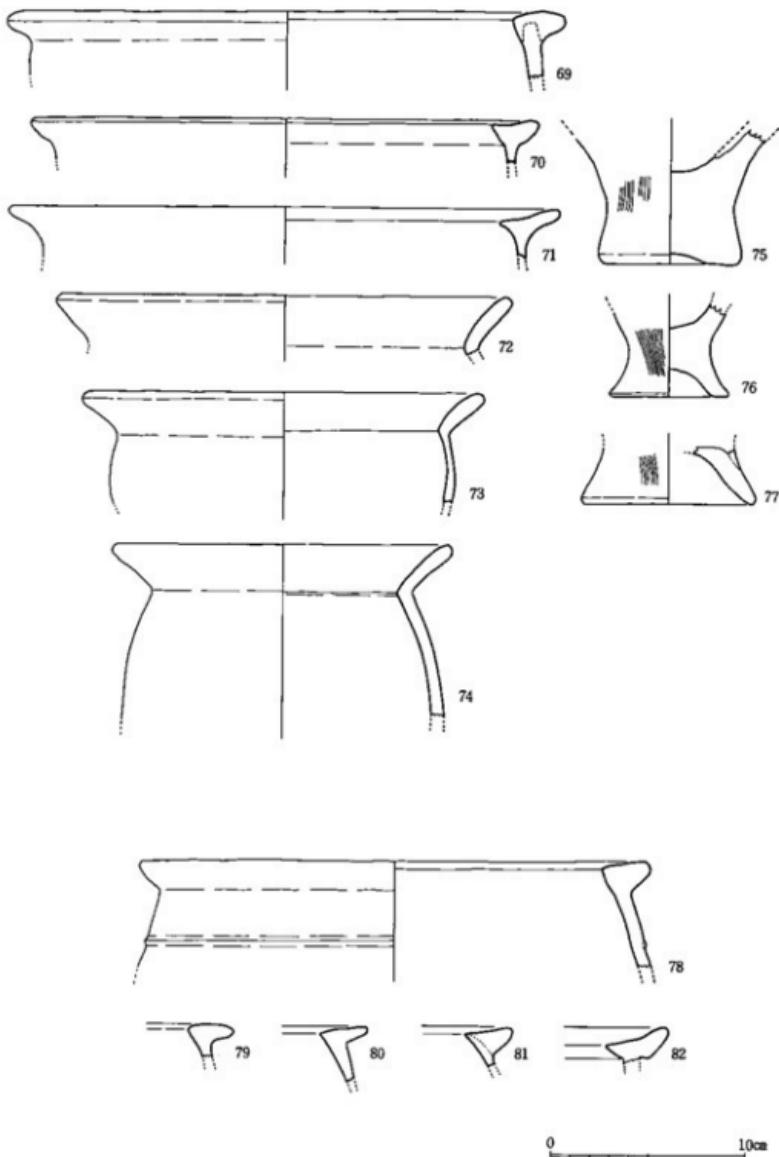
第33図 7号住居跡出土土器実測図 S=1%



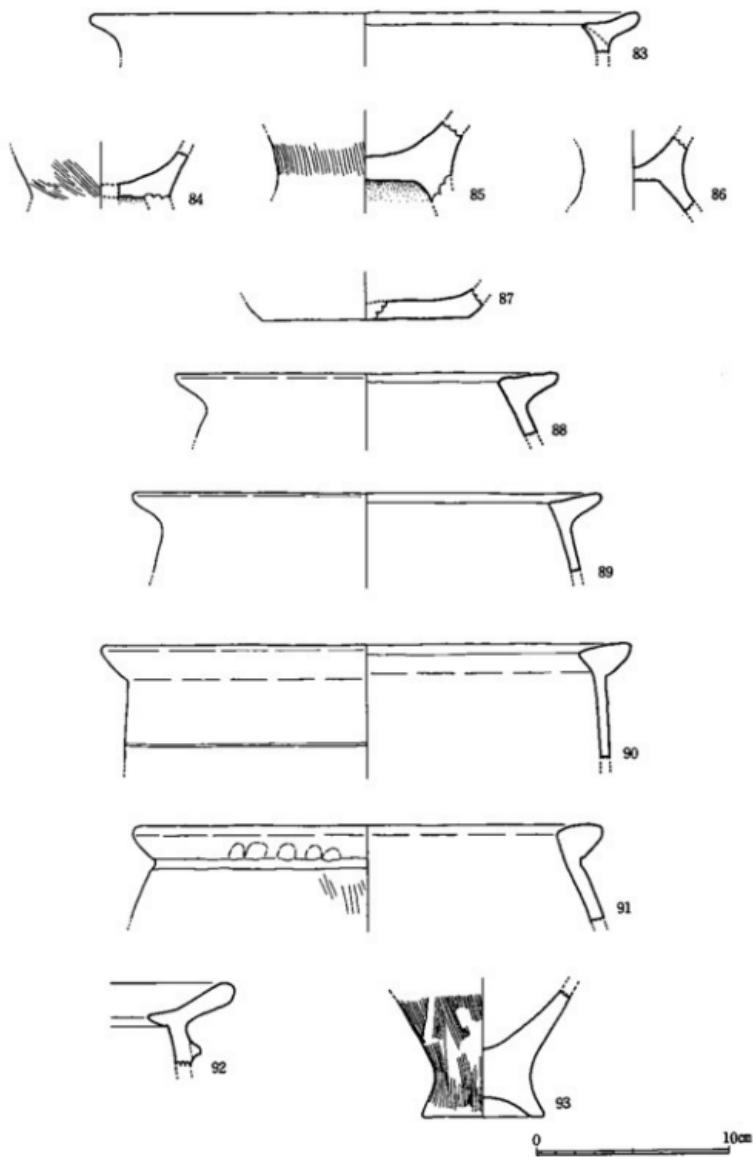
第34図 8~10号住居跡出土土器実測図 S=1/8



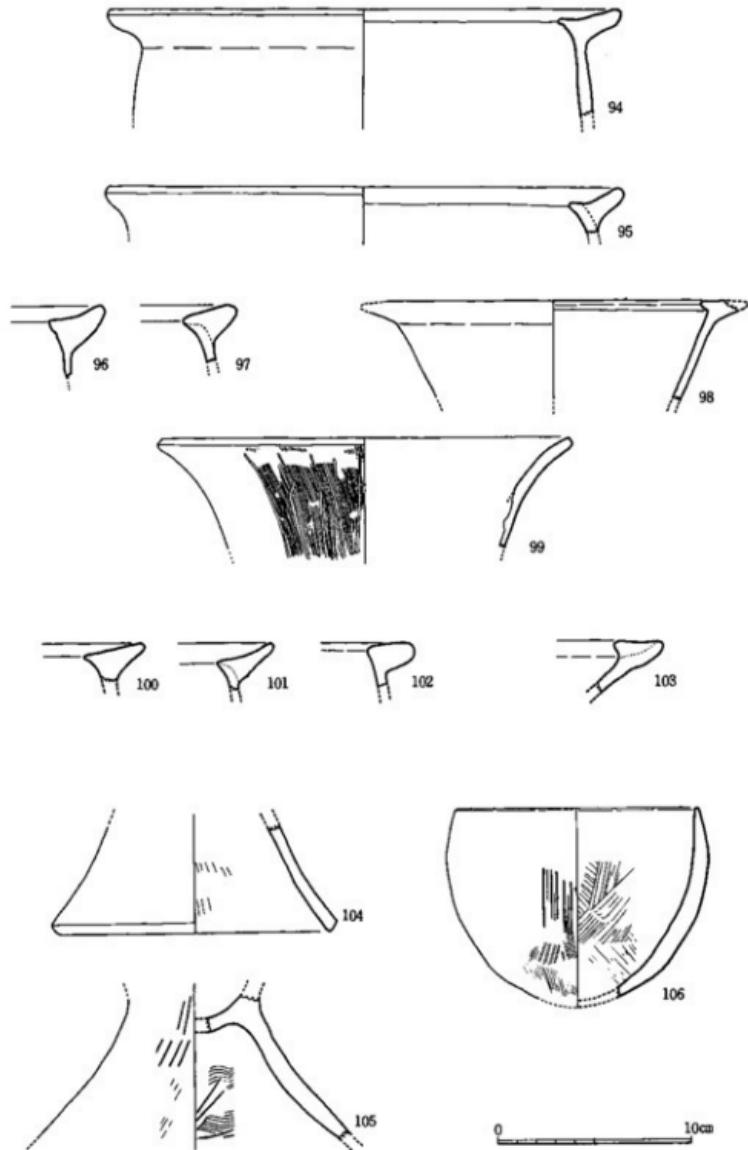
第35図 11~13号住居跡出土土器実測図 S=1%



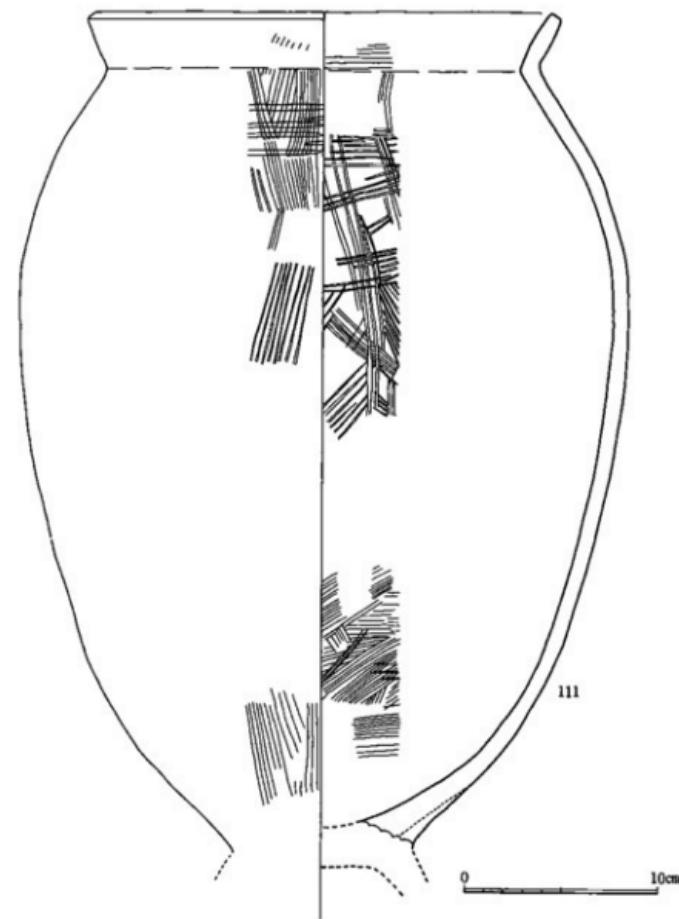
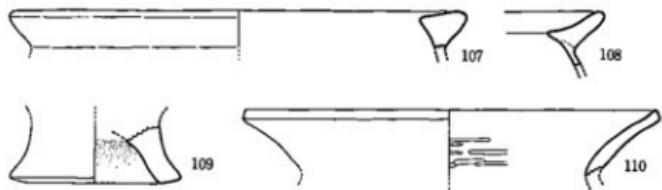
第36図 14・15号住居跡出土土器実測図 S = 1/4



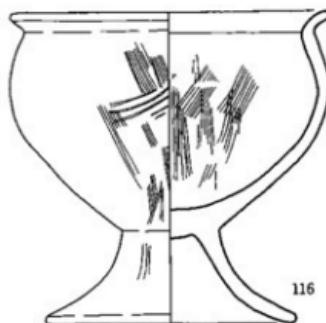
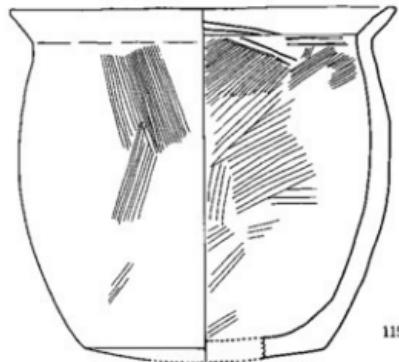
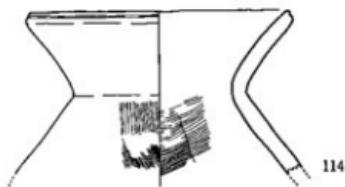
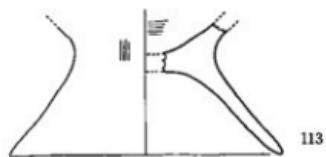
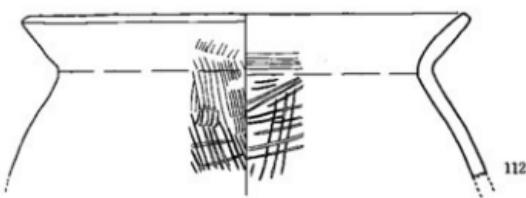
第37圖 16・18号住居跡出土土器実測図 S=1/2



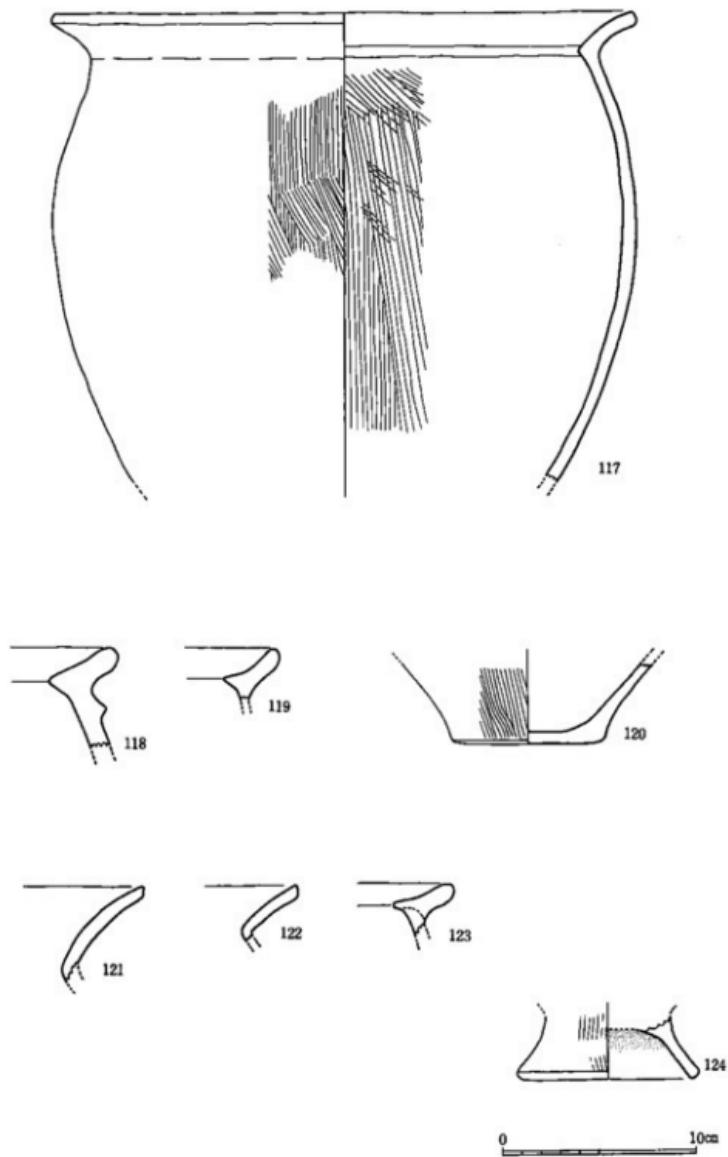
第38図 20~22号住居跡出土土器実測図 S=1/4



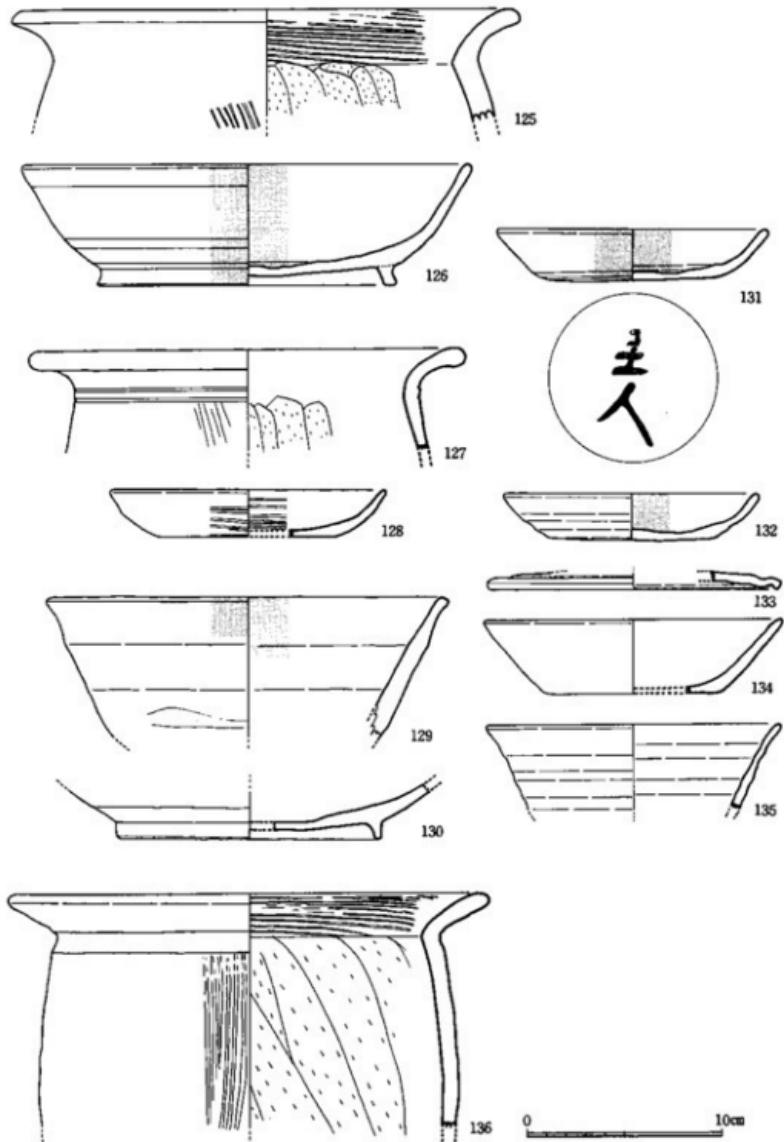
第39図 23・24号住居跡出土土器実測図 S = 1/2



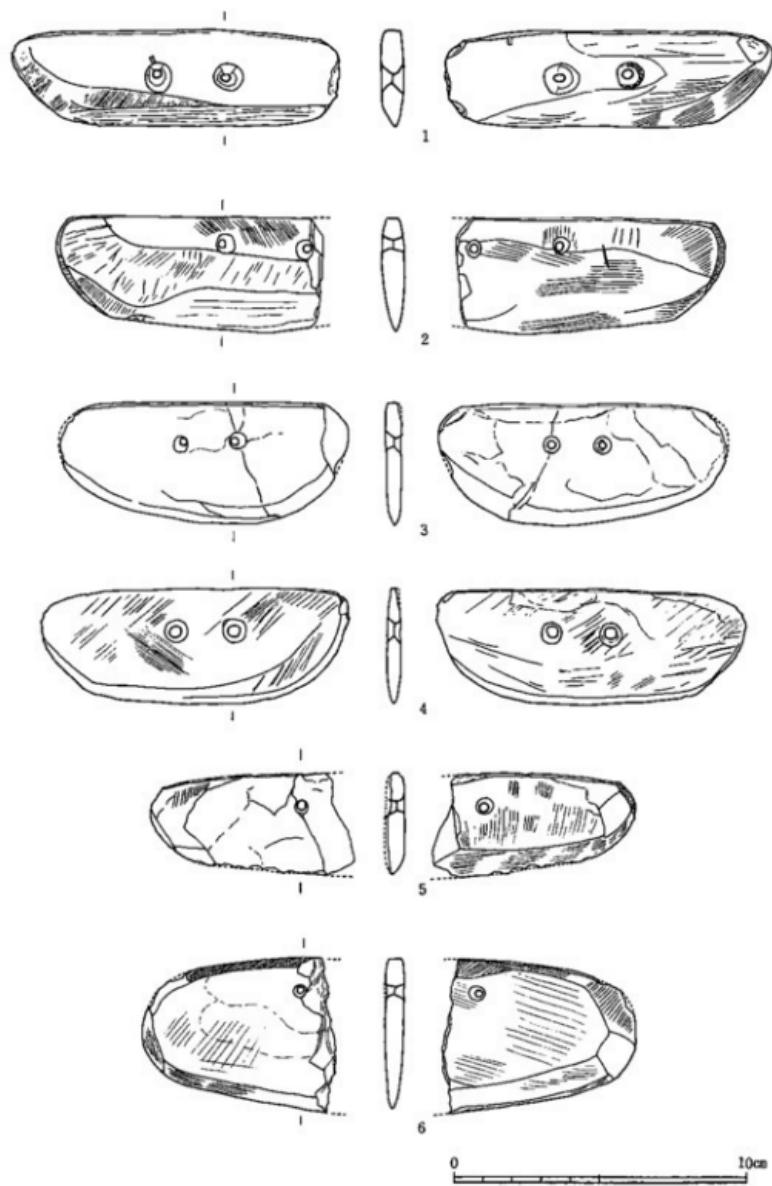
第40圖 24號住居跡出土土器實測圖 S = 1/2



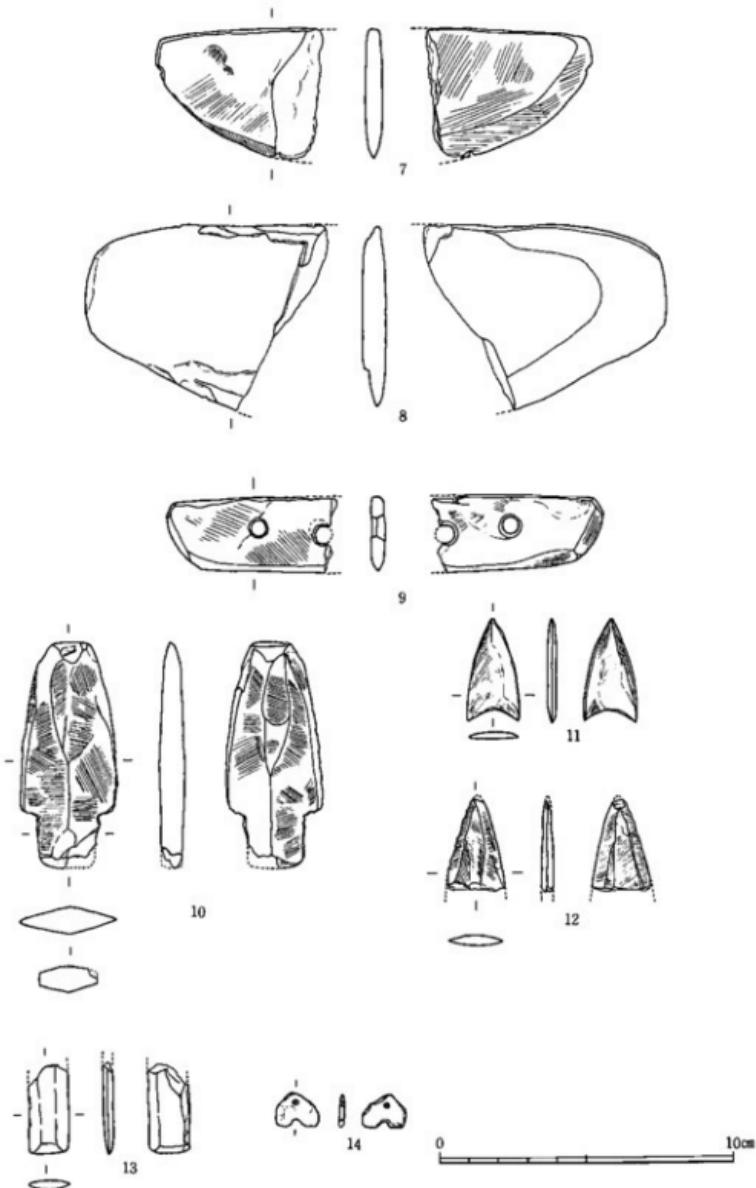
第41図 25~27号住居跡出土土器実測図 S=1/2



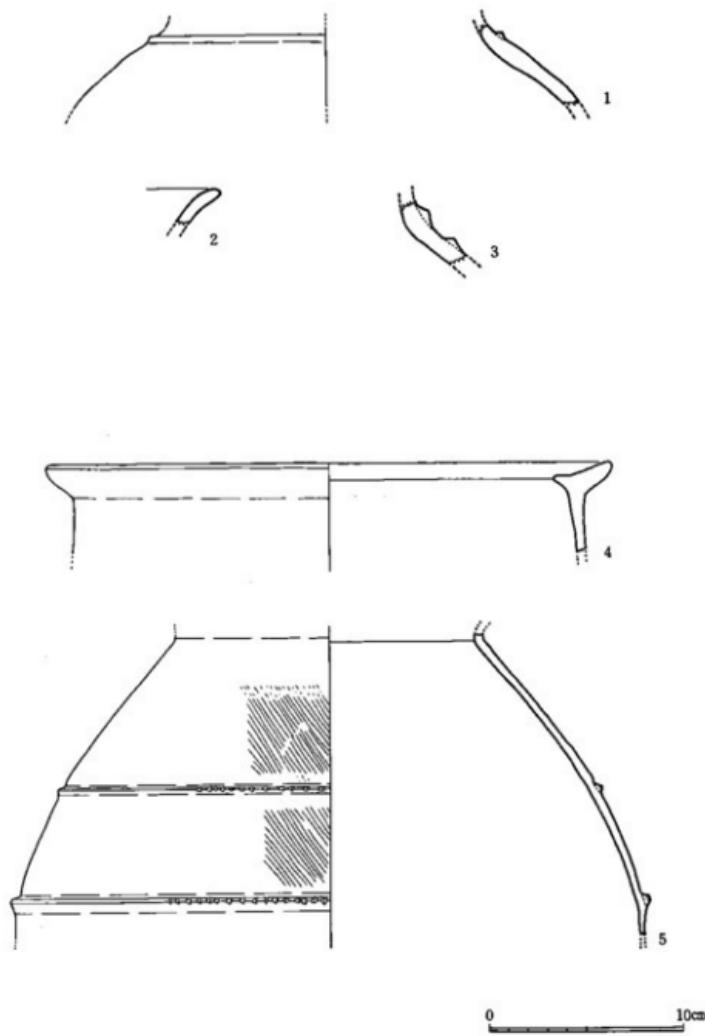
第42図 29~32号住居跡出土土器実測図 S=1/2



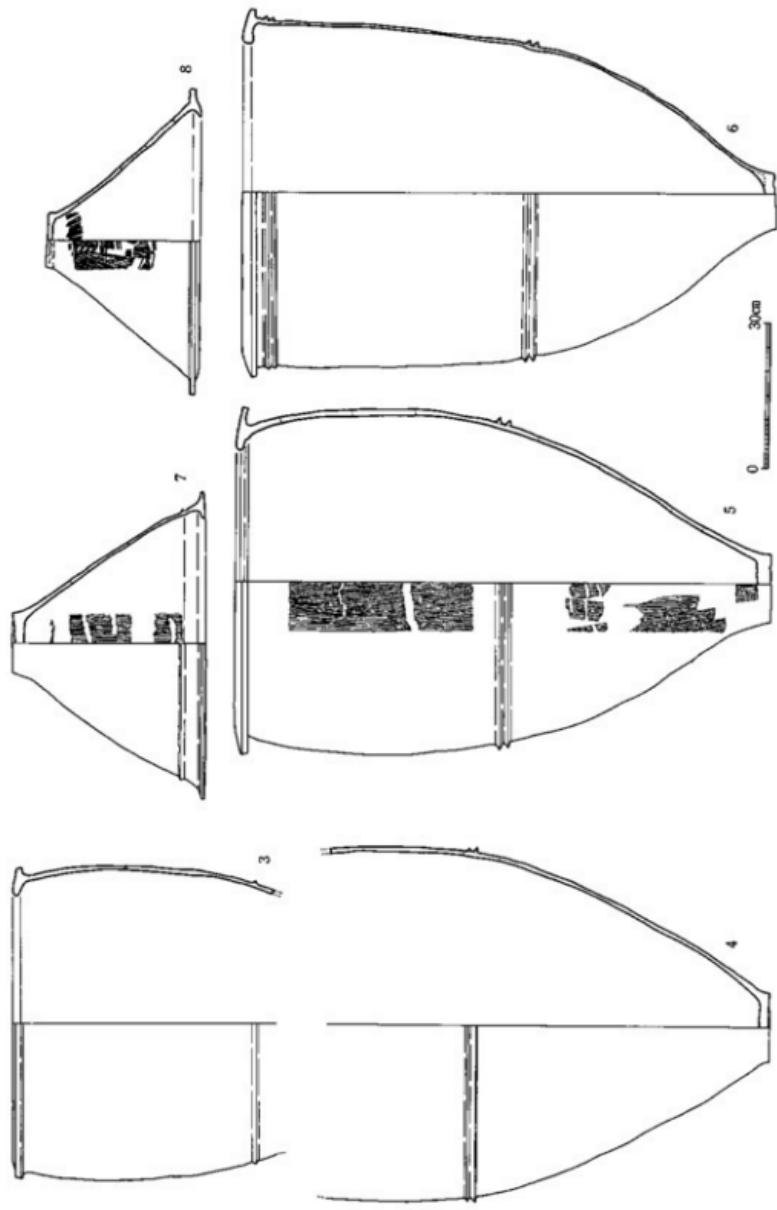
第43図 発生時代の石器実測図 S = $\frac{1}{2}$



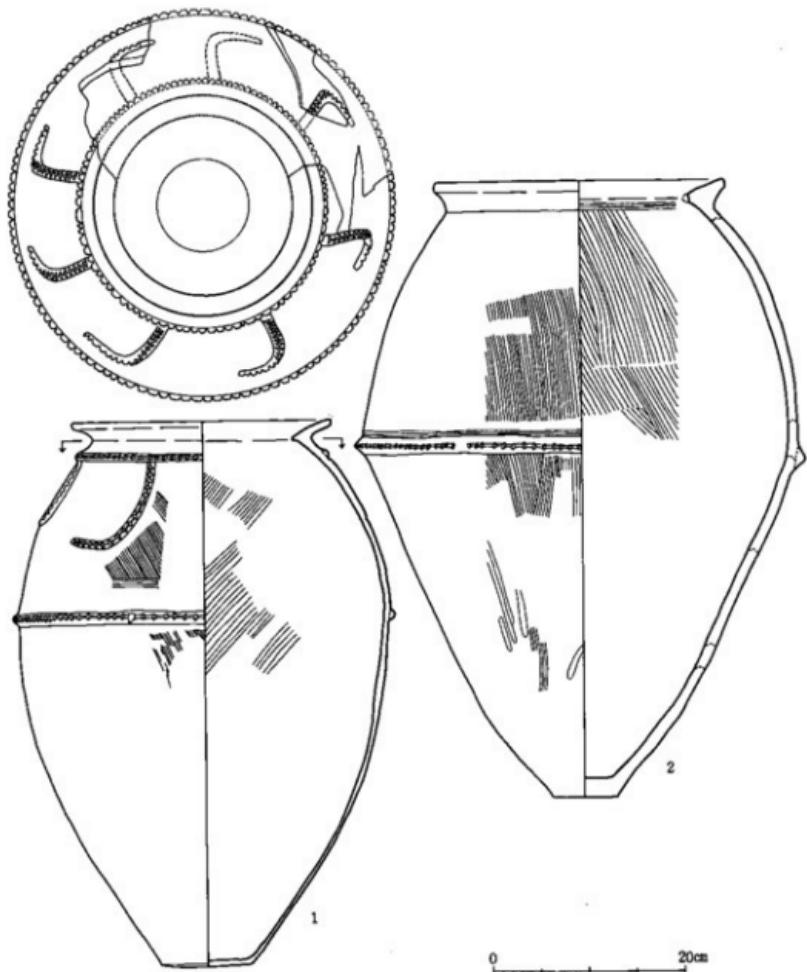
第44図 弥生時代の石器と石製品実測図 S=1/2



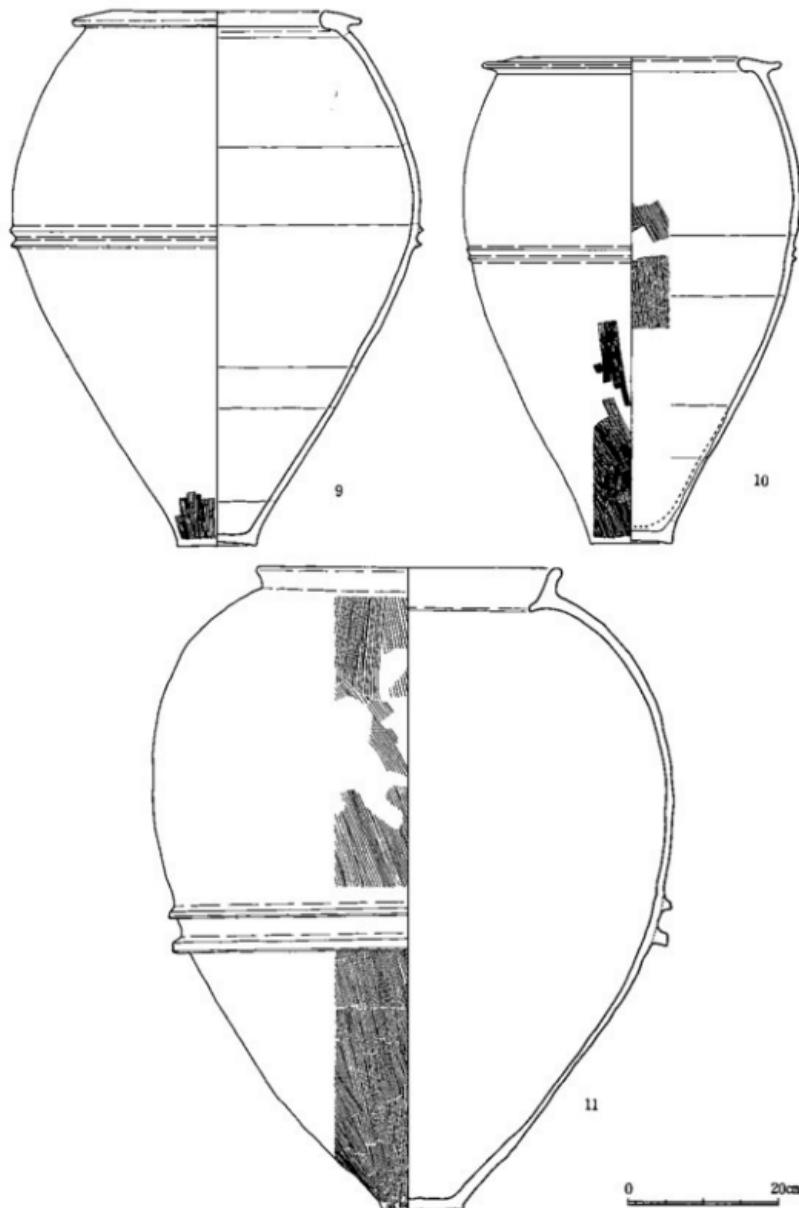
第45図 1号支石墓・2号土塚出土土器実測図 S = 1/2



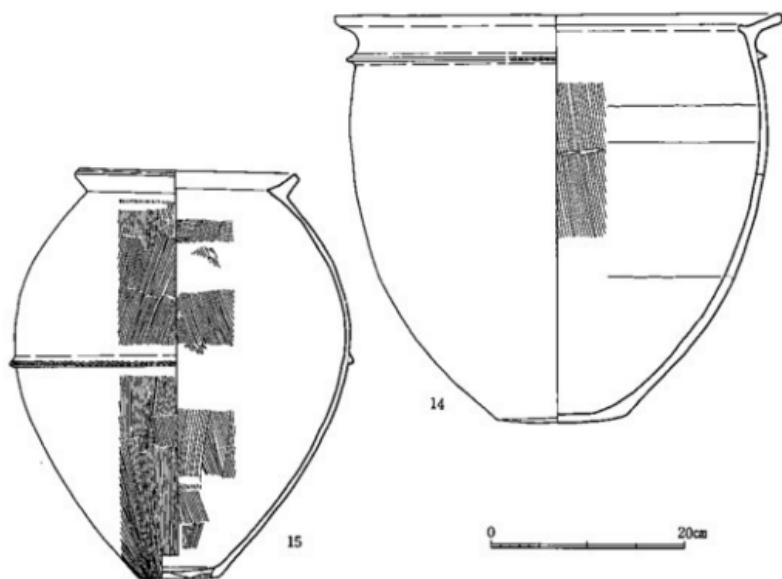
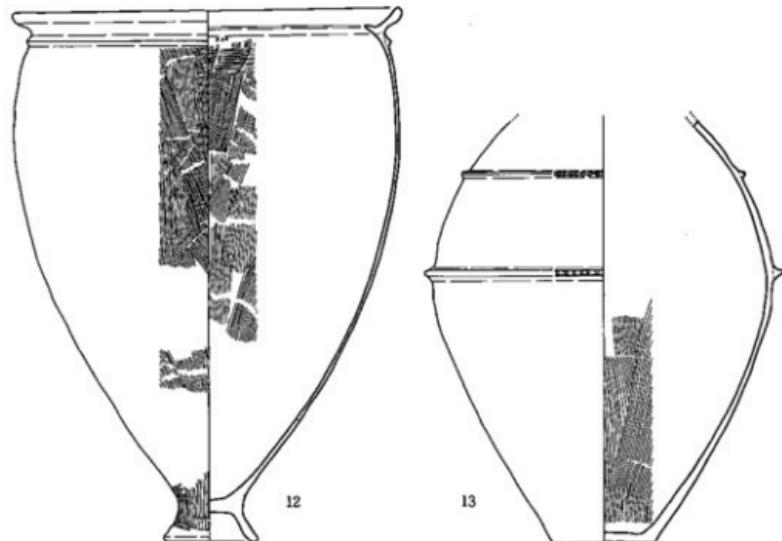
第46圖 1號墓室・秦始皇陵出土陶棺實測圖 S=1/2



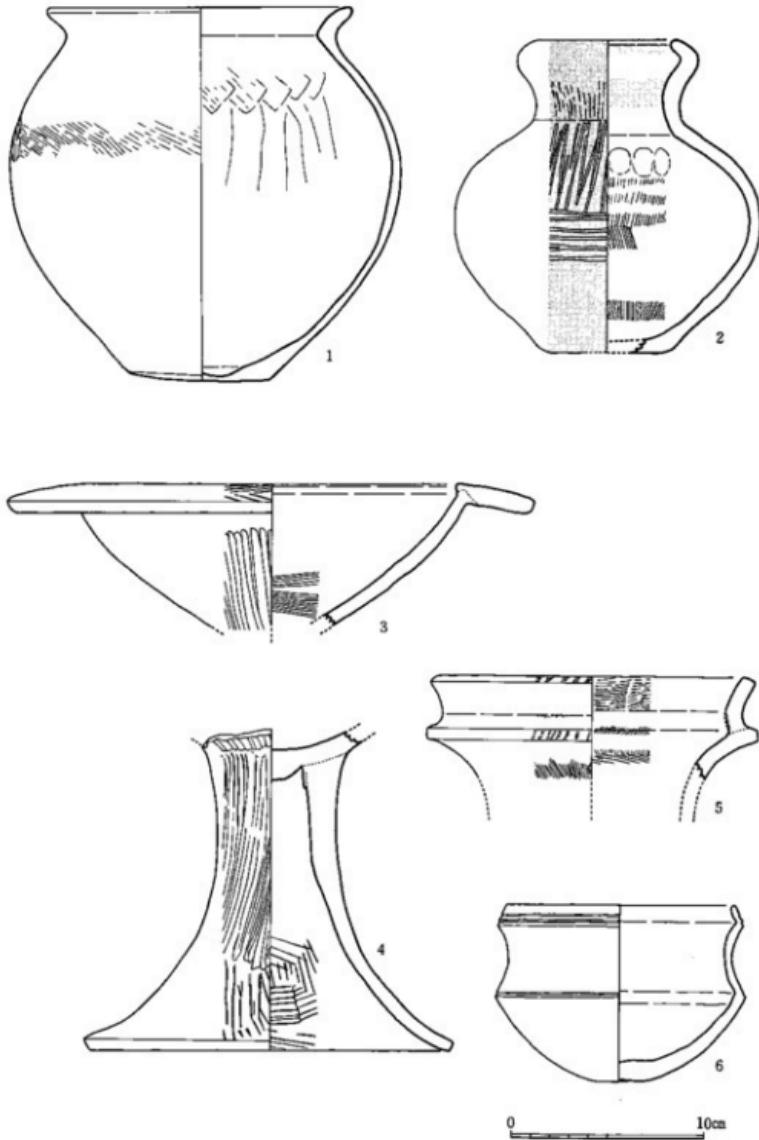
第47圖 2·4號墓出土漆棺實測圖 S=1%



第48図 塚坊主・北方墓群出土塚棺実測図 S = 1/8



第49圖 北方墓群出土漆棺實測圖 $S = \frac{1}{6}$



第50図 塚坊主出土土器実測図 S = $\frac{1}{2}$

く張り出す。内外面とも横撫でを施す。胎土はやや粗で大粒の石英を含む。焼成は良好で、灰褐色を呈する。口縁部外面には煤が付着する。

5は壺形土器の胴部上半の破片で、肩部と胴部最大径のところにそれぞれ1条づつ刻目を入れた三角凸帯を貼りつける。外面は斜方向の刷毛目を施し、内面には撫でを施す。胎土は密で、焼成良好、黄褐色を呈する。

10. 「塙坊主」内土器溜出土土器（第50図）

1はほぼ完形で、口径16.0cm・器高19.4cm・底径7.55cmを測る壺形土器である。口縁部は上面が丸みをもって外反する「く」字形口縁で、口唇部は丸い。胴部の最大径はやや上半にあり、球形状に近い。底部は凸レンズ状に丸みをもつて安定性に欠ける。口縁下のくびれ部の外面には、幅1.1cmほどで器表面が汚れておらず白くなっている部分がめぐらしく、ここに紐を巻いて使用したものと推定される。胴部上半の外面は縦・斜方向の刷毛目を施した後、横方向に撫でを施し、内面は縦方向の指頭による押し撫でと斜方向の刷毛目を施す。胴部下半では外面を箒状工具によって縦方向に撫でつけ、内面を縦方向に撫でを施す。胎土は密で雲母や石英の砂粒を含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。2号土器溜めよりの出土。

2はほぼ全形の知れる袋状口縁壺で、口径7.1cm・器高16.25cm・底径6.0cmを測る。袋状の口縁はまだ丸みをもっており、稜線はみられない。頸部は太く短かく、胴部は球形状に張り出す。底部は平底である。外面は頸部と胴部下半に縦方向の刷毛目を施し、胴部上半以上を横撫でし、胴部上半を縦方向に下半を横・斜方向に箒磨きを加える。内面は縦方向に刷毛目を施した後に、部分的に横方向の撫でを施し、肩部に指頭による圧痕を残す。口頸部と胴部の外面および頸部の内面に丹が塗られている。胎土には雲母・石英の砂粒を含み、焼成は良好で、外面は黄褐色を内面は黒灰色を呈する。2号土器溜めよりの出土。

3は高杯の杯部片で、口径27.6cmを測る。口縁部は上面がやや丸みをもち、外に低く傾斜して口唇部に面をもつ。内側に小さな張り出しがあり、ゆるやかに内弯する胴部につづく。口縁上面は2方向による刷毛目を施しており、口頸部内外面は横撫でが施される。胴部外面は縦方向の箒磨きが施され、内面は横方向の刷毛目を施した後に下半を横方向に箒磨きする。胎土に石英粒を含み、焼成は良好で明褐色を呈する。2号土器溜め出土。

4は高杯の脚部片で、底径19.3cmを測る。脚部は曲線的に大きく開き、先端は角張る。外面は縦方向の刷毛目を施した後に脚部上半を縦方向に箒磨きする。内面は脚部中位を縦方向に、下位を横方向に刷毛目を施す。胎土・焼成・色調は3と同一である。

5は複合口縁壺の口頸部片で、口径16.8cmを測る。口縁拡張部は直立気味に外反し、各口縁先端に面をもち、ここに櫛状工具によって列点文を施す。外面には縦方向の刷毛目を施し、横撫でを加える。内面には横・斜方向の刷毛目を施している。胎土は密で全く砂粒を含まず、焼

成良好で赤褐色を呈する。3号土器溜め出土。

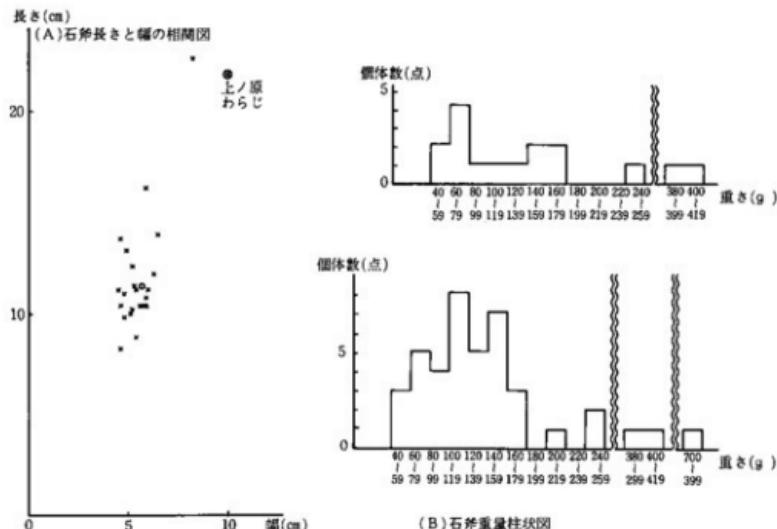
6は縄文土器で、口径12.25cm・器高9.2cm・底径2.45cmを測る浅鉢である。口縁部は内湾し、2条の凹線をもつ。頸部は強く外反し、胴部との境は「く」字形となり、ここに1条の凹線をもつ。底部は低い上底となっている。内外面とも横方向に丁寧な磨きを施す。口頸部外面には煤が付着する。胎土には0.5mm前後の長石・角閃石・蛭石を含み、焼成は良好で暗褐色～黒褐色を呈する。

11. 打製石斧について

打製石斧については総点数で41点を数えることができる。この内完成品とおよそ長軸面で半折としたと考えられる資料について、重量及び長さ、幅を別表（表5）に示した。

まず幅と長さについて見ると幅は4～6cm、長さは10～13cmの間にほとんどはいる。蛇紋岩の磨製石斧が1点採集されているが、これもこの範囲にはいる。これらの打製石斧が耕作用具または土堀り具として使用したものであれば草取り具又は中耕としての用具であろう。資料中最大のものは幅8.4cm、長さ23.4cm、重さ715gでこれは上ノ原遺跡出土のわらじ型の打製石斧とほぼ法量が同じである。おそらく現在の唐鍬に似たような荒おこしなどに使用されたものであろう。なお、半折品ではあるが刃部が広く基部が小さくなっている大型品もある。

重量について柱状グラフ（図51）を見ると100g～150g位に一つの山がある。半折品では



第51図 石斧法量図

第5表 石器観察表

No.	長さ×幅×厚さ	重さ(g)	技法	原石面	備	考
1	11.7×5.8×2.6	225	磨	/	蛇紋岩	
2	23.4×8.4×2.6	715	打	○	H 6	近代溝
3	14.3×6.6×2.1	215	打	○	H 8	近代溝
4	11.5×4.9×2.1	176	打	○	G 5	近代溝
5	11.6×6.1×2.2	158	打	○	Q 8	2 L S K 03
6	16.8×6.1×0.8	157	半磨	/	粘板岩	S 7 N09
7	12.1×4.8×1.7	155	半磨	○	H 8	水路
8	(11.7)×5.5×2.6	143	打	○	(先端部欠)	Q 8 S X01 2層
9	(12.4)×6.4×2.3	142	打	/	Q 8	塚さん
10	13.6×5.0×1.9	134	打	○	F G - 5	近代溝
11	12.7×5.3×1.9	125	打	/	Q 8	S X01 3層
12	11.7×4.6×1.9	125	打	○	I 7	2層
13	10.4×5.2×1.7	114	打	/	G 4	2層
14	11.8×5.4×1.3	114	打	○	—	
15	10.6×5.7×1.4	110	打	/	Q 8	S K 03
16	(10.4)×5.3×1.4	105	打	○	G 7	2層
17	11.2×6.0×1.4	105	打	○	G 5	2層
18	(10.9)×6.0×1.0	104	打	○	H 5	溝
19	(9.2)×5.5×1.2	100	打	/	粘・板岩	H 5 溝
20	(10.7)×5.9×1.2	90	打	/	I 7	2層N09
21	10.7×4.8×1.5	88	打	/	G 7	2層
22	10.2×4.9×1.5	85	打	/	Q 8	S X01
23	(8.6)×4.7×1.3	70	打	/	G 4	2層
24	(12.1)×8.7×4.2	400	打	/	半折	N 6 表土
25	(13.0)×8.8×2.6	380	打	○	半折	Q 8 S X01-3
26	(10.3)×6.8×2.3	245	打	○	半折	Q 8 S X01-3
27	(10.8)×6.6×1.6	175	打	○	半折	Q 8 塚さん
28	(10.1)×5.6×2.6	160	打	/	半折	Q 8 S X01-3
29	(9.9)×5.0×1.9	140	打	/	蛇紋岩・半折	塚さん
30	(9.1)×5.8×1.9	140	打	○	半折	H 5 2層

31	(8.9)×6.6×2.3	130	打	○	半折	Q 8	S X01-3
32	(9.2)×5.9×0.9	100	磨	/	半折	K 4	上攢乱
33	(8.2)×5.8×1.6	85	打	/	半折	Q 8	S X01 3層
34	(7.0)×5.1×1.6	75	打	○	半折	Q 8	S X01 3層
35	(6.6)×5.4×1.2	70	打	/	半折	G 4	2層
36	(6.7)×5.2×1.5	70	打	○	半折	—	
37	(5.2)×5.5×1.7	60	打	○	半折	—	
38	(6.4)×5.8×1.1	50	打	○	半折	G 4	2層
39	(6.6)×4.6×1.2	40	打	/	半折	G 4	2層
40	(4.6)×4.1×0.8	20	打	/		G 4	2層
41	(4.9)×4.2×1.5	20	打	/	粘板岩	G 4	2層
42	5.0×6.2×1.6	54	打	○	石錐	G 4	2層
43	7.9×8.6×1.9	120	打	○	円盤型	G 4	2層
44	(13.0)×8.9 —	910	磨	/	玄武岩今山型石斧櫛尾		
45	14.3×7.6 —	750	磨	/	々	川上村	
46	(15.3)×8.9 —	1,030	磨	/	々	秋永	
47	25.8×10.5×0.4	885			五木村焼畑用テンガア(鍬)()は折損 のため現在の長さを示す。		

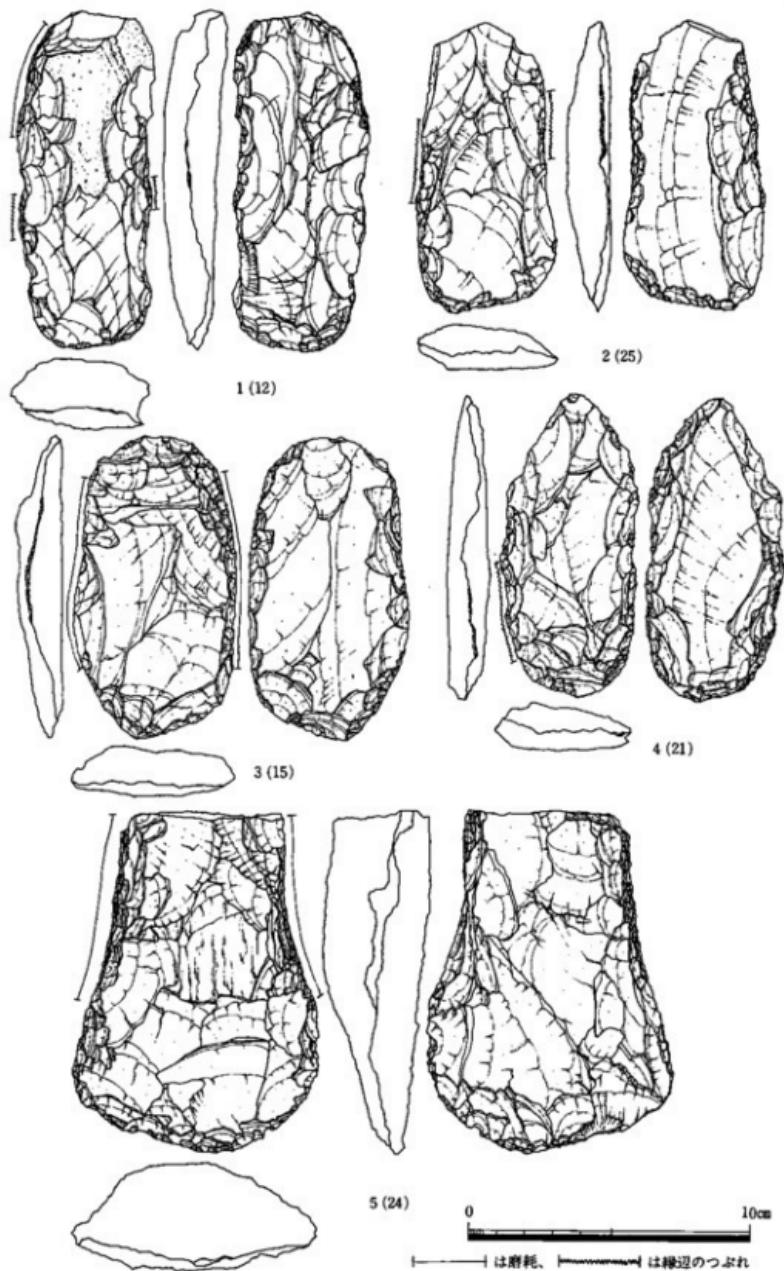
60~70gに山が見られる。現在使用されている五木村の手鍬で見ると885gである。

製作方法について見ると径20cm位の原石から横長剥片をつくり、その側面を2次加工し上下を整え一端に刃部を作くる。横断面を見ると片方が必ず厚くなつており、又原石の表面を必ず観察することができる。遺跡内からの接合作業は困難のようであるが、剥離面をもつ原石らしいものも採集されている。石質はほとんど安山岩であるが、図示したような粘板岩の薄手のものもある。又西合志町二子山石器製作址の石質と同じものも見受けられる。又住居跡内からの発掘品はないようであるが縄文晩期の所産であろう。

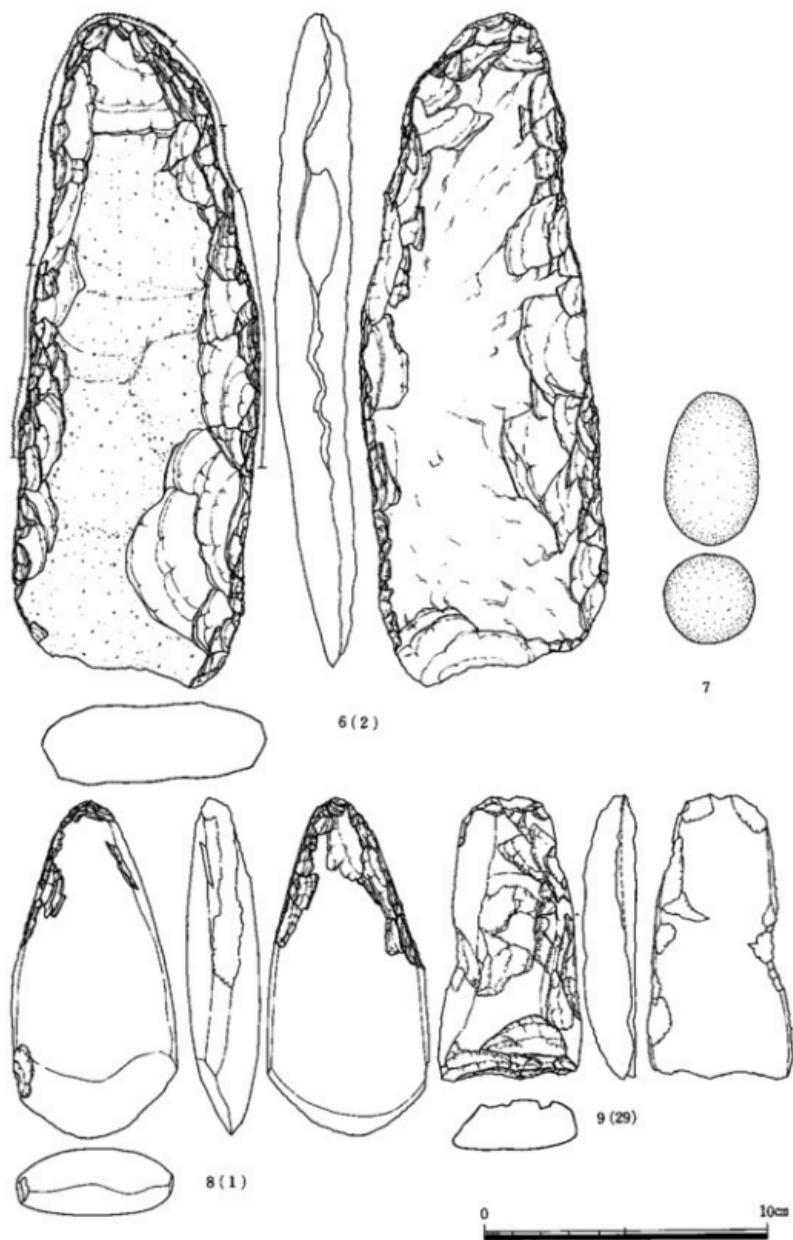
第41図は石器類の代表的なものを図化したものである。

5はいわゆる分銅形の欠損品のような形状を呈するが、欠損部にも加工を加えており、判別しがたい。9の刀部には使用時に生じた剥離が顕著である。なお、9の刀部以外の剥離痕は磨き残しの部分である。

10の上部にも使用時に生じた剥離が顕著である。11、12とも石核を転用した。スクレイバー、チッピングツールであろう。13はくぼみ部を中心に、赤色顔料がみられる。顔料の成分は不明である。(平岡)



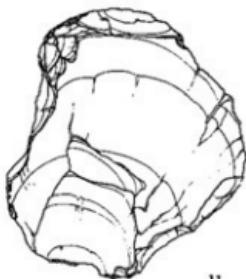
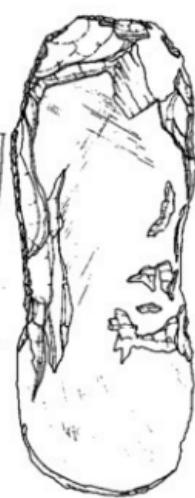
第52-1図 梅の木遺跡出土石器類（カッコ内数字は計測番号）



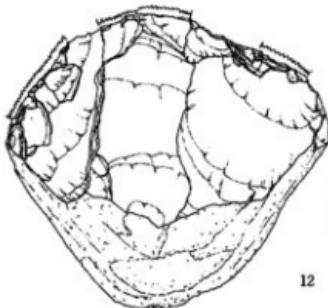
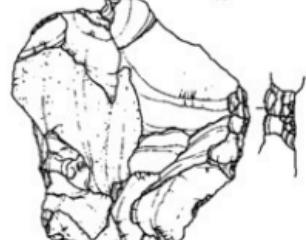
第52-2図 梅の木遺跡出土石器類



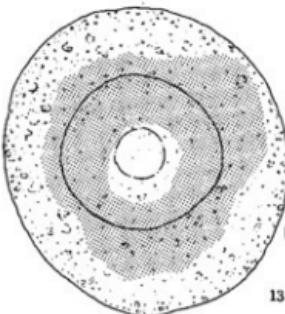
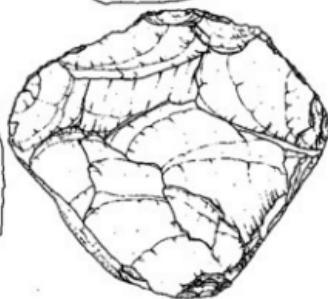
10(6)



11



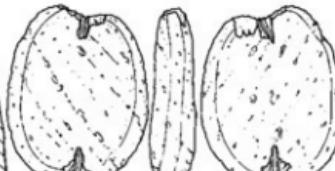
12



13



14(42)



第52-3図 梅の木遺跡出土石器類

12. 投弾について

福岡市板付「板付会館遺跡」より出土した投弾の実測値があるので比較のために記載しておく。I 7区出土資料番号No47でラグビーボールの形をしている。

番号	重さ(g)	長さ×径(cm)	番号	重さ(g)	長さ×径(cm)
D 2	23.2	4.7×2.6	13	10.5	3.4×3.5
3	21.2	4.6×2.4	14	12.2	3.6×1.8
4	18.4+a	4.3+a×2.4	15	14.8+a	4.2+a×2.5
5	23.5	4.3×2.5	D29	23.2	5.0×2.4
6	18.3	4.0×2.3	30	22.3+a	4.7×2.6
7	22.5	4.5×2.4	31	20.75	4.7×2.3
8	13.5	3.8×2.0	32	9.8+a	3.9+a×2.5
9	11.7	3.2×3.1	33	5.9+a	3.0+a×2.6
10	3.7+a	2.5+a×1.8	梅ノ木	26.4+a	4.8×2.6
11	5.2	2.5×1.5			
12	8.5	2.4×2.0			

(平岡)

第5章 総括

すでに詳細について各章で述べたとおりであるが菊陽町内では初めての住居跡調査となった。遺跡地は弥生時代中期から後期にかけての住居跡と周辺が壇棺墓を中心とする墓域として利用されたと考えられる。

支石墓は2基あって、1は支石を持ち下部に長階円形の土括があった。他は支石は失なわれていたが土括底部に近いところから人骨(歯骨)の出土をみた。支石墓の調査例が増えたことになる。時期を決定するような資料の出土はなかつたが弥生時代のものにまちがいないであろう。

住居跡は弥生時代の住居跡の上に、更に奈良時代の住居が4基検出された。弥生時代の住居跡からは石包丁などの生産用具とともに磨製石鎌や石剣なども検出された。土弾の発見も県内初例で、これによく似た石弾と考えられる小円礫なども採集された。

遺構としては検出できなかつたが、全面縄文のある竹崎式と考えられる土器片や、ヘナタリ貝の尾部による押圧文のある縄文晚期の土器、夜白式土器の壺、多数の打製石斧などは縄文文化が存在したことを有力に物語り、下津久礼のこの地が古い歴史を持つことが初めて明らかになつた。

また、奈良の住居跡からは、「□人」と記された文字がある坏が出土した。

最後に現地保存はできなかつたが菊陽町公民館前に支石墓の石組を複元した。将来は壇棺資料なども公民館に展示し町民に共したい。



遺跡遠景（北から）



遺跡遠景（南から）

図版 2



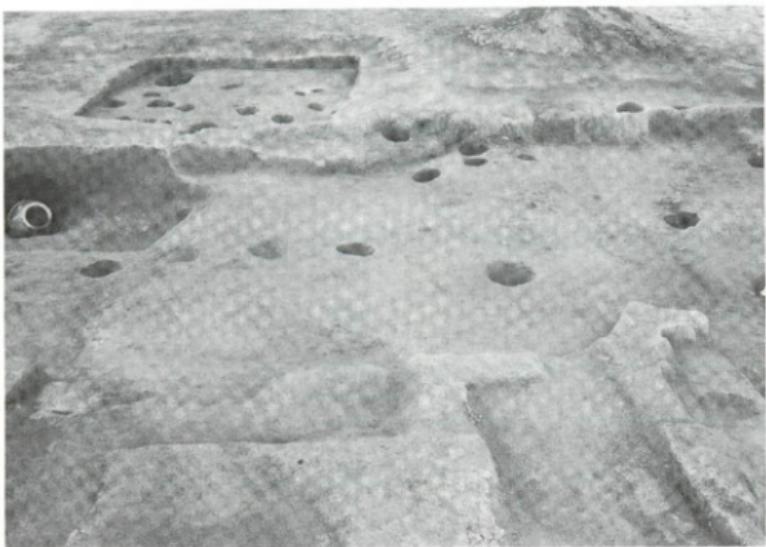
1号住居跡 (SB01) (東から)



2・3・4号住居跡 (SB02・03・04) (南から)



4号住居跡（SB04）（北から）

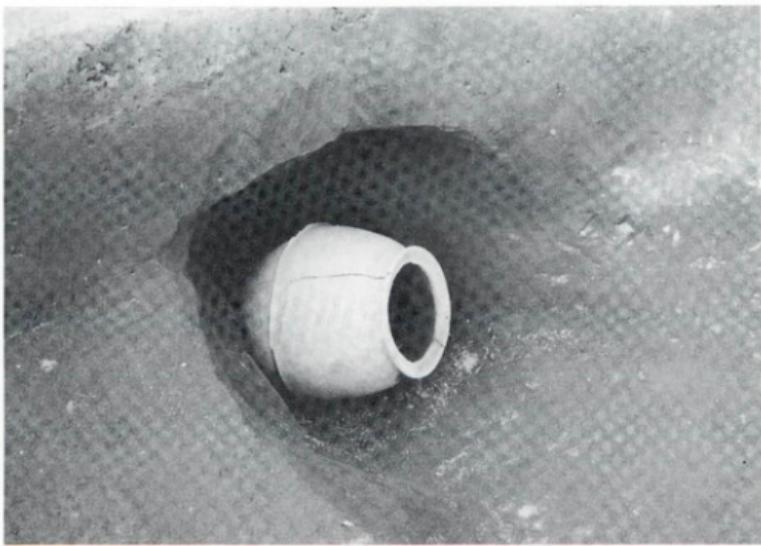


6号住居跡（SB06）（南から）

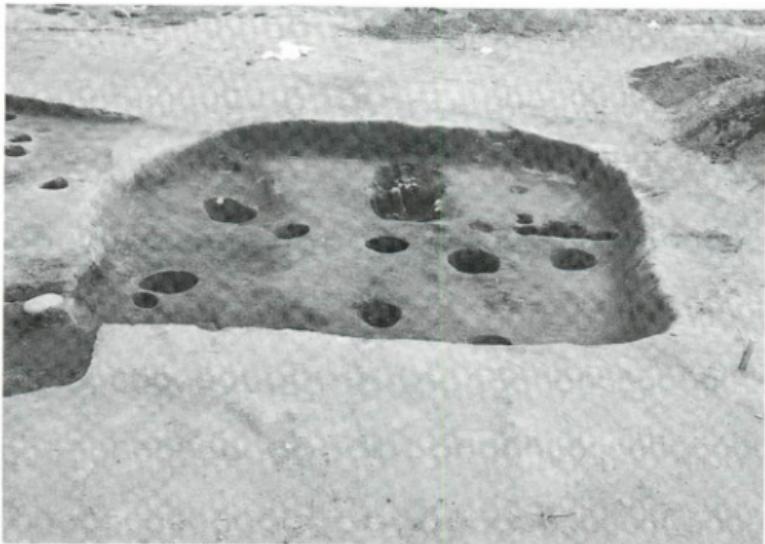
図版 4



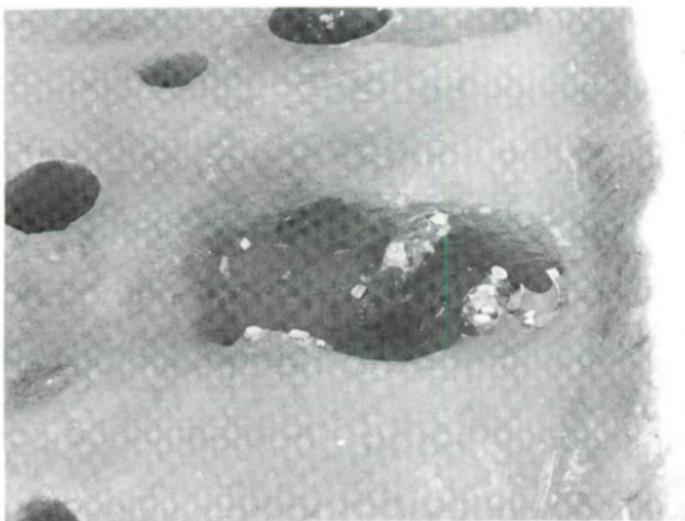
5号住居跡 (SB 05) (南から)



5号住居跡内壺 (4号壺) (南から)

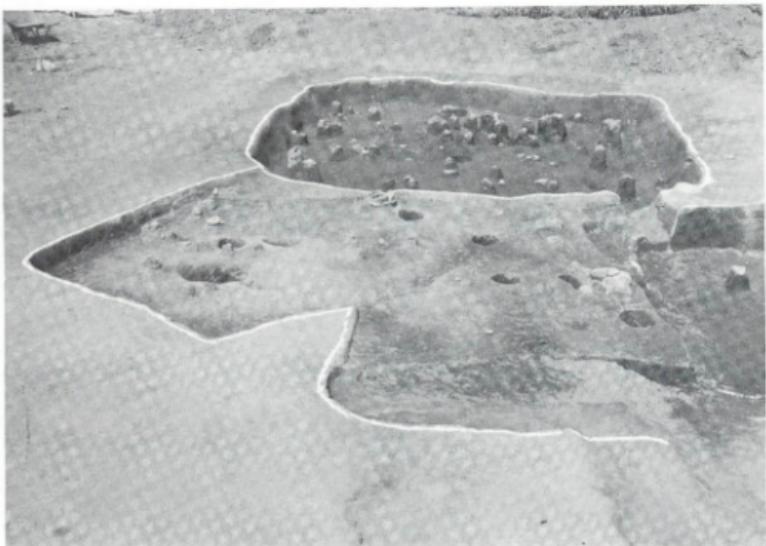


7号住居跡 (S B07) (北から)

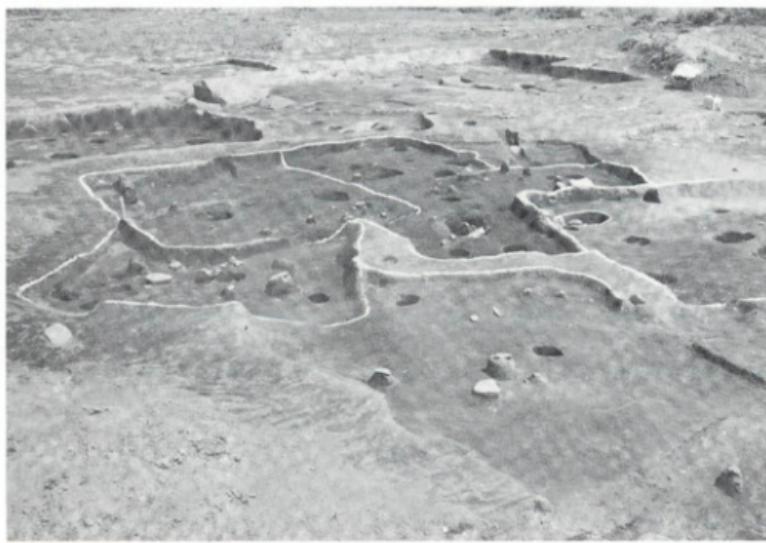


7号住居跡 (S B07) (西から)

図版 6



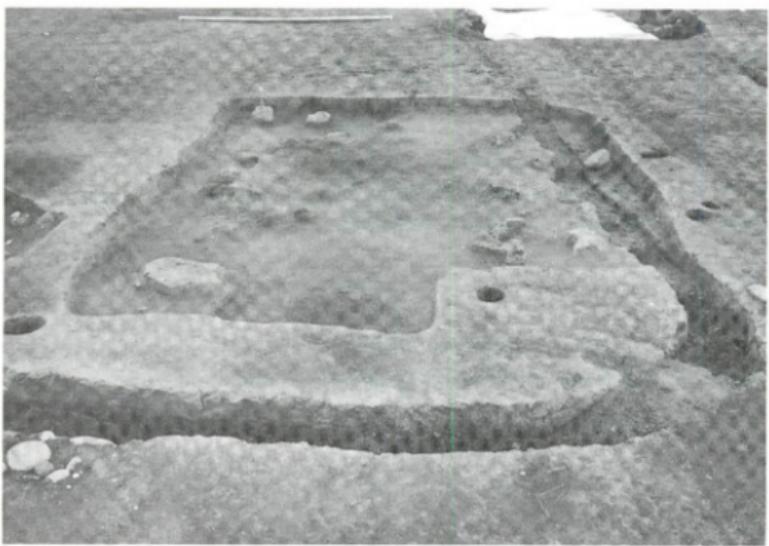
7・8・9号住居跡 (SB 07・08・09) (東から)



10・11・12・13・14・15号住居跡 (SB 10・11・12・13・14・15) (南西から)



14号住居跡 (S B14) (南西から)

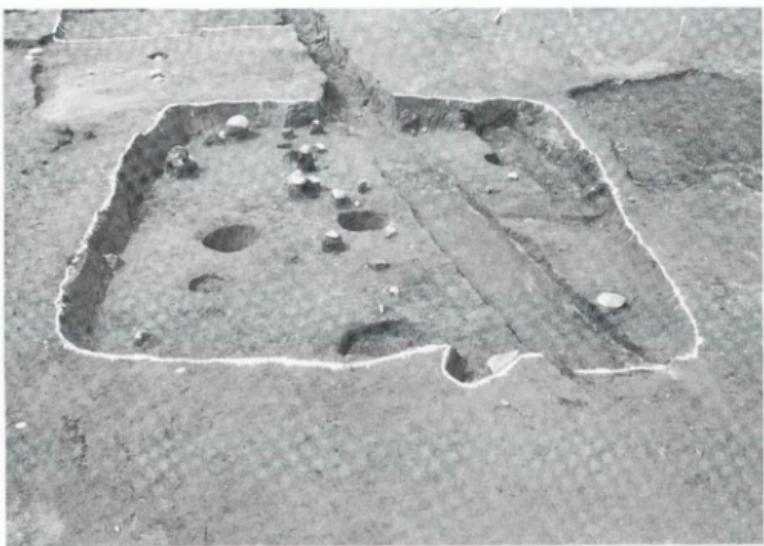


16号住居跡 (S B16) (南から)

図版 8



17号住居跡 (SB17) (西から)



18号住居跡 (SB18) (南から)

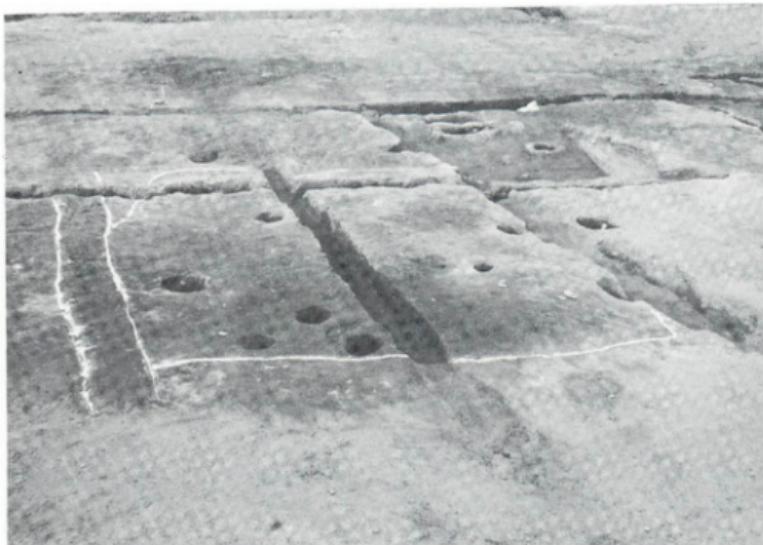


19号住居跡（S B 19）（南から）

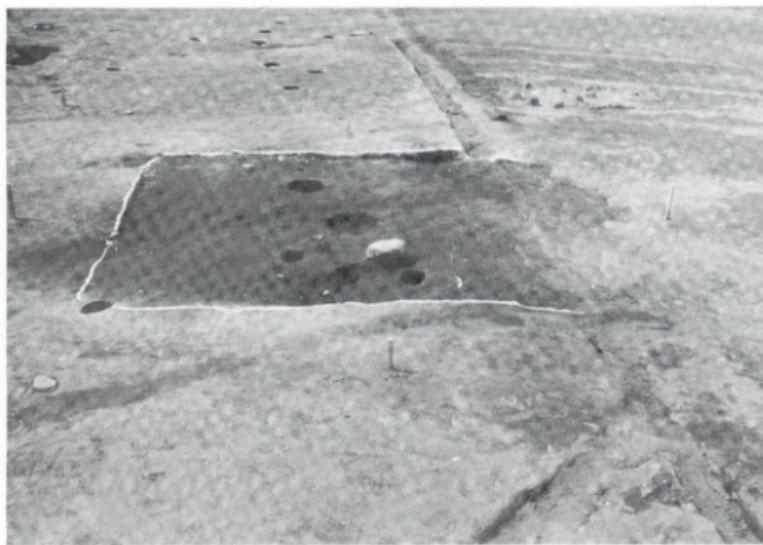


20号住居跡（S B 20）（東から）

図版10



21号住居跡（S B21）（東から）



22号住居跡（S B22）（南から）

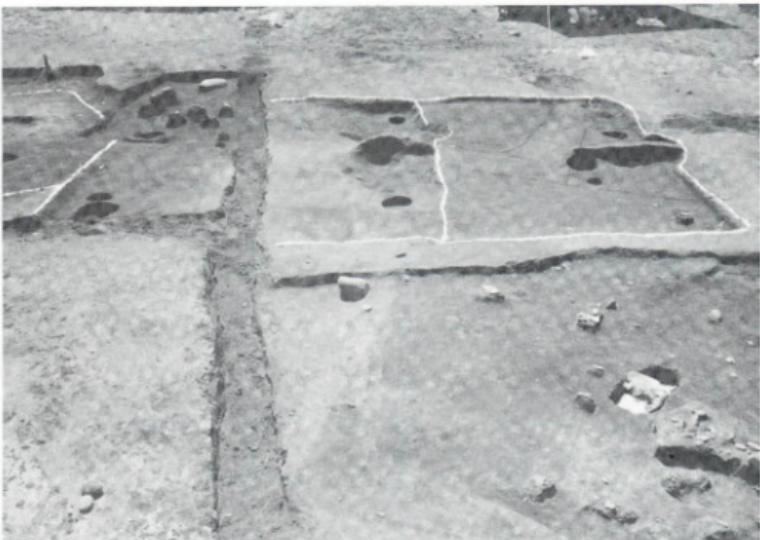


25号住居跡（S B25）（北から）



26・27号住居跡（S B26・27）（西から）

図版12



28・29号住居跡 (S B 28・29) (東から)



23・24・30・31・32号住居跡 (S B 23・24・30・31・32) (南から)

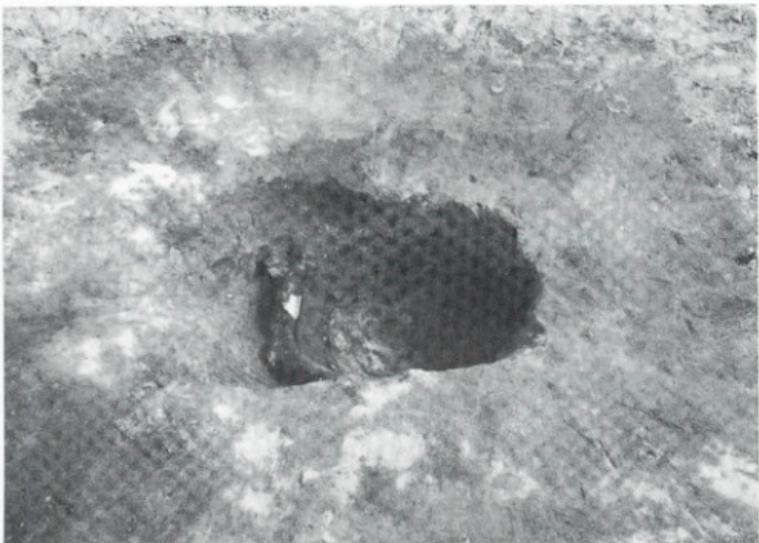


支石墓（西から）

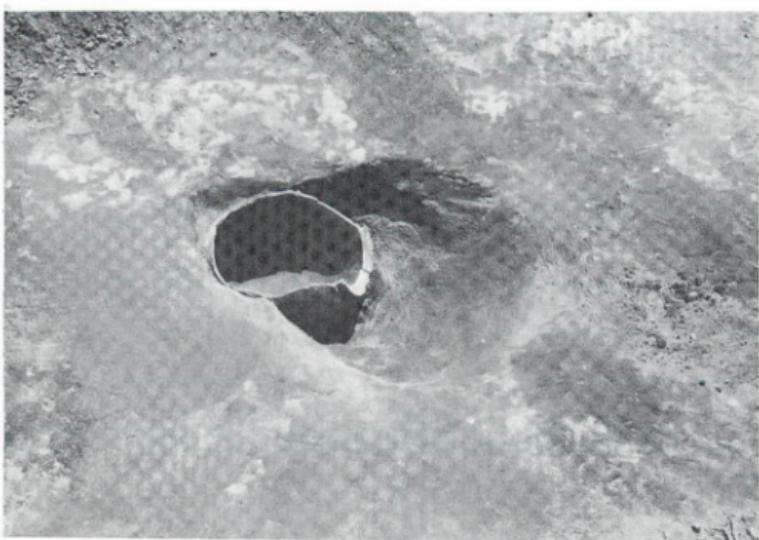


支石墓の土壙（北から）

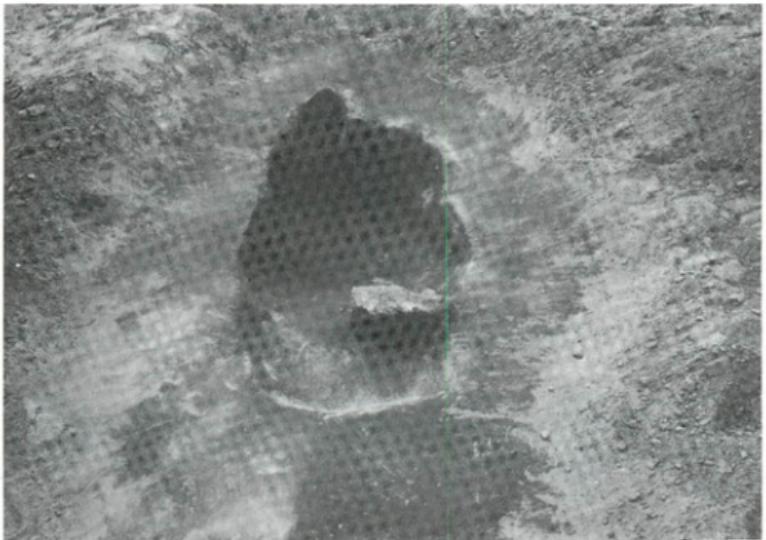
図版14



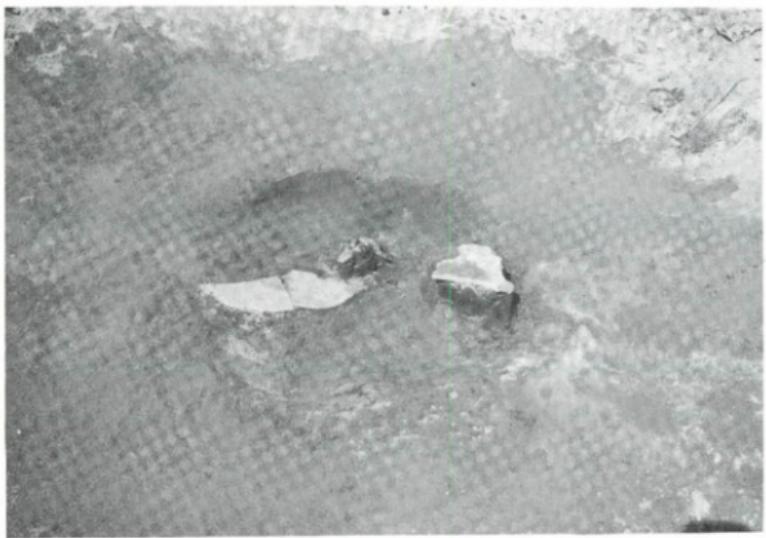
1号壺棺（東から）



2号壺棺（北から）



3号壺棺（北から）



1号土壤（北から）

図版16



2号土壤（東から）



塙坊主発掘前（北から）



塚坊主内土器溜1・2（北から）



塚坊主内土器溜3（西から）

熊本県文化財調査報告 第62集

うめ き
梅ノ木遺跡

—熊本県菊池郡菊陽地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告—

昭和58年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 新写植出版株式会社
熊本市健軍1丁目6-2
電話(0963) 67-1606

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 62 集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：梅ノ木遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日